

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第26集

高井遺跡

1996年2月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第26集

た か い い せ き
高 井 遺 跡

1996年2月

豊橋市教育委員会

例 言

1. 本書は豊橋市石巻本町字櫃割8において、土壌改良事業に伴って行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査期間は1次調査が平成3年4月25日～5月10日、2次調査が平成4年2月8日～3月19日である。
2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行い、贅元洋（当時豊橋市美術博物館学芸員）が調査を担当した。なお、発掘調査全般に渡って、地権者である大原丈一氏、及び三鈴興業株式会社から、それぞれご配慮・ご協力をいただいた。
3. 発掘作業及び整理作業については、地元の方々のご協力をいただいた。また、報告書作成にあたり、遺構・遺物の実測・トレース等については伊藤雅子・多田美香の援助を得た。写真撮影については贅が行った。
4. 本書の執筆は第6章、第7章4が鈴木敏則（浜松市博物館）、これ以外の執筆と編集は贅元洋（豊橋市教育委員会文化振興課）が行った。
5. 調査区の設定は任意であるが、道路方向を基準に豊橋市都市計画基本図（1/2,500）に投影し、方位については都市計画基本図上の建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅱ系に準拠した。また、遺構・遺物の縮尺はそれぞれについて明示した。写真の縮尺は明示したもの以外は任意である。実測図版と写真図版の遺物番号は対応している。
6. 本調査にあたって製作した写真・カラースライド・実測図等の記録、出土遺物は豊橋市教育委員会において保管・管理している。
7. 本報告書作成にあたり、以下の方々から資料の提供、ご教示等をいただいた。
赤塚次郎（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、石黒立人（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、伊藤厚史（名古屋市見晴台考古資料館）、佐藤由紀男（浜松市博物館）、鈴木徹（小坂井町役場）、鈴木敏則（浜松市博物館）、立花実（伊勢原市教育委員会）、中嶋郁夫（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所）、西川修一（神奈川県立埋蔵文化財センター）、橋本裕行（奈良県立橿原考古学研究所）、林弘之（豊川市教育委員会）、原田幹（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、春成秀爾（国立歴史民俗博物館）、前田清彦（豊川市教育委員会）、宮腰健司（財団法人愛知県埋蔵文化財センター）、向坂鋼二（浜松市博物館）（敬称略、五十音順）

目 次

第1章 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地	2
第3章 歴史的環境	3
第4章 遺構	
1. 方形周溝墓	5
2. 環濠	5
3. 溝	8
4. 竪穴住居	8
5. 掘立柱建物	9
6. 土塋	10
7. 廃棄土塋	11
第5章 遺物	
1. 方形周溝墓出土遺物	12
2. 溝出土遺物	13
3. 竪穴住居出土遺物	13
4. 掘立柱建物出土遺物	13
5. 土塋出土遺物	14
6. 廃棄土塋出土遺物	15
7. 表土・その他出土遺物	16
8. 縄文土器	16
9. 土製品	17
10. 石器	18
11. 玉	20
12. 鉄器	20
第6章 環濠(SD-1)出土土器	
1. 後期弥生土器の形態分類	21
2. 型式組列	42
第7章 考察	
1. 環濠(SD-1)の埋没過程の復元	56
2. 方形周溝墓の祭祀	61
3. 土器様式の変遷と技術的系譜	66
4. 三河の後期弥生土器の編年	69
報告書抄録	84

挿 図 目 次

挿図1	発掘調査区配置図 (1/400)	1
挿図2	SD-1 調査区・人工層位 (1/250・1/50)	7
挿図3	形態分類図-1 (1/6)	25
挿図4	形態分類図-2 (1/6)	28
挿図5	形態分類図-3 (1/6)	31
挿図6	形態分類図-4 (1/6)	33
挿図7	形態分類図-5 (1/6)	36
挿図8	形態分類図-6 (1/6)	38
挿図9	SD-1 高坏・器台出土断面図 (1/100・1/20)	44
挿図10	SD-1 復元層位と廃棄単位 (1/200・1/40)	57
挿図11	SD-1・D区5層土器出土状況図 (1/30)	58
挿図12	橋良遺跡SZ-01・02供献土器出土状況図 (1/100)	62
挿図13	朝日遺跡SZ-117・118、高井遺跡SZ-1出土供献土器 (1/6)	62
挿図14	三河の後期弥生土器編年図-1 (1/10)	74
挿図15	三河の後期弥生土器編年図-2 (1/10)	75
挿図16	三河の後期弥生土器編年図-3 (1/10)	76
挿図17	三河の後期弥生土器編年図-4 (1/10)	77
挿図18	三河の後期弥生土器編年図-5 (1/10)	78
挿図19	三河の後期弥生土器編年図-6 (1/10)	79

挿 表 目 次

挿表1	人工層位と遺物取り上げ番号との対応表	7
挿表2	高井遺跡土壌一覽表	11
挿表3	三河の器種構成	21
挿表4	西遠江の器種構成	22
挿表5	高井遺跡SD-1出土土器器種構成表	24
挿表6	形態分類図に使用した土器の掲載文献一覽表	39
挿表7	形態分類掲載土器一覽表	40
挿表8	型式分類案	41
挿表9	高坏の型式と廃棄ブロックの関係表	45
挿表10	層位・ブロック別出土遺物一覽表	47
挿表11	口縁部個別計測法による出土土器器種構成表	64
挿表12	底部部個別計測法による出土土器器種構成表	65
挿表13	弥生時代土器様式基本器種構成表	67
挿表14	三河・西遠江後期弥生土器基準編年遺構一覽表	73
挿表15	型式消長表-1	80
挿表16	型式消長表-2	81
挿表17	編年図使用土器の出土遺跡一覽表	82

図 版 目 次

- 第1図 高井遺跡周辺地形図-1 (1/20,000 1911年 大日本帝国陸地測量部「石巻山」)
- 第2図 高井遺跡周辺地形図-2 (1/25,000 1988年 国土地理院「豊橋」)
- 第3図 高井遺跡周辺地形図-3 (1/2,500 1980年 豊橋市都市計画基本図)
- 第4図 高井遺跡周辺地形復元図-1 (1/2,500 1980年 豊橋市都市計画基本図より作成)
- 第5図 高井遺跡周辺地形復元図-2 (1/15,000 1980年 豊橋市都市計画基本図より作成)
- 第6図 高井遺跡周辺遺跡分布図 (1/20,000 1980年 豊橋市-3 1/10,000より作成)
- 第7図 調査区全体図 (1/200)
- 第8図 方形周溝墓SZ-1実測図 (1/100)
- 第9図 SD-1断面図 (1/40)
- 第10図 SD-1・全体 (1~6層) 遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第11図 SD-1・6層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第12図 SD-1・5層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第13図 SD-1・4層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第14図 SD-1・3層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第15図 SD-1・2層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第16図 SD-1・1層遺物出土状況図 (1/20・1/100)
- 第17図 SB-1・2・3実測図 (1/50)
- 第18図 SB-4・5実測図 (1/100)
- 第19図 SB-6・7実測図 (1/100)
- 第20図 SK-1・10・11・13遺物出土状況図 (1/20)
- 第21図 出土遺物実測図-1 (1/3)
- 第22図 出土遺物実測図-2 (1/4)
- 第23図 出土遺物実測図-3 (1/4)
- 第24図 出土遺物実測図-4 (1/3・1/4)
- 第25図 出土遺物実測図-5 (1/3・1/4)
- 第26図 出土遺物実測図-6 (1/3・1/4)
- 第27図 出土遺物実測図-7 (2/3・1/2)
- 第28図 出土遺物実測図-8 (1/2・1/3)
- 第29図 出土遺物実測図-9 (1/3)
- 第30図 出土遺物実測図-10 (1/1・1/2・1/3)
- 第31図 出土遺物実測図-11 (1/4)
- 第32図 出土遺物実測図-12 (1/4)
- 第33図 出土遺物実測図-13 (1/4)
- 第34図 出土遺物実測図-14 (1/4)
- 第35図 出土遺物実測図-15 (1/4)
- 第36図 出土遺物実測図-16 (1/4)
- 第37図 出土遺物実測図-17 (1/4)
- 第38図 出土遺物実測図-18 (1/4)
- 第39図 出土遺物実測図-19 (1/4)
- 第40図 出土遺物実測図-20 (1/4)
- 第41図 出土遺物実測図-21 (1/4)
- 第42図 出土遺物実測図-22 (1/4)
- 第43図 出土遺物実測図-23 (1/4)
- 第44図 出土遺物実測図-24 (1/4)
- 第45図 出土遺物実測図-25 (1/4)

第46図	出土遺物実測図-26 (1/4)
第47図	出土遺物実測図-27 (1/4)
第48図	出土遺物実測図-28 (1/4)
第49図	出土遺物実測図-29 (1/4)
第50図	出土遺物実測図-30 (1/4)
第51図	出土遺物実測図-31 (1/4)
第52図	出土遺物実測図-32 (1/4)
第53図	出土遺物実測図-33 (1/4)
第54図	出土遺物実測図-34 (1/4)
第55図	出土遺物実測図-35 (1/4)
第56図	出土遺物実測図-36 (1/4)
第57図	出土遺物実測図-37 (1/4)
第58図	出土遺物実測図-38 (1/4)
第59図	出土遺物実測図-39 (1/4)
第60図	出土遺物実測図-40 (1/4)
第61図	出土遺物実測図-41 (1/4)
第62図	出土遺物実測図-42 (1/4)
第63図	出土遺物実測図-43 (1/4)
第64図	出土遺物実測図-44 (1/4)
第65図	出土遺物実測図-45 (1/2・1/3・1/4)

表 目 次

第1表	SD-1出土遺物観察表
第2表	出土土器観察表
第3表	出土石器・鉄器観察表

写真図版目次

図版1	1次全景(北から)
図版2	2次全景(北から)
図版3-1	調査区全景(南から) 2 2次南半(北から)
3	2次北半(北から)
図版4-1	SZ-1北溝(北から) 2 北溝遺物出土状況近景(東から)
3	北溝遺物出土状況遠景(東から)
図版5-1	北溝土器69・70出土状況(北から) 2 SZ-1東溝遺物出土状況(北から)
3	東溝遺物出土状況近景(北から)
図版6-1	東溝遺物出土状況近景(南から) 2 SZ-1南溝遺物出土状況(西から)
3	南溝遺物出土状況近景(南から)
図版7-1	SB-1~3全景(北から) 2 SB-1竈跡(南西から)
3	SB-1土器83出土状況(南東から)
図版8-1	SB-3土器85出土状況(北東から) 2 SB-1土器84出土状況(南西から)
3	SB-4全景(北から)
図版9-1	SB-5全景(北東から) 2 SB-5~7全景(南から)

- 図版10-1 SX-2 全景 (東から) 2 SX-1 全景 (南から)
 3 SX-1 遺物出土状況 (東から) 4 SK-1 土器93出土状況 (東から)
 5 SK-1 土器94出土状況 (南から)
- 図版11-1 SK-13土器出土状況 (東から) 2 SK-11土器出土状況 (南から)
 3 SK-10土器出土状況 (東から)
- 図版12-1 SD-1・A区2層土器出土状況 (南西から) 2 A区2層土器出土状況 (南東から)
 3 A区2層土器出土状況近景-1 (南西から)
 4 A区2層土器出土状況近景-2 (南西から)
 5 A区2層土器出土状況近景-3 (北東から)
 6 A区2層土器出土状況近景-4 (南東から)
- 図版13-1 SD-1・A区3層土器出土状況 (南東から)
 2 A区3層土器出土状況北半 (南西から) 3 A区3層土器出土状況南半 (西から)
- 図版14-1 SD-1・A区3層土器出土状況近景-2 (北東から)
 2 A区3層土器出土状況近景-3 (北東から)
- 図版15-1 SD-1・A区3層土器出土状況近景-4 (南西から)
 2 A区3層土器出土状況近景-5 (北東から)
- 図版16-1 SD-1・A区4層土器出土状況全景 (南から)
 2 A区4層土器出土状況近景-1 (北東から)
- 図版17-1 SD-1・A区4層土器出土状況近景-2 (北東から)
 2 A区4層土器出土状況近景-3 (北東から)
- 図版18-1 SD-1・A区5層土器出土状況全景 (南東から)
 2 A区5層土器出土状況南半 (北東から) 3 A区5層土器出土状況南半 (北東から)
- 図版19-1 SD-1・A区5層土器出土状況近景-1 (北東から)
 2 A区5層土器出土状況近景-2 (北東から)
- 図版20-1 SD-1・A区5層土器出土状況近景-3 (北東から)
 2 A区5層土器出土状況近景-4 (北東から)
- 図版21-1 SD-1・A区6層土器出土状況全景 (南東から)
 2 A区6層土器出土状況近景-1 (北東から)
- 図版22-1 SD-1・A区6層土器出土状況近景-2 (北東から)
 2 A区6層土器出土状況近景-3 (北東から)
 3 A区6層土器出土状況近景-4 (北東から)
- 図版23-1 SD-1・B区3層土器出土状況 (北東から)
 2 B区3層土器出土状況近景 (北西から)
 3 B区4層土器出土状況 (北東から) 4 B区4層土器出土状況近景 (北西から)
 5 B区5層土器出土状況 (北東から) 6 B区5層土器出土状況近景 (北西から)
- 図版24-1 SD-1・B区6層土器出土状況 (北東から)
 2 B区6層土器出土状況近景 (南西から)
 3 C区3層土器出土状況全景 (南東から) 4 C区3層土器出土状況 (南西から)
- 図版25-1 SD-1・C区3層土器出土状況 (北西から)
 2 C区3層土器出土状況近景 (北西から)
- 図版26-1 SD-1・C区4層土器出土状況 (南東から)
 2 C区4層土器出土状況近景-1 (南東から)
 3 C区4層土器出土状況近景-2 (南西から)
 4 C区4層土器出土状況近景-3 (南西から)
 5 C区4層土器出土状況近景-4 (南西から)
 6 C区4層土器出土状況近景-5 (南西から)
 7 C区4層土器出土状況近景-6 (南西から)
- 図版27-1 SD-1・C区5層土器出土状況 (南東から) 2 C区5層土器出土状況 (北西から)

- 3 C区5層土器出土状況近景-1 (南西から)
- 4 C区5層土器出土状況近景-2 (南西から)
- 5 C区5層土器出土状況近景-3 (南西から)
- 6 C区5層土器出土状況近景-4 (南西から)
- 図版28-1 SD-1・C区6層土器出土状況-1 (南東から)
- 2 C区6層土器出土状況-2 (南東から) 3 C区6層土器出土状況近景-1 (南西から)
- 図版29-1 SD-1・C区6層土器出土状況近景-2 (北東から)
- 2 C区6層土器出土状況近景-3 (南西から)
- 3 C区6層土器出土状況近景-4 (南西から)
- 4 C区6層土器出土状況近景-5 (南西から)
- 5 C区6層土器出土状況近景-6 (南西から)
- 図版30-1 SD-1・D区1層土器出土状況 (西から) 2 D区1層土器出土状況 (北西から)
- 3 D区1層土器出土状況 (南東から)
- 図版31-1 SD-1・D区1層土器出土状況近景-1 (北東から)
- 2 D区1層土器出土状況近景-2 (北東から)
- 図版32-1 SD-1・D区2層土器検出状況 (南東から) 2 D区2層土器出土状況 (南東から)
- 3 D区2層土器出土状況近景-1 (北東から)
- 図版33-1 SD-1・D区2層土器出土状況近景-2 (北東から)
- 2 D区2層土器出土状況近景-3 (北東から)
- 図版34-1 SD-1・D区3層土器出土状況-1 (北東から)
- 2 D区3層土器出土状況-2 (北西から)
- 3 D区3層土器出土状況-3 (南東から)
- 図版35-1 SD-1・D区3層土器出土状況近景-1 (東から)
- 2 D区3層土器出土状況近景-2 (北から)
- 図版36-1 SD-1・D区5層土器出土状況-1 (北西から)
- 2 D区5層土器出土状況-2 (南東から)
- 3 D区南半5層土器出土状況 (北西から)
- 図版37-1 SD-1・D区5層土器出土状況近景-1 (北東から)
- 2 D区5層土器出土状況近景-2 (北東から)
- 図版38-1 SD-1・E区1層土器出土状況 (北東から)
- 2 E区1層土器出土状況近景-1 (南西から)
- 図版39-1 SD-1・E区1層土器出土状況近景-2 (南西から)
- 2 E区2層土器出土状況 (北東から)
- 図版40-1 SD-1・E区2層土器出土状況近景-1 (南西から)
- 2 E区2層土器出土状況近景-2 (南西から)
- 図版41-1 SD-1・E区3層 (3回目) 土器出土状況 (北東から)
- 2 E区3層 (3回目) 土器出土状況近景-1 (北西から)
- 図版42-1 SD-1・E区3層 (3回目) 土器出土状況近景-2 (南西から)
- 2 E区3層 (4回目) 土器出土状況 (北東から)
- 図版43-1 SD-1・E区3層 (4回目) 土器出土状況近景-1 (北東から)
- 2 E区3層 (4回目) 土器出土状況近景-2 (北東から)
- 図版44-1 SD-1・E区4層土器出土状況 (北東から)
- 2 E区4層土器出土状況近景 (北東から)
- 図版45-1 SD-1・E区5層土器出土状況 (南東から)
- 2 E区5層土器出土状況近景 (南西から)
- 図版46-1 SD-1・A区西壁断面-1 (東から) 2 SD-1・A区西壁断面-2 (東から)
- 3 SD-1・C区北壁断面-1 (南東から) 4 SD-1・C区北壁断面-2 (南東から)
- 5 SD-1・E区南壁断面 (北から)
- 図版47-1 SD-1・D区西壁断面 (東から) 2 SD-1・D区南壁断面 (北から)
- 図版48 出土遺物-1・縄文土器

図版49	出土遺物-2・SZ-1 出土遺物-1			
図版50	出土遺物-3・SZ-1 出土遺物-2			
図版51	出土遺物-4・SB-1・3、SK-1 出土遺物			
図版52	出土遺物-5・SK-7・8・10・11・13・14、SX-1、SD-2 出土遺物			
図版53	出土遺物-6・石器-1			
図版54	出土遺物-7・石器-2			
図版55	出土遺物-8・石器-3			
図版56	出土遺物-9・石器-4、鉄器			
図版57-1	出土遺物-10・SD-1	6層集合写真	2	出土遺物-10・SD-1 5層集合写真
図版58-1	出土遺物-11・SD-1	4層集合写真	2	出土遺物-11・SD-1 3層集合写真
図版59-1	出土遺物-12・SD-1	2層集合写真	2	出土遺物-12・SD-1 1層集合写真
図版60	出土遺物-13・SD-1	6・5層		
図版61	出土遺物-14・SD-1	5層		
図版62	出土遺物-15・SD-1	5層		
図版63	出土遺物-16・SD-1	5層		
図版64	出土遺物-17・SD-1	5層		
図版65	出土遺物-18・SD-1	5・4層		
図版66	出土遺物-19・SD-1	4・3層		
図版67	出土遺物-20・SD-1	4層		
図版68	出土遺物-21・SD-1	4層		
図版69	出土遺物-22・SD-1	4・3層		
図版70	出土遺物-23・SD-1	3層		
図版71	出土遺物-24・SD-1	3層		
図版72	出土遺物-25・SD-1	3層		
図版73	出土遺物-26・SD-1	3・2層		
図版74	出土遺物-27・SD-1	3層		
図版75	出土遺物-28・SD-1	3層		
図版76	出土遺物-29・SD-1	3・2層		
図版77	出土遺物-30・SD-1	2層		
図版78	出土遺物-31・SD-1	2層		
図版79	出土遺物-32・SD-1	2層		
図版80	出土遺物-33・SD-1	2層		
図版81	出土遺物-34・SD-1	2層		
図版82	出土遺物-35・SD-1	2層		
図版83	出土遺物-36・SD-1	2層		
図版84	出土遺物-37・SD-1	2層		
図版85	出土遺物-38・SD-1	3・2層		
図版86	出土遺物-39・SD-1	2層		
図版87	出土遺物-40・SD-1	2・1層		
図版88	出土遺物-41・SD-1	1層		
図版89	出土遺物-42・SD-1	1層		
図版90	出土遺物-43・SD-1	1層		
図版91	出土遺物-44・SD-1	1層		
図版92	出土遺物-45・SD-1	1層		
図版93	出土遺物-46・SD-1	2・1層		
図版94	出土遺物-47・SD-1	1層		
図版95	出土遺物-48・SD-1	1層		
図版96	出土遺物-49・SD-1	1層		
図版97	出土遺物-50・SD-1	1層		
図版98	出土遺物-51・土製品、弥生土器			

第1章 調査の経過

高井遺跡は愛知県豊橋市石巻本町字権割78他に所在する。発掘調査は農地の土壌改良に伴い行われた記録保存のための調査である。調査は2期に分けて行い、1次調査が1991年4月25日から5月10日まで、2次調査が1992年2月8日から3月19日まで、調査面積は1,146㎡である。

調査の経緯は、市民から高井遺跡において重機による工事をしているとの通報であり、現地を確認したところ耕作土が削られ、一部で土取りのための穴が掘削されていた。地権者に確認したところ、土壌改良のための工事ということであったので、工事を一時中止し緊急に調査を行うこととなった。土壌改良工事は対象地を東西に分割し、2期に分けて行うことになっていたため、発掘調査もこれに合わせ工事の直前に2期に分けて行うこととなった。1次調査は調査区全体の東半分にあたり、2次調査は調査区全体の西半分にあたる(挿図1)。

発掘区は調査予定地の北側の道路の方向に合わせて10mメッシュで任意に設定した。発掘区名は東から西に向かってA～D、北から南に向かって1～6の番号を付け、北東の隅の発掘区がA-1区となるように設定した。高井遺跡周辺はすでに圃場整備事業が行われた地区であり、今回の発掘地点はある程度削平されていることが予想された。

第1次調査開始時点では、調査区の北東隅と南東隅には工事によりすでに大きな穴が掘られ、耕作土はすでに除去され地山面が露出していた。そのため、そのまま遺構の検出を行い、精査を進め2次調査予定地を排土置き場にした。

発掘区の南側には土器が集中している幅約2mの溝(SD-1)が確認された。SD-1はかなり深く土器の出土量が多かったため、結局5回に分けて掘り下げ、他の地区の遺構の精査と交互に行った。他の地区は南から北に向かって順次遺構の精査を行った。1次調査は工事を中断し、緊急に対処したため土・日曜日でも連続して調査を行った。

第2次調査では、1次調査部分を排土置き場にし、重機により耕作土を除去したのち遺構検出を行った。1次調査



挿図1 発掘調査区配置図(1/400)

で確認された環濠がかなり続くことが確認できたため、1次調査と同じようにSD-1を地区名ごとに分け、上部から出土状況図と写真を撮りながら約20cm程度ずつ掘り進んだ。最終的には1次調査と同様に、最も多い地区で6回にわたって掘り下げた。他地区の調査は南から北に向かって進め、SD-1の掘り下げと交互に行った。発掘区の北側で確認された堅穴住居等の遺構の深さやSD-1の土層断面からは圃場整備事業による削平が段丘の内部である北側で特に目立っているが、南側はあまり影響を受けていないように思われた。発掘調査終了後は工事を行うため、埋め戻しを行わずに工事業者に引き渡した。

第2章 遺跡の立地

高井遺跡は豊橋平野中流部で豊川とその支流である神田川に挟まれた段丘の南西端に位置している。段丘は豊橋上位面（註1）と呼ばれている中位段丘であり、段丘下の沖積面との比高差は約10mである。対岸の豊川右岸の段丘までは直線距離で北西に約4km、現海岸線までは南西に約9km、弥生時代の復元海岸線までは南西に約6.5km、豊橋平野の弥生時代の中心的集落である瓜郷遺跡までは南西に約4.5kmの距離に位置している（第1～3図）。

豊川左岸の段丘端部は沖積地との境は明治時代に造られた牟呂用水の開削時に削られて長距離に渡って改変を受けている。高井遺跡のある段丘も西側は、このために改変を受けており、また南側も開場整備事業のために台地先端が削られている部分が多い。神田川上流部や豊川左岸でも地形改変を受けていないと考えられるところではもっと緩やかな傾斜であり、高井遺跡周辺の地形も本来は西側と南側に向かって緩やかに傾斜していたと考えられる。この様な点から、地形を復元すると第4図のように復元できる。

近隣の弥生時代の遺跡は高井遺跡と同様に豊川とその支流である神田川に面する段丘端部に位置している（第5図）。これらの段丘は開析が進み、小支谷がいくつか見られ、ほぼこの小支谷に挟まれた舌状台地ごとに遺跡が存在している。

これらの内、高井遺跡は神田川と豊川に挟まれた段丘の先端部に位置している。

註1 水野季彦 「遺跡の立地」 【豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 水神古窯】豊橋市教育委員会1987年



高井遺跡遠景

第3章 歴史的環境

高井遺跡のある地域は豊橋市の中でも北部にあり、旧八名郡にあたる地域である。遺跡分布の傾向は、豊川左岸の段丘縁に弥生時代を中心とした遺跡が多く、静岡県との県境になる山脈の裾部に古墳時代後期の群衆墳を中心とした数多くの古墳が分布している。

旧石器時代の遺跡としては、高井遺跡より南に約2.5kmのところに更新世の人骨として知られている牛川人の出土地（第6図31）がある。この他には、尖頭器等が出土したとされる地点がある（註1）が十分に確認されていない。豊川左岸の段丘では表土層の直下にすぐ基盤の礫層がある場合が多く、旧石器時代の堆積層やクロボクは余り発達していない。今後良好な条件の所については遺跡が確認される可能性もあるが、現状では最も実体が把握できていない時代である。今回の高井遺跡の発掘調査においても、旧石器時代の可能性のある石器が出土しているが、ナイフ形石器等の製品は出土しておらず、旧石器時代のものと確定するに至っていない。

縄文時代は草創期の表裏押圧縄文土器が嵩山蛇穴遺跡から、早期の押型文土器が嵩山蛇穴遺跡や大清水遺跡（第6図4）等の数カ所の遺跡から出土しているが、いずれも小規模な遺跡と考えられる。また石巻地区は石灰岩地帯で、石灰岩洞窟が数多くあり、これらの内では縄文土器の出土が報告されているものもある。前期・中期の遺跡についてはほとんど報告がなく実体は不明である。後期になると貝塚を伴ったとされる多り畑遺跡等の少数の遺跡が確認されているが、最も数が多いのは晩期以降の突帯紋・条痕紋系の土器を出土する遺跡である。これらの遺跡は河岸段丘端部近くにあるものが多い。

弥生時代では、前期の遠賀川様式の土器を出土した白石遺跡（第6図8）がある。弥生前期にあたるこれ以外の遺跡はすべて縄文晩期から系譜を引く条痕紋土器の遺跡であり、この時期は両者が並存している。白石遺跡は遠賀川様式の土器の新段階まで存続するが、弥生前期でいったん途切れ、中期まで継続しない。豊橋平野の条痕紋系土器は弥生中期（畿内第Ⅱ様式平行期）まで存続しているが、この時期の遺跡は前期と比較して、かなりその数が減少する。

次の時期（畿内第Ⅲ様式並行期）には尾張地方の貝田町様式からの影響のもとに成立した瓜郷様式の遺跡が沖積地に出現する。豊橋平野ではこれ以後急速に遺跡数が拡大していく。高井遺跡（第6図6）では瓜郷様式（畿内第Ⅲ様式並行期）から始まり、山中（寄道）様式（畿内第Ⅴ様式並行期前半）になると同じ段丘上の北約1.5kmに城内遺跡、神田川の対岸には多くの堅穴住居と方形周溝墓が検出されたとされる浪ノ上遺跡（第6図18）や狭間遺跡（第6図14）（註2）等の多くの遺跡が出現し、古墳時代ははじめまで存続する。

古墳時代前期では、弥生時代後期から継続している浪ノ上遺跡等があるが、これ以後の集落遺跡は弥生時代と比較して数が少ない。また、その規模も小さく、遺構密度も低くなる。白石遺跡の東約2kmには白山Ⅱ遺跡や堅穴住居が確認された青木Ⅱ遺跡、西屋敷Ⅰ遺跡等（註3）がある。これらの堅穴住居は遺跡内でまばらに分布しており、平面形は一辺6～8mの方形で主柱穴は4本、壁溝を持ち、北辺中央に竈を有しているものが一般的である。

古墳は高井遺跡より北に約3kmの馬越地区を中心に権現山Ⅰ号墳、勝山Ⅰ号墳、茶白山Ⅰ号墳等の

前期の前方後方墳が集中して築かれている。高井遺跡周辺の段丘端部には、10～20mの方墳を中心とした高井古墳群－1（第6図2）があり、5世紀後半から6世紀初頭のもと考えられる。また、小円墳を主体とした高井古墳群－2（第6図3）もあり、いずれも内部主体は横穴式石室ではないと考えられる。

神田川の対岸には森岡古墳群（第6図13）があり、方墳と考えられる周溝から多くの土師器・須恵器が出土した森岡第2号墳がある（註4）。また、この近くには方墳と考えられる稲荷山1・2号墳（第6図20・21）や5世紀後半と考えられる浪ノ上1号墳（第6図19）があり、5世紀から6世紀にかけて方墳が多く築かれた地域である。

後期になると横穴式石室を持った全長62m以上の前方後円墳である馬越長火塚古墳があり、東側の山脈裾部には馬越北山古墳群、瀬戸古墳群等の横穴式石室を持った後期群集墳が数多く築かれている。

奈良から平安時代では、高井遺跡のある段丘の下に墨書土器を出土している西砂原遺跡（第6図5）がある。遺物の散布は台地上の広範な地区についても認められるので、かなり規模が大きくなると考えられる。

中世以降は12～13世紀のもと考えられる長大な溝が確認され豪族の居館の可能性のある白山I遺跡があり、同時期の遺物は白石遺跡、高井遺跡、城ノ内遺跡等の多くの遺跡で出土している。また、中世城館とされる石巻山城、高井城（第6図1）があり、豪族屋敷と推定され、土塁が残っている馬場遺跡がある。

この様に高井遺跡周辺は旧石器時代から各時代の遺跡が存在しているが、弥生時代中期以降に遺跡数が増大し、規模も大きくなる。

註1 木下克己 『八名郡の先史遺跡』 1975年

註2 北村和宏 「森岡遺跡発掘調査報告第2章第1節1. 遺跡の所在地と名称」『森岡遺跡 淡州神社北遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター1991年には、狭間遺跡を森岡遺跡と呼ぶ理由が述べられている。

註3 豊橋市教育委員会 「豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 石巻神郷地区は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 1986年

註4 北村和宏 「森岡遺跡発掘調査報告第4章遺構」『森岡遺跡 淡州神社北遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1991年

第4章 遺構

発掘調査によって確認された遺構は方形周溝墓1基、環濠1条、溝7条、竪穴住居3軒、掘立柱建物4棟、土壌多数である(第7～20図)。

1. 方形周溝墓(SZ-1) (第8図)

周溝墓は発掘区の北西で確認された。周溝墓の西側は発掘調査外であるため、全形は不明であるが、方形になる可能性が高い。方形周溝墓内部からは5世紀の竪穴住居が検出されていることから分かるように、墳丘はすでに削平されており、主体部も確認できなかった。

南溝の西端は切れており、東溝の南端と南溝の東端は攪乱を受けているがつながることはない。東溝と北溝は細い溝でつながっており、二隅あるいは三隅が切れると考えられる。規模は溝の外側で南北14.2m×東西13.3m以上、溝の内側で南北12m×東西11m以上である。溝の深さは遺構検出面から約30cmである。

遺物の出土状況としては、北溝からは完形の土器2点が溝底部からやや浮いた状態で出土している(写真図版5-1)。第8図69・70はほぼ完形で、口縁部の一部が打ち欠かれており、供献されたものである可能性が高い。69は凹線文様式の細頸壺で、70は在地の長床様式の細頸壺であるが、全く同様な位置が打ち欠かれており、出土状況も全く同じであるところから、この2点は同じ供献儀礼に使用されたものである可能性が高い。これ以外には、38・41の壺が比較的残存率が高く供献されたものである可能性が考えられるが、他の資料はほとんどが破片資料であり、出土状況から供献されたものであると断定はできない。このように、周溝内から出土した資料は出土状況が必ずしも同じではなく、すべてが供献されたものではないであろう。

このように溝底部近くに完形に近い土器があり、これらと混在しながら破片が多量に出土する出土状況は、同時期の豊橋市橋良遺跡の方形周溝墓SZ-01においても同様であり、方形周溝墓築造当時に行われた墓前儀礼が永続的なものでないことを示している。

2. 環濠(SD-1) (第9～16図)

SD-1は発掘区南西隅に長さ30m以上、幅約1.5m、深さ約1.5mで、ほぼ直線状に確認された断面V字状の溝で、環濠と考えられる。出土土器からは弥生後期前半(山中様式)に掘削され、後期終末(欠山様式)にはほぼ埋まったものと考えられる。環濠内からは多量の土器が折り重なるようにして検出された。これらの土器は小破片資料以外は出土状況図を作成して取り上げを行い、その総数は1,136点になった。以下では、調査の方法と後具体的な遺物の出土状況について説明する。

高井遺跡の発掘調査は1次・2次に分割して行ったが、出土状況図の作成と遺物の取り上げは1次が1区、2次が4区(C-4区、間壁、C-5区、B-6区)の全体で5区(A-E区)に分けて行った。各区の位置と名称は挿図1と挿表1の通りである。

発掘調査はまず1次にD区を行い、2次にA・C・E区を同時に掘り下げ、最後にB区の間壁を掘り下げた。各調査区は上層より出土状況図を作成しながら掘り下げた。掘り下げに当たっては完形に近い土器、大きな破片資料はそのまま残し、小さな破片については掘り下げ時点で取り上げた。このように掘り下げ→写真撮影→実測→遺物取り上げを1単位として、1次においてはD区とSD-1以外の遺構の精査を交互に行い、2次においてはA・C・Eの各区を交互に掘り下げた。掘り下げは回数で表し、上層より1～6回目と表記した。このため、各区における掘り下げ回数は必ずしも対応していない(挿表1)。また、各掘り下げ幅も任意であるが、結果的にはおよそ20～30cmの深さで掘り下げることになった。各地区の出土土器は基本的に実測図と取り上げ番号のあるものと一括して取り上げたものの二者がある。例えば、A区1回目は1～101番の土器とこれ以外の番号のない土器として管理し、各分層間の器種構成把握のための個体数計測もこの取り上げ単位を基準に行った。

SD-1の埋土は分層がほとんど不可能であったので、各地区の掘り下げ回数がどのように対応するのかは、調査終了後出土図のデータをコンピューターに入力・図化して出土土器相互のレベルや出土状況と土器の型式学的検討から判断した。この結果、SD-1出土土器は6層に分割することが妥当と考えられた。これら6層は取り上げ単位ごとにその相関関係から同時性を想定したものであり、すべて人工層位である(挿表1・挿図2)。

D区の調査では1～3層までほとんど重なるようにして土器が出土した(写真図版30～35)が、4層は遺物が少なく、5層になって完形に近い土器が溝の底部近くに連なって出土した(写真図版36)。1～3層は欠山様式の土器が主体であり、5層は山中様式の土器が主体であるところから、間層を挟んだ良好な堆積が続いていることが予想された。

E区はD区と同じように1～3層では欠山様式の土器が重なるようにして出土した。しかし、4・5層では土器はほとんど出土していない。

B・C区は1・2層では土器の出土が少なく、3層になって集中的に出土した。土器集中出土のレベルはA区側で浅くなっており、A区からE区に向かって斜めに堆積している可能性が高いと考えられた。土器は3層～6層まで重なるように出土し、D区の4層で見られたような間層は想定できない。

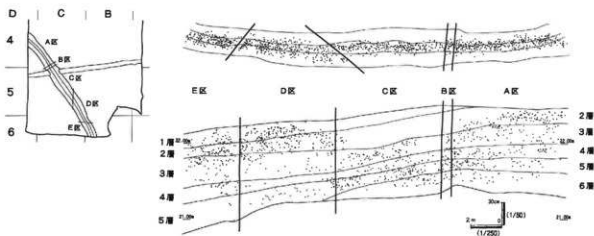
A区は遺構検出面から土器が出土し始め、2～6層の各層にわたり同じ様な出土状況を示したが、D区に見られたような明確な間層は認められなかった。また、欠山様式の土器が少なく山中様式の土器が多く出土し、山中様式の土器の堆積層が厚いことが分かり、C・D区で想定された傾斜堆積を裏付ける結果となった。さらに、この部分は溝底部も浅くなり、台地内部に向かってある程度環濠が浅くなっていることが分かった。

SD-1での土器出土状況は最下層の土器が環濠底部から約10～15cm浮いた状態で出土しているところから、環濠が掘られてからある程度時間が経ってから土器が集中的に廃棄され、引き続き土器廃棄が続いたものと考えられる。土器の出土は環濠の中央部分に集中しており、どちらかの肩に片寄ることはない。これは環濠が埋まっていく段階で、浅く細くなりながら土器廃棄が続いたことを示している。また、A区では6層から2層まではほぼ連続的に土器が出土しており、土器廃棄がある程度の期間にわたって連続的に行われたことを示している。

環濠全体での出土傾向はA区からE区に向かって低くなるように斜めに堆積し、D・E区では1～

3層に土器の集中が見られ、4・5層に土器出土が少ないところから、全体の土器群としては第1群（4～6層）、第2群（A区2・3層とB・C区3層）、第3群（D・E区1～3層）に大きく分類することができる。第1群は山中様式、第2・3群は欠山様式である。

以上が環濠の土器出土状況を把握するために行った方法であるが、土器の型式学的検討（第6章）を行ったところ、さらに廃棄単位が想定できるようになったので、この点については第7章1環濠（SD-1）の埋没過程の復元で再度詳細に検討する。



挿図2 SD-1調査区・人工層位（1/250・1/50）

挿表1 人工層位と遺物取り上げ番号との対応表

	E 区	D 区	C 区	B 区	A 区
	2期：B-6区	1 期	2期：C-5区	2期：間壁	2期：C-4区
1層	1回目 316～364 (日付：920212)	1回目 1～125 (日付：910430)			
2層	2回目 365～416 (日付：920214)	2回目 126～166 200～254 (日付：910502)			1回目 1～101 (日付：920214)
3層	3回目 417～457 4回目 458～477 (日付：920218)	3回目 167～179 255～273 (日付：910504)	1回目 1～75 (日付：920217)	1回目 329～340 (日付：920302)	2回目 102～184 (日付：920219)
4層	5回目 478～492 (日付：920219)		2回目 76～143 (日付：920218)	2回目 341～349 (日付：920303)	3回目 185～244 (日付：920219)
5層	6回目 493～495 (日付：920220)	4回目 180～193 274～291 (日付：910505)	3回目 144～233 (日付：920220)	3回目 350～362 (日付：920306)	4回目 245～300 (日付：920220)
6層			4回目 234～270 (日付：920221)	4回目 363～371 (日付：920306)	5回目 301～328 (日付：920221)
断面		D-D'断面292～315 (日付：910506)			

3. 溝 (SD-2 ~ 6) (第7図)

SD-2

SD-2は幅約1m、深さ約0.3mでA-4区からD-5区の東西方向に直線的に延びる長さ25m以上の溝である。断面形は箱形になる。SD-1とSB-5を切っている。

SD-3

SD-3は幅約1m、深さ約0.15mでA-2区からA-4区の南北方向に直線的に延びる長さ16m以上の溝である。断面形は箱形になる。途中が攪乱で壊されているが、SD-2とはほぼ直角方向であり、交差する一体のものである可能性が高い。

SD-4

SD-4は幅約0.5m、深さ約0.07mでA-2区からD-2区のやや北に振れた東西方向に直線的に延びる長さ25m以上の溝である。深さは浅いが断面形は箱形になる。

SD-5

SD-5は幅約0.5m、深さ約0.05mでA-2区からD-2区のやや北に振れた東西方向に直線的に延びる長さ6m以上の溝である。B-2区の中心ほどで浅くなって無くなっているが、この延長線上にはSD-6があり、同じ一体の溝である可能性が高い。深さは浅いが断面形は箱形になる。

SD-6

SD-6は幅約0.5m、深さ約0.1mでA-2区からD-2区のやや北に振れた東西方向に直線的に延びる長さ8m以上の溝である。C-2区の東側で土壌に当たり、浅くなって無くなっているが、この延長線上にはSD-5があり、同じ一体の溝である可能性が高い。深さは浅いが断面形は箱形になる。

SD-4とSD-5・6は平行しており、両者は同時期あるいは近接した時期の造り直しである可能性が高い。

4. 竪穴住居 (SB-1 ~ 3) (第17図)

竪穴住居は3軒が確認されている。すべて同一場所における建て替えである。

各竪穴住居の切り合い関係は、表土層が削平を受けているため、壁の立ち上がりが確認できず、壁溝しか確認できない部分があり、土層断面からはB-B'ラインの北側でSB-2とSB-3の切り合いがわずかに確認できるのみである。しかし、P-5西側の土器集中区はSB-2とSB-1の壁溝の間であり、SB-3を壊してSB-2が造られ、さらにSB-2を壊してSB-1が造られたため、この部分に土器集中区が残ったものと考えられる。また、焼土はSB-1北辺中央部に集中して

おり、この部分に竈があった可能性が高く、SB-1が最終の竪穴住居であったことを示している。

以上のように、竈と考えられる焼土面や遺物の出土状況等からSB-3→SB-2→SB-1の順に建て替えられていることが確認できた。

SB-1

SB-1は4.1m×4.6mの方形の竪穴住居である。北辺の中央に焼土面があり、竈になる可能性が高い。P1は直径76cm、深さ16cmの円形の土壌、P2は直径78cm×62cm、深さ16cmの隅丸方形の土壌、P3は76cm×58cm、深さ13cmの楕円形の土壌であり、P3からは土師器の高坏（第24図84）が出土している。P1～3は貯蔵穴の可能性が高い。主柱穴はP12～15と考えられ、P12は直径22cm、深さ34cm、P13は直径23cm、深さ34cm、P14は直径21cm、深さ27cm、P15は直径28cm、深さ21cmである。

SB-2

SB-2は6.1m×5.6mの方形の竪穴住居である。北辺と西辺では壁溝が確認できたが、東辺と南辺では壁溝が確認できず、立ち上がりも不明瞭であった。中央のP4は1.54m×1.14mの土壌であり、下面にはわずかに焼土面が残っており、炉跡になる可能性が高い。仮に北辺の中央に竈があったとすれば、SB-1のようにその部分の壁溝が切れ、焼土が残っている可能性が高い。しかし、他の部分でも壁溝の中央が切れている部分は確認できていないところから、P4はSB-2、SB-3の両方に伴う炉跡である可能性が高い。P5は100cm×92cm、深さ29cmのほぼ円形の土壌であり、貯蔵穴の可能性が高い。主柱穴はP15～18と考えられ、P15は直径28cm、深さ21cm、P16は直径19cm、深さ10cm、P17は直径22cm、深さ27cm、P18は直径27cm、深さ10cmである。

SB-3

SB-3は6m×6mの方形の竪穴住居である。西辺では立ち上がりがほとんど確認できなかったが、壁溝は四方で確認できた。中央のP4は1.54m×1.14mの土壌であり、下面にはわずかに焼土面が残っており、炉跡になる可能性が高い。かりに北辺の中央に竈があったとすれば、SB-1のようにその部分の壁溝が切れ、焼土が残っている可能性が高い。しかし、他の部分でも壁溝の中央が切れている部分は確認できていないところから、P4はSB-2、SB-3の両方に伴う炉跡である可能性が高い。P6は直径87cm×76cm、深さ24cmの楕円形の土壌、P7は116cm×77cm、深さ29cmの隅丸方形の土壌であり、P6からは土師器の高坏（第24図86・87）が、P7からは土師器の短頸壺（第24図85）が出土している。P6・7は貯蔵穴の可能性が高い。主柱穴はP8～11と考えられ、P8は直径40cm、深さ10cm、P9は直径37cm、深さ23cm、P10は直径24cm、深さ31cm、P11は直径50cm、深さ40cmである。

5. 掘立柱建物（SB-4～7）（第18図）

掘立柱建物は4棟が確認されている。総柱建物のSB-4・5、側柱建物のSB-6・7である。

SB-4

SB-4は方形周溝墓SZ-1の北溝と重なる位置で確認された2間×3間の総柱建物であり、桁行7.38m、梁間4.05mである。主軸方向はN-75°-Eである。柱穴はP1~12が確認されており、直径40~70cm、深さ20~50cmとばらついている。SB-4はP5のところでSZ-1の北溝を切っている。P5からは弥生中期の甕（第24図89）が出土しているが、SZ-1からの混入と考えられる。

SB-5

SB-5はSD-1の東側で確認された3間×3間の総柱建物であり、桁行5.48m、梁間5.05mである。主軸方向はN-153°-Eである。柱穴はP1~16が確認されており、直径50~60cm、深さ30~40cmとほぼ同じ規模である。SB-5はSD-2によって切られている。

SB-6

SB-6はSB-5の南東側で確認された2間×3間の側柱建物であり、桁行4.2m、梁間3.94mである。主軸方向はN-140°-Eである。柱穴はP1~8が確認されており、直径40~60cm、深さは約20cmでほぼ同じ規模である。北隅の柱穴は攪乱等により確認できていない。

SB-7

SB-7はSB-6の南東側で確認された1間×2間の側柱建物であり、桁行5.44m、梁間3.1mである。主軸方向はN-99°-Eである。柱穴はP1~6が確認されており、直径約30cm、深さは約15cmでほぼ同じ規模である。P5はやや位置が内側にずれている。

6. 土壌 (SK-1・10・11・13) (第20図)

土壌は数多くのものが確認されているが、出土遺物がなかったり、あっても細片で時期を特定できないものがほとんどである。今回はこれらの中でも、出土状況を図示できる遺物が出土した土壌に限って説明し、他は一覧表に示す（挿表2）。

SK-1

SK-1はC-2区の中央付近にある。直径約50cm、深さ約60cmで完形に近い土器が2点出土している。穴が二つ重なっているような形をしており、一部はSD-4に切られている。SK-1上部はやや浅く、不整形で下部は台形をしている。94の壺は底部がなく、穴の中央よりやや下から出土している。93の壺はSD-4に口縁部を切られ、上部は工事によって表土層が除去されたときに削られているが、口縁部をやや南に傾けて出土している。93は94とは20cmほど離れて出土しており、94埋納後に同じ場所に浅い穴が掘られ、93が埋納された可能性が考えられる。

SK-10

SK-10はB-3区の南東隅にある。直径約60cm、深さ約30cmで105の直口壺が出土している。

SK-11

SK-11はC-1区の南側にある。径約42×30cm、深さ約50cmで106の高坏が出土している。

SK-13

SK-13はC-5区の西側中央にある。径約100×64cm、深さ約20cmである。SD-1と重なっており、出土遺物からはSD-1を切っていると考えられるが、埋土はほとんど同じで十分に確認できない。108・109の高坏が出土しており、同一個体と考えられる。

挿表2 高井遺跡土壌一覧表

番 号	地 区	長 径	短 径	深 さ	出 土 遺 物
SK-1	C-2	52cm	48cm	55cm	第24図 93・94
SK-2	C-4	61cm	53cm	25cm	第24図 95
SK-3	B-4	20cm	20cm	12cm	第24図 96
SK-4	A-3	49cm	32cm	11cm	第24図 97
SK-5	B-3	50cm	44cm	15cm	第24図 98
SK-6	C-3	135cm	130cm	33cm	第24図 99
SK-7	C-2	68cm	61cm	39cm	第25図 100・101
SK-8	B-2	45cm	36cm	15cm	第25図 102
SK-9	B-2	60cm	48cm	10cm	第25図 103・104
SK-10	B-3	60cm	60cm	29cm	第25図 105
SK-11	C-2	42cm	30cm	50cm	第25図 106
SK-12	C-2	30cm	30cm	27cm	第25図 107
SK-13	C-5	100cm	64cm	20cm	第25図 108・109
SK-14	C-4	47cm	42cm	23cm	第25図 110・111
SK-15	B-5	220cm	150cm	38cm	第25図 112～114
SK-16	B-3	43cm	32cm	17cm	第27図 4
SK-17	A-5	90cm以上	170cm	13cm	第27図 8
SK-18	C-2	63cm	60cm	46cm	第30図 42

7. 廃棄土壌 (SX-1～3) (第7図)

遺物がある程度出土した大型の土壌を廃棄土壌とした。

SX-1

SX-1はC・D-1・2区にある。北側と西側は発掘調査区外になるため不明であるが、現状で8m以上×3m以上で深さは約20cmである。

SX-2

SX-2はC-5区にある。平面形は四角に近い不整形で、規模は3.8m×3.4m、深さは北側で約20cmである。段丘は南側に向かって低くなっているがSX-2も南側に向かって浅く境界が不鮮明になっている。

SX-3

SX-3はC-4区の北東隅にある。平面形は長楕円形で、規模は2.9m×1.0m、深さは約30cmである。SB-5の北から東側にかけては一部に攪乱も見られるが、不整形の土壌が多くある。これらはSB-5とは重なっておらず、同時存在した遺構である可能性が考えられる。SX-3もSB-5の北東約3mの位置にあり、これらと同じ性格の土壌である可能性が考えられる。

第5章 遺物

高井遺跡出土遺物は縄文時代前期初頭から中世まで各時期のものが出土しているが、遺構からの出土量が多く、環濠（SD-1）からの出土遺物が大半を占めている。遺構の時期は弥生中期から古墳時代が中心である。そこで、環濠（SD-1）出土土器については第6章でまとめて説明する。環濠以外については、まず遺構出土土器について説明し、次にこれ以外の土器や石器等について説明する。

1. 方形周溝墓（SZ-1）出土遺物（第22・23図38～82）

方形周溝墓出土土器は周溝の各溝から出土しているが、基本的に同様なので、まとめて説明する。当地方における弥生中期後半の土器は、在地系の長床様式と外来系の凹線文様式の土器が混在していることに特徴がある（註1）。そこで、SZ-1出土土器をこの両者に分類して説明する。

長床様式の土器は壺と甕がある。壺は38・41・43・67・68・70である。38は胴部外面と内面の下半部はミガキ、上半部には櫛描直線文と波状文がある。口縁部内面にもミガキが見られ、外面の色調はかなり黒い。39は頸部に櫛描直線文が見られ、色調は灰色が強い。40は大型の広口壺の口縁部で受口状になる。口縁端部上面と外面には櫛描波状文が見られ、色調は内外面とも黒色が強い。41は広口壺で内外面はナデであり、底部付近にハケの痕跡がわずかに見られる。色調は赤褐色である。43・67・68は壺の底部であるが、厚く突出しているところから在地系の長床様式のものと考えた。70は完形の細頸壺である。口縁部がV字形に欠けており、方形周溝墓の供献に際して打ち欠いたものと考えられる。底部はかなり磨減しており、かなりの期間使用されていたものと考えられる。これら長床様式の壺の共通性は器形の点では肩がやや張り、胴部最大径が中央より下に来る下膨れ形をしていること、底部が厚く突出していることがあげられる。しかし、細かい器形や文様構成の点では個体差が著しい。これらは凹線文土器様式の壺には見られない点である。

甕は51・53・55・63・72・73・75・81である。底部はすべて中実で高い脚台（51・53・55・57）で、平底はない。外面の調整はナデ（61・63）、ハケ（60・62・72・73）、ミガキ（58・59）がある。

凹線文様式の土器は壺・甕・高坏・鉢等がある。壺は42・44・52・64・66・69である。42は胴部がソロバン玉形をした細頸壺である。頸部には簾状文、胴部上半には櫛描直線文と波状文が下半部は縦方向のミガキが施されている。胴部外面には輪郭のはっきりした濃い黒斑が、その対角線上の胴部下半外面には輪郭のはっきりしない薄い黒斑が見られるが、内面には見られない。44は底部が器壁と同じ厚さで突出しないところから凹線文様式の壺の底部と考えられる。かなり大型の広口壺の底部と考えると、52は上部内面が磨かれているところから、台付壺の底部と考えた。長床遺跡（註2）等で出土する胴部がソロバン玉形の台付壺と同型式と考えられる。64・66は広口壺の口縁部である。69は完形の細頸壺である。口縁部が70の長床様式の細頸壺と同様にV字形に欠けており、方形周溝墓の供献に際して同様にして打ち欠かれたものと考えられる。

甕は48・50・54・74・82である。48・50はタタキ甕である。外面上半部はタタキ、下半部はタタキ後ハケ、内面は胴部最大径付近まではケズリ、これより上はハケあるいはナデである。底部まで残っ

ているものはないが、尾張では朝日遺跡で短い脚台のものが出土しており（註3）、54・74・82がこれに当たると考えられる。

高坏は47・71である。47は脚部であり、71は杯部であるが、両者は接合しない。

鉢は45・46である。両者とも台付鉢である。脚部には円形のスカシを持つ。脚部との接合は高坏と同様に円盤充填である。

2. 溝（SD-2～6）出土遺物（第26図128～141）

SD-2

128は広口壺である。胴部内面はハケ調整で粘土紐の痕跡が見られる。外面はミガキである。129・130は小型高坏の脚部である。脚部中央で屈曲して外反し、このあたりに3方向にスカシを持ち、脚部上半には櫛描直線文がある。131～133は台付甕の脚部である。表面は磨滅し、調整は不明であるが132のくびれ部内面は剝離して擬口縁になっており、指ナデの痕が顕著である。128～133は元屋敷様式の土器である。134・135は須恵器の壺である。134は口縁端部に段を持ち、後ははっきりしている。天井部外面の3分の2近くはヘラ削りで、一部剝離している部分があるが自然釉が付着している。口径は11.3cmであり、尾張系の須恵器と考えられる。時期は尾張ではH-11号窯、陶邑ではTK-47型式の時期と考えられる。135は内面にかえりを持つ壺蓋である。先端のつまみは欠けているが、天井部外面の半分はどがヘラ削りである。猿投窯の岩崎17号窯と同時期のもの（註4）と考えられる。136・137は7世紀頃の須恵器の高坏である。

SD-3

138は須恵器の陶臼、139は須恵器の甕、140は須恵器の坏であるが、時期の特定はできない。141は土師器の高坏の脚部である。5世紀後半頃のものと考えられ、須恵器の時期よりも古く、混入と考えられる。

3. 堅穴住居（SB-1～3）出土遺物（第24図83～88）

SB-1～3から出土した土器は小片が多く、図示できるものは少ないため、まとめて説明する。83・84・86・87は土師器の高坏である。表面は磨滅しており、調整は不明である。85は短頸壺で、表面は磨滅しているため調整は不明である。底部は丸底であり、外面には境界がやや不明瞭な直径約5cmの黒斑がある。88は甕であり、胴部外面は荒いハケ、口縁部外面はヨコナデ、胴部内面は指押さえ後ナデである。SB-1～3から出土した土器は土師器のみで須恵器は出土していないが、高坏の特徴から5世紀後半のTK-208型式～23型式の時期のものと考えられる。

4. 掘立柱建物（SB-4～7）出土遺物（第24図89～92）

掘立柱建物から出土した遺物では図示できるものは非常に少ない。SB-4からは89～91が出土し

ている。89は弥生中期後半の甕の胴部である。調整は内外面ともにナデ、下から胴部外面の最大径付近までは一部に炭化物が付着している。底部は出土していないが、中実で高い脚部を持つ台付甕になると考えられる。90は台付甕の脚部である。内外面とも磨減し、調整は不明であるが、弥生時代後期から古墳時代中期頃のものと考えられる。91は土師器の甕である。外面は横方向のミガキ、内面は横方向のハケが見られるが、一部には粘土紐の継ぎ目も残っている。出土遺物のうちもっとも新しいものは91の甕と考えられるが破片資料であり、はっきりしない。

S B - 5 からは92の土師器の高坏が出土している。表面は磨減しており、調整は不明であるが、T K - 208型式～23型式でS B - 1 ～ 3 と同時期と考えられる。

5. 土 壌 (S K - 1 ～ 15) 出土遺物 (第24図93～99、第25図101～114)

土壌出土資料のうち、図示できる土器が出土したのはS K - 1 ～ 15である。これ以外のS K - 16～18では石器が出土している。

S K - 1 からは93・94の壺が出土している。93は受口状口縁の細頸壺で、口縁端部にはキザミ、胴部上半にはヘラによる綾杉文と櫛による直線文と列点文が施されている。内面はハケ、外面はミガキで最終調整が行われている。胴部上半から頸部にかけての内面には粘土紐の痕跡が顕著に見られる。また、胴部最大径よりやや上で水平に割れており、このあたりに成型時の継ぎ目があったことがうかがえる。94はわずかに受口状になった口縁部の細頸壺である。頸部には半截竹管による直線文が施されている。内外面とも磨減が著しく、調整はよくわからないが、胴部の表面は指押さえによる整形の痕跡と考えられる小さな凹凸が見られる。また、胴部最大径よりやや下で水平に割れており、このあたりに成型時の粘土紐の継ぎ目があったものと考えられる。

S K - 2 からは95の細頸壺の口縁部が出土している。受口状口縁の広口壺の口縁部である。端部外面には凹線文が施されている。凹線文土器様式で時期は弥生中期後半である。

S K - 3 からは96の小型高坏の脚部が出土している。弥生後期前半の時期のものと考えられる。

S K - 4 からは97の高坏の脚部が出土している。くびれ部には櫛描直線文が施され、スカシ穴が3方向に開けられている。時期は弥生後期後半の欠山様式のものである。

S K - 5 からは98の壺の胴部が出土している。外面の胴部下半は左下から右上へ、上半は右下から左上へ細かで断続的なハケメで調整され、胴部上半には円形浮文とわずかに櫛描文が見られる。

S K - 6 からは99が出土している。弥生中期後半の凹線文土器様式の高坏の口縁部と考えられる。外面と内面の一部に赤色顔料が塗られている。胎土は白く砂粒が少なくきめが細かいところから尾張からの搬入品である可能性が高い。

S K - 7 からはほぼ完形の100の台付甕と101の高坏が出土している。100の台付甕は胴部外面の一部に荒いハケが認められるが、ほとんどはナデである。また、胴部の表面は指押さえによる整形の痕跡と考えられる小さな凹凸が見られる。脚部内面には板状工具による押さえの痕がわずかに残っている。胴部内面の下から4分の1は水平に幅約5cmほどでやや黒くなっている部分があり、煮沸時に付いた炭化物の痕跡の可能性はある。胴部外面は最大径あたりを中心に炭化物の付着している部分があ

る。101の高坏は坏部は強く外反し、脚部も折れて強く外反している。坏部外面に2カ所、脚端部に1カ所やや不明瞭な黒斑がある。時期は5世紀前半のものと考えられる。

SK-8からは102の坏が出土している。内外面はかなり磨減しており、調整は不明である。

SK-9からは103・104の台付甕の脚部が出土している。103・104ともに内外面はかなり磨減しており、調整は不明である。

SK-10からは105の完形の直口壺が出土している。外面は胴部・口縁部ともにミガキであるが、磨減している部分が多い。口縁部と頸部の一部に小さな黒斑が見られる。時期は5世紀前半のものと考えられる。

SK-11からは106の高坏が出土している。坏部内面には荒いハケの痕が残っているが、その他の面はかなり磨減している。口縁端部外面にやや不明瞭な黒斑が2カ所認められる。時期は5世紀前半のものと考えられる。

SK-12からは107の高坏の脚部が出土している。坏部・脚部ともに欠損している。時期は5世紀のものと考えられる。

SK-13からは108・109の高坏が出土している。108は稜がなく丸い坏部の小型高坏、内外面とも細かな剝離が数多く見られる。109は外反するが強く折れない小型高坏の脚部である。内外面とも磨減が著しく調整は不明である。108と109は接点がなく同一個体になるかどうかは不明である。時期は4世紀後半のものと考えられる。

SK-14からは110・111の直口壺が出土している。110の調整は外面はハケ、内面は磨減で不明である。色調は白く、内面の胴部中央付近から底部と外面の胴部に黒斑が見られる。時期は4世紀後半のものと考えられる。

SK-15からは112の須恵器の坏と113・114の中世陶器の碗が出土している。112の底部はヘラ削りで、体部は丸く立ち上がる。岩崎17号窯と同時期と考えられる。113の高台は低くつぶれ、モミ痕がある。時期は藤澤編年（註5）の第6型式と同時期のものと考えられる。114の高台は三角形で先端がとがる。藤澤編年の第5型式と同時期と考えられる。

6. 廃棄土壌（SX-1～3）出土遺物（第25図115～127）

SX-1からは115～119の須恵器・蓋、120の須恵器・高坏、121・122の土師器・高坏が出土している。115～119の須恵器・蓋は内面に返りを持つもので、岩崎17号窯と同時期のもの、121は脚部が折れずに外反する小型高坏である。脚部内面にはケズリの痕跡が見られるがその他の面はかなり磨減している。

SX-2からは125の弥生後期の壺、126・127の土師器の甕が出土している。125は頸部に突帯をめぐらすもので、突帯上と肩部にはハケによる刺突文が施されている。126と127は口縁部がわずかに段を持つもので、渥美町青山貝塚出土の甕（註6）と同型式のもので5世紀後半頃のものと考えられる。

SX-3からは123・124の甕が出土している。123の台付甕の脚部は磨減が著しいが、外面にハケの痕跡が残っている。124の甕は磨減が著しいが外面にはわずかにハケの痕跡があり、口縁端部にはキザミが施されている。弥生中期後半の長床様式で混入と考えられる。

7. 表土・その他 (第26図142~149、第65図604~610)

高井遺跡では圃場整備が行われた時期に多くの遺物が採集されている。ここで図示しているものはその一部である。

142は弥生中期後半の広口壺である。口縁部には凹線文、頸部には簾状文、胴部上半には櫛描直線文と波状文が交互に施されている。143は須恵器の鉢、144~146は須恵器の蓋で折戸10号窯から伊ヶ谷78号窯と同時期、147・149は有台坏身で、149は岩崎17号窯と同時期の可能性が高い。148は無台坏身である。

604は細頸壺の胴部破片である。色調は灰色でチャートや石英粒を含む。表面にはヘラによる連弧文とクシとヘラを合わせた文様帯があり、瓜郷様式でも後半の時期のものと考えられる。605は胴部が直線的に伸びる細頸壺の胴部破片である。外面には櫛描直線文による細い文様帯が数多く連続しており、この上にはクシによる扇形文が施されている。胎土は細かく砂粒は少ない。尾張の貝田町様式の細頸壺であり、604と同時期のものと考えられる。606は大型器台の脚部破片である。丸いスカシ穴が2段にあり、その間には櫛描直線文とその工具による刺突文が施されている。604と605はSD-1出土のもの、606はSX-1出土のものであるが、いずれも混入品である。607・608は細頸壺の胴部で沈線でごく区画され、その間にはヘラで斜格子文が充填されている。609は無頸壺である。口縁部直下には直径5mmの穴が開けられている。この穴は現状では1個であるが、通常2個が対になっており、蓋を緊縛するためのものと考えられる。外面にはクシの刺突による綾杉文が施されている。口径は14.8cmである。SD-1出土であるが、弥生中期の土器であり、混入品と考えられる。610は細頸壺の肩部の破片と考えられる。調整は内外面ともナデであり、外面にはヘラによる階段状の文様が描かれている。原始絵画の可能性も考えられるが、このような区画紋は弥生中期後半の在地の土器の中にあり、絵画ではなく区画文である可能性の方が高いであろう。

8. 縄文土器 (第21図1~37)

今回の発掘では縄文時代の遺構は確認されておらず、縄文土器については遺構からの出土のものはすべて混入と考えられるものである。そこで、遺構から出土したもの、表土から出土したもの等も含めて一括して説明する。

1は波状口縁の深鉢で口縁端部外面には2条の貼付け突帯があり、そのうえにはLRの縄文が横方向に施文されている。2と3も深鉢で細い貼付け突帯が4条ほど見られるが、表面が磨滅しており縄文は確認できない。1~3は縄文時代前期初頭とされる塩屋式(註7)と考えられる。4は深鉢で口縁端部外面に細目の凹線が1条ある。外面調整は巻貝による条痕である。元住吉山Ⅱ式あるいは宮滝式と考えられる。5は深鉢で表面は磨滅しているが内面に半截竹管による沈線が施されている。額田郡幸田町の東光寺遺跡に類例(註8)があり、稲荷山式を中心とした時期のものと考えられる。6は口縁端部は丸く、内面には隆帯が外面には浮線文が見られる。表面は磨滅が著しく調整は不明である。中部高地の浮線文系土器と考えられる(註9)。7は口縁端部に二つの小さな突起を貼付けた深鉢で

ある。内外面の調整はミガキである。8は表面に粘土紐の継ぎ目の痕跡と考えられるものがわずかに見られるが、全体に磨減が著しく調整は不明である。7・8は大洞B式に並行する時期(註10)と考えられる。9は口縁部がくの字に折れる浅鉢である。内外面はミガキ調整で、口縁端部外面直下に突帯がめぐる。10は口縁部外面の端部より少し下に断面三角形の突帯があるが、調整は不明である。器壁が薄いことから浅鉢と考えられる。11は口縁端部外面に低い突帯があり、二枚貝による押し引きが施されている。外面は二枚貝による条痕、内面はナデである。9～11は五貫森式である。12は端部が丸く仕上げられた深鉢で、外面は条痕で半載竹管の可能性があるが磨減のためはっきりしない。樫王式である。13は口縁端部が丸く仕上げられた深鉢で、口縁部端部よりやや下の外面には棒状工具による圧痕がある低い突帯がある。馬見塚式の可能性がある。14は単純口縁の壺である。口縁端部には押し引きが施されているが、工具は二枚貝あるいは半載竹管の可能性があるがはっきりしない。外面調整は条痕、内面はナデである。口縁部外面には指による押し引きが施された突帯がある。15～37は単斜条痕の深鉢の胴部である。外面の器面調整に使用されている工具は半載竹管、櫛歯状工具であり、内面はナデが多い。14～37は単斜の条痕であり、樫王式である。

9. 土製品 (第65図600～603)

600はSD-1のC区・1層から出土した鳥形の注口土器である。胴部以下と口縁部の一部は欠損しているが、口縁部内面には折り返した粘土が押さえられ、やや厚くなっている。また背中に当たる部分の内面には粘土の継ぎ目が縦方向に見られ、粘土板を使って背中合わせて整形されている可能性が高い。調整は内面はナデ、外面は磨減している部分が多いがミガキの痕跡が残っている。口径は4.7cm、残存長10.6cm、残存高5.7cmである。

601はSD-1のE区・3層から出土した直径5.9cm、厚さ1.3cmの土製紡錘車である。器面は指押さえによる小さな凹凸が見られ、ヘラ書きによって表面には「竜」、裏面には「竜」あるいは「蛇」が描かれている。表面の竜は全長4cmで頭部、体部、脚部ともに輪郭2本とその内部に1本の合計3本の線で構成されている。前足・後足ともいっばいに伸ばし、頭部は後ろを振り返っている構図を取るが頭部と前足の一部が欠損している。裏面の竜あるいは蛇は長さ幅とも3cmであるが、体部の中心は大きく欠損している。脚部の表現は省略されており、細長い頭部と先端がやや膨れた尾部のみが残存している。構図は横向きで頭部にはヘラ書きによる目が表現されている。胴部は欠損しており、仮にこの部分に脚があったとするとややバランスが悪くなってしまい、蛇の可能性の方が高いと考えられる。出土層位は欠山様式の最下層であるが、下層の山中様式からの混入の可能性がある。他遺跡での類例から推定すれば、畿内第V様式の前半頃(山中様式)のものである可能性が考えられる。

602はSD-1のE区・2層から出土した土玉である。直径は3.2cm、高さ2.6cmの球形で、中心には直径3mmの穴が開けられている。重量は25gである。

603はSD-2から出土した土鍾である。直径は1.8cm、長さは4.1cm、穴の直径は6mmである。調整は指押さえて、重量は15.3gである。

10. 石器 (第27-30図)

縦長剥片 (第27図1・2・5)

1は縦長剥片である。全体に磨減が著しく、角が取れたようになっているが、表面には縦長剥片の剝離痕が4条あり、打面には打面調整の小さな剝離がある。2は縦長剥片である。表面はほとんどが表皮であり、石核調整の初期に削出された剥片である。5は縦長剥片である。全体に磨減が著しく、角が取れたようになっており、一部には表皮が残っている。1・2はSD-1・1層、5はSD-1・3層からの出土であるが、いずれも遺構に伴うものではなく、縦長の剥片を素材にしたナイフ形石器に伴うものと考えられる。

使用痕のある剥片 (第27図3・4・9)

3は縦長剥片を素材とした使用痕のある剥片である。下端は折られているが、両側縁には不規則で微細な剝離が見られ、使用時に付いた刃こぼれと考えられる。4は使用痕のある剥片で、形は不整形である。両側縁には不規則で微細な剝離が見られ、使用時に付いた刃こぼれと考えられる。表面の下端近くには表皮が残っている。3はSB-1、4はSK-16からの出土であるが、いずれも遺構に伴うものではなく、1・2・5と同様に縦長の剥片を素材にしたナイフ形石器に伴うものと考えられる。

9は横長の小剥片であり、側縁と下端には不規則で微細な剝離が見られ、使用時に付いた刃こぼれと考えられる。打面調整はなく、自然面も残り、表面の剝離の方向も不規則であるところから、縄文時代のものと考えられる。SD-1・1層からの出土であるが、遺構に伴うものではない。

石鏃 (第27図6・7)

6は平基の石鏃で安山岩製である。7は突基の石鏃で先端は2方向に割れており、回転によって割れたものと考えられる。6はSD-1・2層、7はSD-1・1層からの出土であるが、いずれも混入と考えられる。

石錐 (第27図8)

8はSK-17から出土した安山岩製の石錐で、先端はかなり磨減して丸くなっている。

石棒 (第27図10、第30図46)

10は石棒である。断面は楕円形であり、両端は欠損している。下端では厚さは変わらないが、幅が広がっている。46は石棒の頭部である。半分は縦方向に欠損しているが、断面はほぼ楕円形で頭部には鉢巻状に沈線が見られる。10・46はSD-1・3層からの出土であるが混入と考えられる。

石杵 (第27図11)

11は石杵(石冠の可能性もある)と考えられる。表面は敲打によって調整されており、全体の3分の2ほどは欠損している。下端の機能面にくぼみはなく、平滑になっており中心部ほどよく磨減して

いる。11はSD-1・4層から出土しており、遺構に伴うもので、山中様式（畿内第V様式前半）のものと考えられる。

磨製石斧（第27図12、第28図13）

12・13は磨製石斧である。12は頭部と刃部の両方が欠損している。全体に敲打により調整されているが、下部ではやや偏平になっており、一部に研磨した面が残っている。13は欠損している部分が多く、表面は敲打によって調整されているが、敲打痕があまり目立たないほど平滑に磨かれている。12はSD-1・4層、13はSX-1からの出土であるがいずれも遺構に伴うものではない。

砥石（第28図14～17）

14は凝灰岩製の砥石で、表裏と側面の3面が使用されている。特に側面は全体に弓なりにくぼむほど使い込まれており、現在使われている鎌砥石のように手に持って使用されていた可能性が高いと考えられる。14はSX-1から出土しており、共伴する土器が示すように7世紀前半頃のものと考えられる。15は輝緑凝灰岩製の砥石で裏面がかなり剥離しており、下端も欠損しているため全体形は不明である。表面に凹面の機能面が2面あり、側面にも使用痕が認められる。15はSD-1・3層からの出土であり、弥生時代後期のものと考えられる。16は角柱状の砥石である。下端は大きく欠損し、上端は自然面であるが表裏と両側面はほぼ同じように平滑になっており、特に表面はかなり使い込まれ、凹面になっている。石質は輝緑凝灰岩であるが、15よりかなりきめが細かく、良質である。16はSD-1・1層からの出土であり、弥生時代後期の可能性があるが、遺構検出時（既に重機により表土層が除去されていたところを検出している）に出土したものであり、石質もやや異なるところから他時期のものの混入である可能性も否定できない。17は大型の砥石の一部と考えられる。表土層出土のため、時期は不明であるが石質は凝灰岩で14に類似しており、比較的軽い。

敲石（第28図18・19、第29図27～33）

敲石は方形周溝墓の溝（SZ-1）と環濠（SD-1）から出土している。敲石は細長い石の両端を使用しているもの（18・19・28～33）、全面にわたって敲打痕があるもの（27）の2者があり、実測図中の矢印の部分が使用されている。27は磨製石斧と同じ石質であり、磨製石斧からの転用である。石斧再生用あるいは石皿・磨石等の目立て用と考えられる。

細長い石の両端を使用しているものは、凹石としても使用されている可能性が高い。

磨石（第28図21、第29図25・34）

磨石は楕円形の石の表裏面を使用しており、凹石としても使用されているもの（34）がある。磨石は石皿と共に使用されている可能性が高い。実測図中の矢印が使用されている部分である。

凹石（第28図20・22・23、第29図24・26・34・35、第30図36～38）

凹石は方形周溝墓の溝（SZ-1）と環濠（SD-1）から出土している。凹石は敲石としても使

用されているもの（34・37・38）がある。実測図中の一点鎖線が使用されている部分である。

石皿（第30図39～42）

石皿は欠損しているものが多いが扁平な石が使用されている。機能面は平坦である。磨石と組合わせて使用されたものと考えられる。

磨石・磨石・凹石・石皿はS Z-1出土のもの（18～26）とS D-1出土のもの（27～41）があり、S D-1のものは弥生中期からの混入の可能性もあるが、基本的には遺構に伴うものと考えられる。

11. 玉（第30図43・44）

43は淡青色のガラス玉である。法量は直径3.7mm、内径1.4mm、厚さ3.2mmである。C-1区の東側で遺構検出中に発見され、この時に破損してしまっている。44はわずかに緑がかった灰色の滑石製の玉である。法量は直径4.7mm、内径1.5mm、厚さ1.7mm、重さ0.18gである。堅穴住居（S B-1）の遺構検出中に発見され、S B-1に伴うものと考えられる。

12. 鉄器（第30図45）

45は鉄鎌である。先端と刃部は欠損しているが、現存長は63mm、現存幅27mm、厚さ4mmである。柄の装着が想定される基部の折り返し部分には木質は残っていなかった。着柄角度は約100度で直角に近い。

45はS B-1の遺構検出時に出土したものであり、S B-1に伴うものである可能性が高い。

註1 賛元洋 「長床様式の構造」『三河考古』第8号 1995年

註2 久永春男 「弥生式土器総括」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963年

註3 石黒立人 「第2章 2. 弥生時代から古墳時代の土器 C. 中期」『朝日遺跡V（土器編・総論編）』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1994年

註4 愛知県教育委員会 「愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）」1983年

註5 藤澤良祐 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要 第3号』1994年
三重県埋蔵文化財センター

註6 小林久彦 「須恵器出現以降の土師器の変遷」『三河考古』第3号 1990年

註7 紅村弘・増子康真 「東海先史文化の諸段階（資料編Ⅰ）」1977年

註8 酒井俊彦 「第Ⅲ章 第1節 （1）縄文土器」『東光寺遺跡』
（財）愛知県埋蔵文化財センター 1993年

註9 中沢道彦 「『女鳥羽川式』生成小考」『突帯文土器から条痕文土器へ』 1993年 第3図長
野県大町市長畑遺跡出土資料の2の土器

註10 文化庁 「吉胡貝塚」1952年

第6章 環濠（SD-1）出土土器

1. 後期弥生土器の形態分類（第31～65図）

SD-1から出土した弥生土器は、後期全般の土器様式が含まれていた。大別様式名では、山中様式と欠山様式である。東三河における山中様式は、尾張や伊勢、西遠江とは近似するが、異なった部分も存在することから、地域的小様式として寄道様式（山中様式三河型）と呼んでいる。当然後期後半の欠山様式においても地域色が認められており、欠山様式三河型とも呼ぶべき地域的小様式が存在する。

SD-1から出土した後期弥生土器を分析するにあたり、形態分類から始めることにしたい。形態分類は、現在認識しうる型式分類を基にするが、一つの型式としてまだ確立されていないものもあり、それは便宜的に形態上の違いだけで分類した。まず器種構成を説明することから始めたい。

器種構成

高井遺跡SD-1出土の土器の器種構成は、機能上、飲食物等を入れる容器としての壺（貯蔵形態）、煮炊きを使う甕（煮沸形態）、食物を盛る器としての高坏と鉢と器台（供献形態）の3形態5器種が基本となる。器種構成の算出は、SD-1出土土器すべてを対象に口縁部個別計測法と底部部個別計測法（挿表5）の両者を行った。分類項目は壺・甕・大型高坏・小型高坏・極小鉢・鉢・器台の7器種に分類した。口縁部個別計測法は口縁部破片を個別に分類して集計した。底部部個別計測法

挿表3 三河の器種構成

	高井SD-1 全 体		高井SD-1 4～6層		高井SD-1 1～3層		高井表採		東光寺1993		欠山1994	
壺	301	26.0	63	21.8	238	27.5	38	21.2	63	28.5	39	32.7
甕	373	32.3	110	38.1	263	30.3	64	35.8	75	33.9	34	28.6
高坏	460	39.8	111	38.4	349	40.3	77	43.0	72	32.6	34	28.6
鉢	19	1.6	5	1.7	14	1.6	—	—	10	4.5	9	7.6
器台	3	0.3	0	0	3	0.3	0	0	1	0.4	3	2.5
	1156	100%	289	100%	867	100%	179	100%	221	100%	119	100%

は、壺では底部、高坏と甕では脚台部と体部の接合部について計測した。ただし鉢に関しては、壺と同じ平底であるため、その個体数は壺に含まれることになる。

計測の単位は、A～E区の各発掘区の取り上げ単位（挿表1）ごとに行い、最終的に1～6層の人工層位ごとに集計した。このため、廃棄ブロックとはほぼ一致するが、ある程度の誤差が存在する。

口縁部個別計測法と底部個別計測法では高坏と甕の比率に13%程の違いが見られた。これは、甕が煮沸に用いられ、割れやすくなっており、口縁部より、脚台部と体部との接合部の方が遺存しやすいためと考えられる。そこで、以下では、底部個別計測法により他遺跡の資料と比較する。

SD-1出土の土器は、ほぼ4～6層が山中様式、1～3層が欠山様式の器種比率と考えて良い。構成比率は後期前半（4～6層・挿表5参照）では壺：甕：高坏が21.8%：38.1%：38.4%であり、残り1.7%ほどが鉢であった。鉢は口縁部が残存し、確認できた個体数であるが、さらに同じ底部を有する壺に含まれている可能性もある。たとえ鉢の個体数が2倍となっても、鉢は4%弱であり、わずかである。壺は逆に20%強の比率となるが、大勢には影響しない。

ここで1988年に紹介した高井遺跡表採品についても比率を算出しているので比較してみたい（鈴木1988）。壺：甕：高坏は21.2%：35.8%：43.0%であり、壺は両者ともほとんど変わらない。表採品の方はやや高坏の比率が高く、逆に甕の比率が低い。しかし全体的には近似した比率を示していると言える。おおむね壺：甕：高坏が1：2：2で、数%の鉢が伴うと考えて良い。なお器台は、極まれにしか見られず、当地域では基本的に欠落している器種と見て良い。

後期後半（1～3層）では、壺：甕：高坏が27.5%：30.3%：40.3%で1.6%の鉢、0.3%の器台を伴う。後期前半の4～6層と比べると壺が増加する反面、甕が減少し、ほぼ同比率となる。おおむね主要3器種は3：3：4となる。鉢は後期前半と同じく数%程度存在する。器台は0.3%存在するが、

挿表4 西遠江の器種構成

様 式	弥生後期前半 伊 場 様 式		弥生後期後半 欠 山 様 式		古墳前期前半 元屋敷様式(古)	
	伊 場	梶子8次	三 和 町	梶 野 1982溝	梶 野 SD24	大 平
遺跡遺構 器 種						
壺	40 %	40 %	49 %	47 %	37 %	35 %
甕	25 %	24 %	26 %	25 %	30 %	30 %
高 坏	32 %	29 %	20 %	23 %	33 %	35 %
鉢	3 %	7 %	(5 %)	(5 %)	—	—

基本的に欠落する器種として良い。

ところで、欠山遺跡の報告書（小坂井町1994）に欠山遺跡から出土した土器の比率が提示されている。それによるとほぼ壺：甕：高坏が1：1：1であり、高坏が高井遺跡と比べてやや低い。ただ算出方法が提示されていないため、資料の有効性については検討を要するものである。なお後期前半の東光寺遺跡でも、実測図面に掲載された土器（SD08・09・10）の数を数えたところ、欠山遺跡とほぼ同じ結果が得られている（愛知埋文1993）。

器種比率については、三河においてはまだ資料数が少なく普遍的な数値が判明していないのが実状である。

欠山遺跡SD-1・2のように完形品ばかりが出土するような在り方は、一時期に使用されていた器種の比率を示している可能性がある。また高井遺跡のように大量に破片と共に出土する場合は、ある期間内の集積であり、当然複数様式を含んでいた。それぞれの器種、器形により耐用期間が異なることが予想されることから、集落内における一時期の使用数と、不要となって投棄、集積された土器群では、器種比率が異なる可能性がある。つまり、例えば壺と甕と高坏を1個ずつもって生活していたとしても、壺1つの耐用期間に、甕は1つ半、高坏は2つ消耗したとすれば、その投棄された集積での器種比率は、壺：甕：高坏が2：3：4となる。

器種比率を算出するにあたっては、その算出法の統一及び、算出された器種比率が、一時期に一村かもしくは一大家族が使用した土器なのか、それとも長期間の集積の結果なのかを見極めた上、評価しなければならない。残念ながら、資料が揃っていないため、その評価は今後の課題となろう。

ところで、山中・欠山様式の東端に位置する西遠江について、今回とほぼ同様の算出方法で器種比率を出した資料がある（浜松市1991）。

後期前半の伊場様式（山中様式西遠型）では伊場遺跡、梶子遺跡での結果から、壺：甕：高坏：鉢の比率は、ほぼ40%：25%：30%：5%である。高井遺跡では22%：38%：38%：2%であるから、壺において差が著しいことにまず気付く。甕を1とした場合、壺は西遠江が1.6、高井が0.6、高坏は西遠江が1.2、高井が1.0であり、高坏はほぼ甕と同じ数量存在するのに対し、壺が倍以上、西遠江の方が多い。

少し西遠江での器種比率の変化に触れておこう。弥生時代後期前半では壺：甕：高坏：鉢が40：25：30：5%であったのが、後半になると、50：25：20：5%と、壺が約半数を占め、高坏が比率をやや落としている。しかし古墳時代前期になると、壺が減少し、主要3器種の比率がほぼ1：1：1となる。2割近い壺の減少は、貯蔵形態の変化を示すものと考えられる。

壺（挿図3・4）

壺は広口壺、直口壺、長頸壺、甕壺、脚付壺、その他の壺に分けられる。類例は今回高井遺跡から出土した土器の他に、かつての表採品、郷中遺跡、東光寺遺跡、欠山遺跡、欠山第Ⅱ貝塚、柳原遺跡、中村遺跡、矢作川河床遺跡等の出土土器も使用した。それぞれの報告書や論文・資料集のNo.を遺跡略称名の後につけて表記している（挿表7）。なおNo.のみのものは今回の高井遺跡から出土した土器である。

挿表5 高井遺跡SD-1出土土器種構成表

高井遺跡SD-1 器種構成表 口縁部計測法

層位	壺口縁	甕口縁	高坏大	高坏小	合 計
1層	91	140	51	11	293
2層	79	142	71	18	310
3層	81	138	67	10	296
小計	251	420	189	39	899
4層	24	59	48	3	134
5層	32	70	41	15	158
6層	9	25	14		48
小計	65	154	103	18	340
合計	316	574	292	57	1,239

高井遺跡SD-1 器種構成表 口縁部計測法

層位	極小鉢	鉢	器 台	合 計
1層	5	2	2	9
2層	4	4	1	9
3層	2	4		6
小計	11	10	3	24
4層		6		6
5層		2		2
6層				
小計		8		8
合計	11	18	3	32

高井遺跡SD-1 器種構成表 口縁部計測法(%)

層位	壺	甕	高坏	鉢	器台	合 計
1層	30.1	46.4	20.5	2.3	0.7	100
2層	24.8	44.5	27.9	2.5	0.3	100
3層	26.8	45.7	25.5	2.0		100
小計	27.2	45.5	24.7	2.3	0.3	100
4層	17.2	42.1	36.4	4.3		100
5層	20.0	43.8	35.0	1.2		100
6層	18.8	52.0	29.2			100
小計	18.7	44.2	34.8	2.3		100
合計	24.9	45.1	27.4	2.4	0.2	100

高井遺跡SD-1 器種構成表 底部計測法

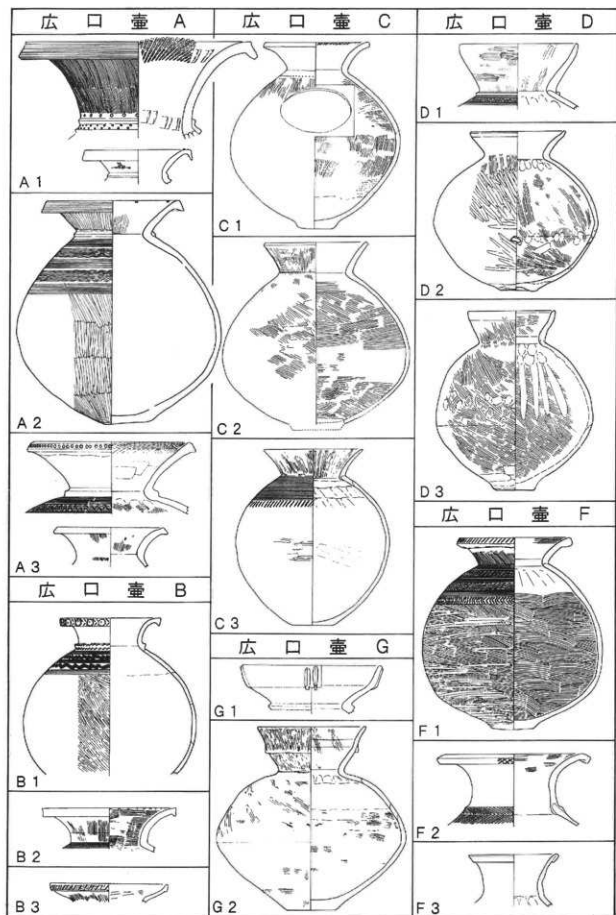
層位	壺底部	甕脚部	高坏大	高坏小	合 計
1層	82	102	88	46	318
2層	97	87	74	29	287
3層	59	74	84	28	245
小計	238	263	246	103	850
4層	27	38	28	6	99
5層	26	50	40	15	131
6層	10	22	15	7	54
小計	63	110	83	28	284
合計	301	373	329	131	1,134

高井遺跡SD-1 器種構成表 底部計測法

層位	極小鉢	鉢	器 台	合 計
1層	5	2	2	9
2層	4	1	1	6
3層	1	1		2
小計	10	4	3	17
4層		3		3
5層		2		2
6層				
小計		5		5
合計	10	9	3	22

高井遺跡SD-1 器種構成表 底部計測法(%)

層位	壺	甕	高坏	鉢	器台	合 計
1層	25.1	31.2	41.0	2.1	0.6	100
2層	33.1	29.7	35.2	1.7	0.3	100
3層	23.9	30.0	45.3	0.8		100
小計	27.5	30.3	40.3	1.6	0.3	100
4層	26.5	37.3	33.3	2.9		100
5層	19.5	37.6	41.4	1.5		100
6層	18.6	40.7	40.7			100
小計	21.8	38.1	38.4	1.7		100
合計	26.0	32.3	39.8	1.6	0.3	100



挿図3 形態分類図-1

①広口壺

広口壺はさらに口縁・口唇部の形態から、A—垂下口縁部、B—拡張口縁部、C—単純口縁部、D—内湾口縁部、E—バレス系、F—折返口縁部、G—複合口縁部の7形式に分けられる。

広口壺A（垂下口縁部）

口縁部を斜め下方に垂下させたもので、前時期の長床様式からの系譜上にあるものである。垂下の大きさにより、A1—A3の3つに分けられる。

A1—口唇部を斜め下方に大きく引き出したもの（16・156—159、東光寺863等）。

A2—口唇部を斜め下方に引き出したもの（148・297、東光寺726）。

A3—口唇部は少し肥厚し、端面は斜下方にのびるもの（294・454等）。

この広口壺Aは基本的に大型壺であり、三河の後期前半の飾られる壺の基本形である。口唇部には櫛描横線文、内面には櫛刺突列点文もしくは羽状文が施される。口唇部が短くなったA3では口唇部の横線文は省略される。

広口壺B（拡張口縁部）

口唇部を器壁の厚さよりも厚くし、ほぼ垂直な面をもたせるものである。

B1—口縁部がかなり厚いもの（高井に類例なし、郷中23）。

B2—口唇部を少し下に垂下させ、もしくは上下両方を拡張して厚くしたもの（164・293・300等）。

B3—口唇部を上へ拡張したもの（318・465等）。

口唇部の拡張は、施文が目的と思われるが、省略されるものも多い。

広口壺C（単純口縁部）

口縁部はハの字形に開き、口唇部は単純な作りのものである。

C1—口唇部に端面をもつもの（1・15・25・99等）

C2—口唇部を丸く仕上げるもの（20・22・28・166・311等）

C3—口唇部が先細りするように仕上げるもの（167等）。

広口壺D（内湾口縁部）

口縁部が、内湾しながら開くものである。

D1—口唇部が丸く仕上げられるもの（24・492等）

D2—口唇部が水平もしくは外傾する端面をもつもの（23等、欠山391）。

D3—口唇部は強いヨコナデ調整が施され、また内傾面をもつもの（480等、欠山390）。

この形式の広口壺は、西遠江に多く存在する。

広口壺E（バレス系）

口唇部を肥厚させ、そこに、凹線文を施文する。肩部には櫛描横線文と、櫛刺突山形文を組み合わせ、施文する。胎土は白いものが多く、赤彩が盛んに行われる。尾張に多い広口壺で、三河にも少数存在する。

E1—頸部で一度直立する口縁部をもつもの（288、中村27）。

E2—頸部がく字形に折れるもの（高井に類例なし、柳原4）。

E 2が、バレス壺の典型とされるものである。高井遺跡では、E 1の288が出土しているだけである。これは口唇部や肩部の文様が、一般的なバレスとは異なっている。

広口壺F（折返口縁部）

口縁端部を折り返して肥厚するものであり、基本的には西遼江以東の土器である。

F 1—頸部がくの字形に折れるもの（466）。

F 2—頸部が折れず、口縁部が大きく外反するもの（289）。

F 3—口縁部が長く、あまり外反しないもの（152・291等）。

F 1が西遼江系、F 2が東遼江系、F 3が駿河系に属する。

F 1の典型は466である。口唇部には櫛刺突列点文、肩部には櫛描横線文と波状文と刺突波状文が施文されている。肩部以下では、ハケの後ヨコミガキが施されている。またプロポーションからも、西遼江からの搬入品と見てさしかえない。

F 2の典型は、289である。肩部には有段羽状文が施されている。これは天竜川から原野谷川流域の中途に多く見られるものであるが、胎土から都田川流域あたりからの搬入品と考えられる。

F 3には152と291がある。291は289と比べて口縁部の開きが小さく、折り返しも長目に行われている。プロポーションから、駿河の影響が考えられる。しかし胎土からは、直接搬入されたものとは言えない。

広口壺G（複合口縁部）

口縁部がくの字形に折れて受口を呈するものである。

G 1—口縁部が明確に屈折し、複合口縁部を形成するもの（96・149）。

G 2—口縁部がゆるく屈曲し、そこに突帯を施すことにより複合口縁部を形成するもの（91・150・453）。

複合口縁部自体も、折返口縁部の広口壺Fと同様、西遼江以東に分布するものである。G 1は頸部がくの字形に折れることから、西遼江からの搬入品と見て良い。口縁部外面に棒状貼付文を数個1単位で数方向に配するもの遼江でよく行われる施文法である。G 2は、当地における模倣品であろう。

②長頸壺

扁球形の体部に、直立する長い頸部がつくものである。底部は、丸底のものと安定の悪い平底のものがある。

A 1—口頸部が円筒状に直立するもの（193）。口縁部には櫛描横線文と二枚貝の刺突による山形もしくは××状の文様が施される。

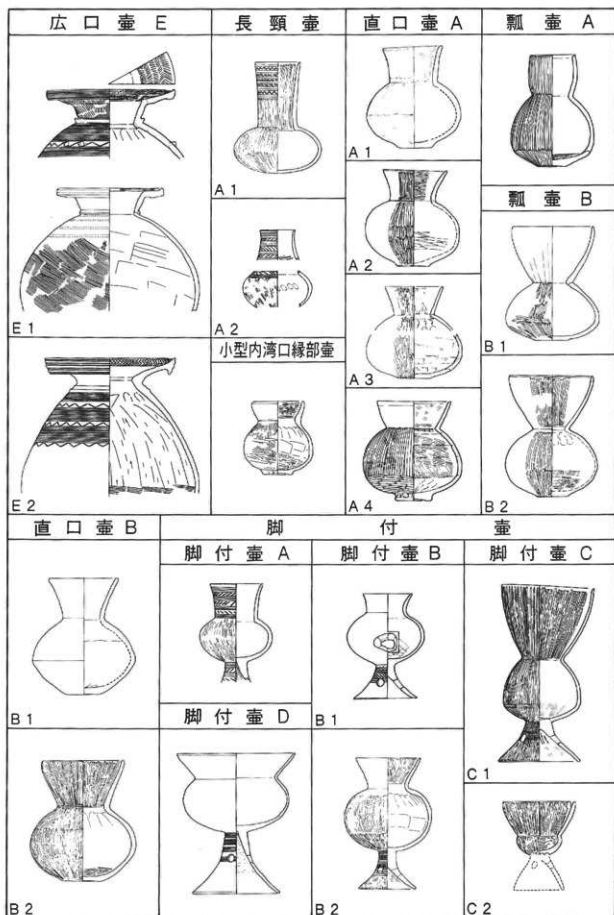
A 2—口頸部が、やや内傾して立ち上がるものである。文様はA 1と同様のものが施される（高井に類例なし、東光寺731・732）。

③直口壺

直口壺A

体部は扁平で、口縁部は頸部でくの字に折れて直線的に開く。口縁部の変化により4分類される。

A 1—弱く外反する長い口縁部をもつ（39等）。



挿図 4 形態分類図-2

A 2 - ハの字形に弱く外反するもの（高井に類例なし，欠山315）。

A 3 - ハの字形に直線的に開くもの（488等）。

A 4 - ハの字形に開くがやや内湾するもの。口唇部に内傾面をもつものもある（高井に類例なし，欠山貝70）。

直口壺 B（長頸直口壺）

口縁部の長さが、器高の $1/3 \sim 1/2$ のもので、長頸壺と直口壺 A 1 との中間的なものである。

B 1 - 口縁部が直線的に開くもの（38等）。

B 2 - 口縁部がやや内湾気味に開くもの（105・191・339）。

④ 瓢壺

口縁部が内湾して開く中型壺である。口縁部の大きさにより、A と B の 2 つに分けられる。

瓢壺 A（短頸瓢壺）

口縁部の長さが、器高の約 $1/3$ の程度で、下腹れの体部を有する。底部は、小さく安定が悪い。口唇部には内傾面をもつ（高井に典型例なし，欠山貝71）。

瓢壺 B（長頸瓢壺）

口縁部の長さが、器高の約 $1/2$ を占めるものである。体部は、扁平である。口唇部には一般的に内傾面をもつ。体部の形によりさらに 2 分される。

B 1 - 体部が扁平で下腹れのもの（192等）。

B 2 - 体部が扁球形で下腹れしないもの（341，欠山398）。三河から西遠江にかけて多く見られる。

⑤ 脚付壺

壺の仲間で脚部が付けられるものは、長頸壺、直口壺、長頸瓢壺がほとんどである。わずかに扁平な壺に脚部をつける例がある。

脚付壺 A（長頸壺）

長頸壺に高坏と同様のラッパ状に開く脚部がつく。口縁部と脚部には櫛描横線文と櫛刺突文が施されている。この脚付壺 A には、内湾して開く欠山形高坏の脚部をつけた例はない（高井に類例なし，東光寺830）。

脚付壺 B（直口壺）

直口壺に、高坏と同じ脚部がつくものである。これにも欠山形高坏と同じ脚部をつけたものはない。直口壺が口縁部の形態により分類されたように、脚付壺 B も 2 分される。

B 1 - 口縁部が外反するもの（4，東光寺740）。

B 2 - 口縁部が直線的に開くもの（109等）。

脚付壺 C（長頸瓢壺）

長頸瓢壺（瓢壺 B）に脚部をつけたものである。脚部は内湾して開くものと、外反するものがある。脚付壺 C は体部の大きさにより、2 分される。

C 1 - 体部は長頸瓢壺と全く同じ形態で、口縁部の長さと同様の長さがあるもの（高井に典型

例なし、欠山貝20)。

C 2 一 体部が口縁部の長さより、小さくなったもの (350・501等)。

脚付壺 D (扁平壺)

扁平な壺もしくは鉢形の土器に脚部がつけられたもの (高井に類例なし、東光寺972)。類例はあまり多くない。

⑥ 小型の内湾口縁部壺

小型壺は、大型の広口壺に近似したものが多い反面、形態的に変化に富み規格性が低い傾向にある。そのため、小型壺として独立させて分類していない。ただしその中において、内湾口縁部をもつものは一群として抽出できそうである。この内湾口縁部の小型壺は、内湾口縁部をもつ広口壺 D より口径に比して頸部が太いものが多く、また形態的に鉢に近いものもある (485・490)。

甕 (挿図 5)

煮沸形態は甕であり、しかも台付甕に限られる。口縁部の形、口唇部への刻目の有無、ハケ調整等により、A～F の 6 形式に分類される。

甕 A

口縁部は、くの字形に折れる単純なもので、口唇部には刻目を施すことを原則とするが、一部省略されるものもある。

A 1 一口唇部が面取り調整され、その端面に刻目が施されるもの (7・59・219等)。

A 2 一口唇部は丸く仕上げられるが、A 1 と同じような刻目が施されるもの (358・365等)。

A 3 一口唇部は面取り調整されるが、刻目は施されないもの。体部外面はタテハケ、内面には縦位のケズリが施される (高井には類例なし、東光寺763)。

甕 A は、基本的に尾張と共通した部分をもつ形式である。A 3 は、口唇部に刻目を施さないが、内面に縦位のケズリを施すなど、尾張の手法が認められるため、これに含めた。

甕 B

口縁部はくの字形に折れる単純なもので、口唇部には端面の下の方に刻目が施される。

B 1 一口唇部は面取り調整され、端面下端に刻目が施される (42等、高井表探74)。

B 2 一口唇部は丸く仕上げられ、縦位の刻目が施される (355・521等)。

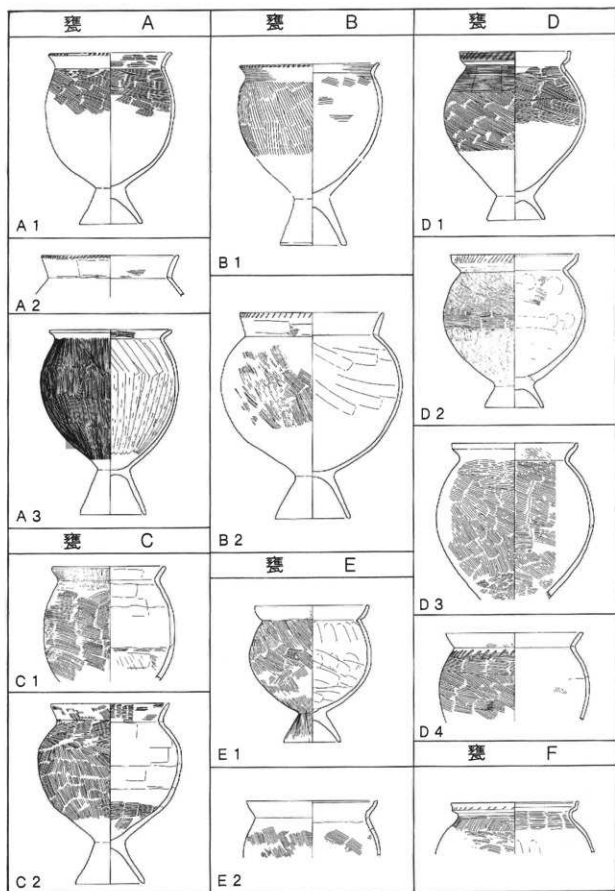
甕 B は、刻目の施し方や、やや高い高台をもつことなど、西遠江と共通した形式である。

甕 C

口縁部はくの字形に折れる単純なもので、口唇部には、刻目が施されない。なお A 3 と異なり体部内面がケズリ調整されることはなく、板ナデもしくはハケ調整されるものである。

C 1 一口唇部に端面をもつもの (6・49等)。

C 2 一口唇部が丸く仕上げられるもの (200・505等)。



挿図 5 形態分類図-3

変D

口縁部が、一旦上へ屈折して受口状口縁部をなすものである。この仲間は伊勢地方に多くあり、肩部に刻目を施すものが多い。また単純口縁部であっても肩部に刻目を有するものは、この変Dに含めた。

D 1—口縁部の立ち上がりは大きく、外面に刻目を施す。肩部にはヨコハケを施すが、体部は右下がりの単斜方向のハケである (124)。

D 2—口縁部の立ち上がりは小さいが、外面に刻目を施すもの (123・222・223)。

D 3—口縁部がわずかに立ち上がるもので、外面の刻目は施されないもの (高井に典型例なし、欠山363)。

D 4—単純口縁部ではあるが、肩部に刻目を有するもの (363)。

変E

口縁部が内湾するものである。

E 1—口唇部が丸く仕上げられるもの (357・512等)。

E 2—口唇部に内傾面を有するもの。 (594・596等)

変F

S字状口縁部を呈するものである。

口縁部は頸部からゆるやかに外反し、上半分もわずかではあるが外反しながら直立する。頸部内面にはヨコハケ、外面肩部はタテハケの後ヨコハケを施す。口縁部外面には、押引状の刻目が施される (389)。なお赤塚分類のA類のS字状口縁部台付甕に当たる (赤塚1990)。

高坏 (挿図 6・7)

高坏は、大型高坏と小型高坏がある。大型高坏は、外反口縁坏部とラッパ状に開く脚部からなる山中形高坏 (高坏A) と、深い有稜の坏部と内湾する脚部からなる欠山形高坏 (高坏B)、そして、深い碗形の坏部とラッパ状に開く脚部をもつ高坏Cの3形式に分けることができる。

小型高坏はウィングラス形のA、浅い碗形坏部をもつB、直立する口縁部をもつ有稜の坏部のC、半球形の坏部をもつDの4形式に分けられる。

①高坏 (大型高坏)

高坏A (山中形)

A 1—口縁部は、直立するが短い。脚部は、ふんばった形で開きは小さい。類例は少ない (238)。

A 2—口縁部は外反するが、坏部は一般的にあまり深くはならない。脚部はラッパ状に開くが、下半分の開きが著しい。円形のスカシ (円孔) は真中より下に入れられる (131, 郷中31)。

A 3—脚部はきれいに外反し、円孔は中位より少し下に施される。坏部は、一般的に深い作りのものが多くなる。口唇部を肥厚させるものがある (12等, 高井表採101)。

A 4—脚部下半は外反せず、直線的に開く。円孔はほぼ中位に施される。坏部口縁部は、外反度が弱くなる (65等)。

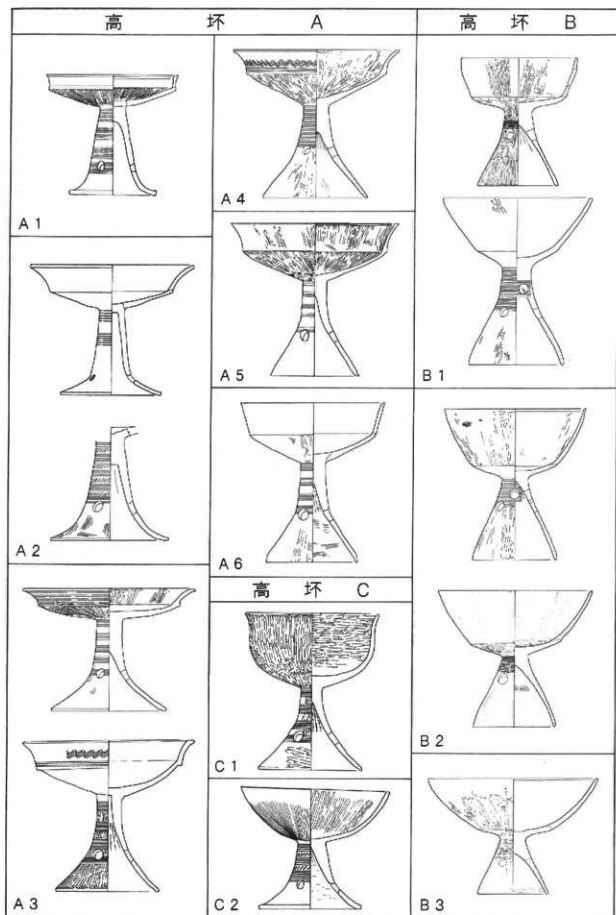


插图 6 形態分類圖—4

A 5－脚部の下半は直線的で、開きは小さくなる。坏部は深くなり、口縁部の外反も弱く直線的となる（126等）。

A 6－脚部下端が内湾するものが出現し、口縁部は直線的に開くだけとなる。口縁部外面に施す横線文や波状文は省略されるものが多くなる（242・243）。

高坏B（欠山形）

高坏Bは内湾口縁部と内湾脚部をもつもので、口唇部にはほぼ例外なくヨコナデ調整を強く施し、内傾面を有する。

B 1－脚部上半が外反して開き、中下半が大きく内湾して開くもの。円孔は中位より上に設定される。坏部は深く、坏底部が底径と同じ位に小さくなる。しかしまだ坏底部径の大きなもの、口縁部が短く、やや浅いものもある（241・252・397・400等）。

B 2－坏部と脚部の深さはほぼ同じで、器高の中位に接合部がくる。脚部は接合部から即座に内湾して開く。口唇部にはほぼ例外なく、内傾面をもつ。脚部に施文される横線文は、上半部だけに幅広く（櫛描横線文が密接して2～3段）に施される（250・542・546等）。

B 3－器高が低くなり、それに伴い坏部は浅く、脚部は小さくなる。口唇部内傾面は、ほぼ例外なく認められる。脚部の内湾は、弱くなる（402・405・408等）。

高坏C（碗形坏部）

碗形の坏部とラッパ状に外反する脚部をもつ大型高坏であり、坏部の深さにより2分される。

C 1－深い碗形の坏部をもつもの（高井に典型例なし、高井表採118）。

C 2－C 1より浅い碗形（半球形）をした坏部をもつもの（高井に類例なし、東光寺811）。

②小型高坏

小型高坏A（山中形＝ワイングラス形）

ワイングラス形の坏部に、外反して開く短い脚部がつくものである。坏部の形態により3分される。

A 1－坏部は中央でくの字形に折れ、脚部は端部近くで大きく外反する（高井に類例なし、矢作川138）。

A 2－口縁部は口を狭めてから直立するもので、脚部はラッパ状に大きく開く（79・80等、郷中70）。

A 3－口縁部は、体部から直接直立する。脚部は、外反するものと下半が直線化するものがある（高井に典型例なし、東光寺815）。

A 4－口縁部は直立するが、坏部全体としては浅くなる。またこみの部分が張らず深碗形の坏部になるものもある。脚部は、A 3と同じである（85等、高井表採135）。

小型高坏B（欠山形）

B 1－坏部はやや下半が張った浅い碗形で、口縁部は短い直立する。脚部は低く大きく外反するものと、やや内湾して大きく開くものがある。口唇部にはほぼ例外なく強いヨコナデ調整が施され、内傾面を有する。また坏部下半に稜をもつものもある（275・574・575）。

B 2－B 1の坏部を、さらに浅くしたものである。脚部は、一般的に低く、大きく開くものだけである（577）。

小型高坏C（有稜坏部）

C—坏底部が折れて、口縁部が直立するもので、脚部は小さいがラッパ状に開く。脚部下端での開きは大きく、また円孔の位置も低い（高井に類例なし、矢作川141）。

小型高坏D（浅碗坏部）

D—坏部はやや浅い半球形を呈し、下半部は張らない。脚部は、A2と同様にラッパ状に開く（高井に類例なし、東光寺4・5・6次—1）。

器台（挿図7）

器台は類例が少なく、器種比率に占める割合は微々たるものである。筒部が太いA、山中形高坏の坏口縁部を取り除いた形のB、欠山形高坏の坏口縁部を取り除いた形のC、拡張口縁部をもつDの4形式に分けられる。

器台A（太頸）

器台Aは、畿内第V様式の器台の影響を受けて作られたものと思われる。頸部（筒部）は太く、脚部と坏部の境は不明瞭である。円孔は、何段かに施される（606、東光寺925）。

器台B（山中形）

山中形高坏の坏口縁部を省略したものである。坏部は浅い皿状で、脚部はラッパ状に外反する。坏部中央から脚部に抜ける穴があげられている。脚部の円孔は、高坏Aと同じである（高井に類例なし、郷中100）。

器台C（欠山形）

高坏Cの坏口縁部を省略したものである。脚部の変化により3つに分けられる。

C1—脚部が一旦外反してから内湾して開くもの（高井に類例なし、欠山382）。

C2—脚部が坏部との接合部からすぐ内湾して開くもの（444・581）。

C3—脚部が低く直線化したもの（582）。

器台D（拡張口縁）

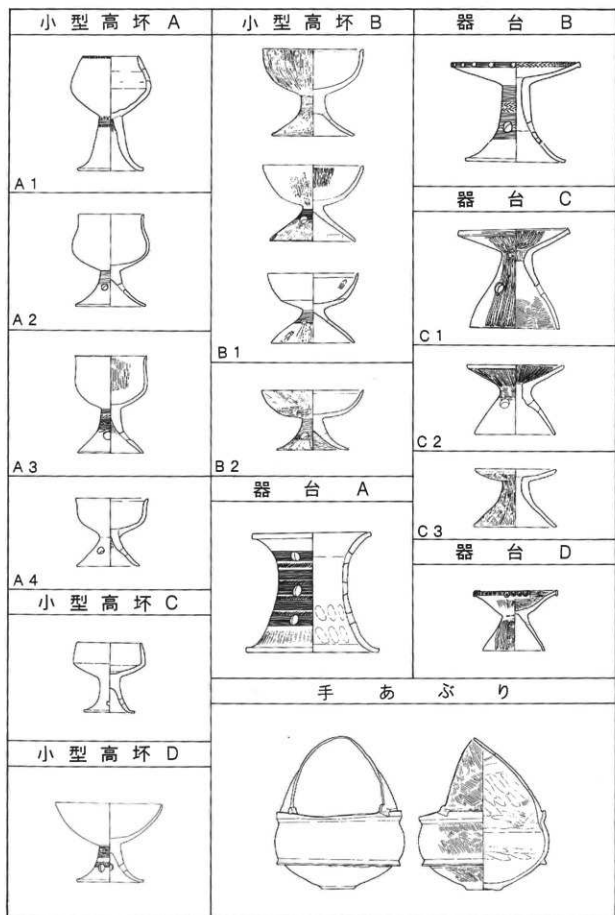
口唇部を拡張して、そこに施文するもので、脚部は断面台形を呈する（高井に類例なし、欠山遺跡383）。欠山遺跡SD—1出土の383は口唇部が少し拡張するだけであるが、尾張の春日井市勝川遺跡SZ22（愛知埋文1983）出土例ではバレス壺と同じ口縁部を有している。

鉢（挿図8）

鉢は、大きく台付寛の体部と同じ形態のものと、碗形のものと、極小なものの3つに分けられる。台付寛の体部と同じ形態のものは単に鉢と呼ぶ。この鉢は、大型のA、体部が扁平なB、折返口縁部をもつC、小型のDの4種類に分けられる。

①鉢（寛形鉢）

鉢A（寛形）



挿図 7 形態分類図-5

一般的な台付臺から台部を取った形をしたものである。体部はほぼ球形で、頸部はくの字形に折れ、短い口縁部がつく。口縁部の形によりさらに3つに分けられる。

A 1 - 口縁部が外反するもの (592)。

A 2 - 口縁部が直線的に開くもの (319・591等)。

A 3 - 口縁部が内湾して開くもの (高井に典型例なし, 欠山貝62・63)。

鉢B (扁平甕形)

鉢Aと比べ、体部が扁平な作りのもの。鉢Aと同様に3つに細分される。

B 1 - 口縁部が外反するもの (89)。

B 2 - 口縁部が直線的に開くもの (284・285・446等)。

B 3 - 口縁部が内湾して開くもの (593, 欠山301)。

鉢C (折返口縁部)

体部は鉢Aと同じであるが、口縁部が折返口縁部を呈するもの。折り返し方により2分される。なおこの鉢は、東遠江以東の形式である。

C 1 - 口縁部はやや長く、先端を折り返すもの (154・447)。

C 2 - 口縁部は短く、折り返された部分が頸部に接するもの (598)。

鉢D (小型甕形)

甕形の鉢を小型にしたもので、3つに細分される。

D 1 - ハの字形に開く単純な口縁部を有するもの (144・498等)。

D 2 - 口縁部が長く、ハの字形に開くもの (90)。

D 3 - 口縁部が内湾して開くもの (欠山303)。

②碗形鉢

碗形鉢は、体部がほぼ半球形のものA、やや深い碗形のものB、深鉢形に近くなったものCの3つに分けられる。

碗形鉢A (浅碗形)

A 1 - 底部は平らに作られるが、体部は完全に半球形を呈する。口縁部は、明確には作り出されない (583)。

A 2 - 口縁部がくの字形に折れるもの (287, 東光寺818)。

A 3 - 口縁部が受口状を呈するもの (高井に類例なし, 欠山407)。

碗形鉢B (深碗形)

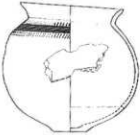
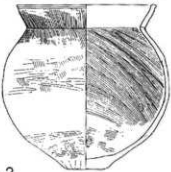
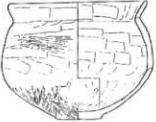
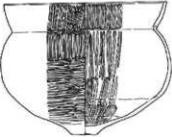
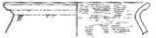
口縁部が直立し、碗形鉢Aと比べて深い作りのもの (145・146)。

碗形鉢C (深鉢形)

体部がハの字形に伸び、深鉢形に近いもの (590)。

③極小鉢

手づくねに近い極めて小さい鉢である。形態により2分される。

鉢 A	鉢 B	碗形鉢 A
A 1 	B 1 	A 1 
A 2 	B 2 	A 2 
A 3 	B 3 	A 3 
A 3 	鉢 C C 1 	碗形鉢 B 
鉢 D D 1 	極小鉢 A 	碗形鉢 C 
D 2 	B 	その他 
D 3 		手づくね 
		

挿図 8 形態分類図-6

極小鉢A—坯形もしくは浅い碗形を呈する（586～588等）。

極小鉢B—深い碗形を呈する（194・450等）。

④その他の鉢

高井遺跡から出土した鉢で、上記に分類されないものは、147・449・589などがある。鉢は他の器種と比べ、変化に富む反面、規格性が低いものと言えよう。特に小型品には著しい。

その他の器種（挿図7・8）

①手あぶり形土器

受口状口縁部をもつ鉢の上に、笠がつけられたものである。笠部は、二段目の口縁部の内側に接するようにつけられる。体部下半には、1条の突帯がめぐらされる（高井に類例なし、欠山遺跡344）。

②手づくね

452の1点が存在したのみである。

挿表6 形態分類図に使用した土器の掲載文献一覧表

遺 跡 名	略 称	文 献
高井遺跡表採品	高井表採	鈴木敏則1988
郷中遺跡	郷中	豊川市教育委員会1989
東光寺遺跡	東光寺	財団法人愛知県埋蔵文化財センター1993
東光寺遺跡4・5・6次	東光寺4・5・6次	幸田町教育委員会1987
欠山遺跡	欠山	小坂井町教育委員会1994
欠山第Ⅱ貝塚	欠山貝	東海埋蔵文化財研究会1986
柳原遺跡	柳原	東海埋蔵文化財研究会1991
中村遺跡	中村	東海埋蔵文化財研究会1991
矢作川河床遺跡	矢作川	岡崎市教育委員会1987

・文献は83頁参考文献を参照

挿表 7 形態分類掲載土器一覧表

形 式	型式	典 型 例
広口壺 A	A 1	東光寺863, 高井159
	A 2	東光寺726
	A 3	高井454, 294
広口壺 B	B 1	郷中23
	B 2	高井300
	B 3	高井465
広口壺 C	C 1	高井15
	C 2	高井311
	C 3	高井167
広口壺 D	D 1	高井24
	D 2	欠山391
	D 3	欠山390
広口壺 E	E 1	中村27, 高井288
	E 2	柳原 4
広口壺 F	F 1	高井466
	F 2	高井289
	F 3	高井291
広口壺 G	G 1	高井149
	G 2	高井91
長頸壺	A 1	高井193
	A 2	東光寺731, 732
直口壺 A	A 1	高井39
	A 2	欠山315
	A 3	高井表探26
	A 4	欠山貝70
直口壺 B	B 1	高井38
	B 2	高井191
瓢壺 A	A	欠山貝71
瓢壺 B	B 1	高井192
	B 2	欠山398
脚付壺 A	A	東光寺830
	B 1	東光寺740
脚付壺 B	B 2	高井109
	C 1	欠山貝20
脚付壺 C	C 2	高井501
脚付壺 D	D	東光寺972
小型内清口縁部壺	A	高井485
甕 A	A 1	高井 7
	A 2	高井365
	A 3	東光寺763
甕 B	B 1	高井表探74
	B 2	高井521
甕 C	C 1	高井49
	C 2	高井505
甕 D	D 1	高井124
	D 2	高井222
	D 3	欠山363
	D 4	高井363

形 式	型式	典 型 例
甕 E	E 1	高井512
	E 2	高井594
甕 F	F	高井389
	A 1	高井238
高坏 A	A 2	郷中31, 高井131
	A 3	高井12, 高井表探101
	A 4	高井65
	A 5	高井126
	A 6	高井242
高坏 B	B 1	高井252, 400
	B 2	高井250, 542
	B 3	高井402
高坏 C	C 1	高井表探118
	C 2	東光寺811
小型高坏 A	A 1	矢作川138
	A 2	郷中70
	A 3	東光寺815
	A 4	高井表探135
小型高坏 B	B 1	高井574, 575, 275
	B 2	高井577
小型高坏 C	C	矢作川141
小型高坏 D	D	東光寺 4・5・6 次 1
器台 A	A	東光寺925
器台 B	B	郷中100
	C 1	欠山382
器台 C	C 2	高井444
	C 3	高井582
	D	欠山383
鉢 A	A 1	高井592
	A 2	高井591
	A 3	欠山貝63, 62
鉢 B	B 1	高井89
	B 2	高井446
	B 3	欠山301
鉢 C	C 1	高井447
	C 2	高井598
鉢 D	D 1	高井498
	D 2	高井90
	D 3	欠山303
碗形鉢 A	A 1	高井583
	A 2	東光寺818
	A 3	欠山407
碗形鉢 B	B	高井145
碗形鉢 C	C	高井590
極小鉢 A	A	高井586
極小鉢 B	B	高井450
鉢その他		高井449, 147, 589
手あぶり	A	欠山344
手づくね	A	高井452

(No.は各報告書・資料集・論文中の遺物No.) 遺跡等略称名は挿表 6 参照

挿表 8 型式分類案

	器 種	形 式	略号	型 式
壺	広口壺	垂下口縁	A	A 1・A 2・A 3
		拡張口縁	B	B 1・B 2・B 3
		単純口縁	C	C 1・C 2・C 3
		内湾口縁	D	D 1・D 2・D 3
		パレス系	E	E 1・E 2
		折返口縁	F	F 1・F 2・F 3
		複合口縁	G	G 1・G 2
	長頸壺	長頸壺	A	1 形式で 1 型式
	直口壺	直口壺	A	A 1・A 2・A 3・A 4
		長頸直口壺	B	B 1・B 2
	瓢壺	短頸瓢壺	A	1 形式で 1 型式
		長頸瓢壺	B	B 1・B 2
	脚付壺	長頸壺	A	1 形式で 1 型式
		直口壺	B	B 1・B 2
		長頸瓢壺	C	C 1・C 2
		扁平壺	D	1 形式で 1 型式
	小型壺	内湾口縁	A	1 形式で 1 型式
		その他	B	
	その他		A	
甕	台付甕	尾張系	A	A 1・A 2・A 3
		遠江系	B	B 1・B 2
		無刻	C	C 1・C 2
		伊勢系	D	D 1・D 2・D 3・D 4
		内湾口縁	E	E 1・E 2
		S 字状口縁	F	1 形式で 1 型式
	その他		A	
高 坏	高坏 (大型)	山中形	A	A 1・A 2・A 3・A 4・A 5・A 6
		欠山形	B	B 1・B 2・B 3
		碗形坏部	C	C 1・C 2
	小型高坏	山中形	A	A 1・A 2・A 3
		欠山形	B	B 1・B 2
		有稜坏部	C	1 形式で 1 型式
		浅碗坏部	D	1 形式で 1 型式
	その他		A	
器台	器台	太頸	A	1 形式で 1 型式
		山中形	B	1 形式で 1 型式
		欠山形	C	C 1・C 2
		拡張口縁	D	1 形式で 1 型式
	その他		A	
鉢	鉢 (甕形)	甕形	A	A 1・A 2・A 3
		扁平甕形	B	B 1・B 2・B 3
		折返口縁	C	C 1・C 2
		小型甕形	D	D 1・D 2・D 3
	碗形鉢	浅碗形	A	A 1・A 2・A 3
		深碗形	B	1 形式で 1 型式
		深鉢形	C	1 形式で 1 型式
	極小鉢	坏形	A	1 形式で 1 型式
		碗形	B	1 形式で 1 型式
	その他		A	
その他	手あぶり	手あぶり	A	1 形式で 1 型式
	手づくね	手づくね	A	1 形式で 1 型式
	その他		A	

2. 型式組列

①弥生後期の土器様式

三河において、後期弥生土器は、寄道様式と欠山様式の2様式で理解されている。寄道様式は豊橋市瓜郷遺跡出土資料を標識に設定されたものであるが(久永1963)、一括資料はなく、しかも資料的に貧弱なものであった。その後も、資料は増加せず、1988年に高井遺跡から一括採集された資料が紹介されたにすぎなかった(鈴木1988)。しかしこの数年に豊川市郷中遺跡(豊川市1989)と幸田町東光寺遺跡(愛知埋文1993)の発掘調査が行われ、その報告書が刊行されるに至り、資料の増加をみた。

欠山様式は、小坂井町欠山第Ⅱ貝塚溝(豊橋市1963)及び、豊田市高橋遺跡32号住居跡(豊田市1969)の一括資料を基に設定されたものである。資料的には今でも基準資料と考えてきつかなないが、様式として普遍化されるにあたって、より新しい一群の土器、たとえば元屋敷様式に伴う高坏やS字状口縁部台付甕を含めていた。そのため古墳時代前期の元屋敷様式との間で混乱をきたしてきた。

そして近年、タイプサイトである欠山遺跡が再び調査され、その報告書が出され、また一宮町宮沢遺跡(一宮町1989)、新城市諏訪遺跡(愛知埋文1989)、田原町柳原遺跡(田原町1991)等の報告書が次々と刊行されるなど、当期の資料は充実した。資料の増加に伴い、にわかに寄道～欠山様式を再検討する気運が高まってきたと言える(鈴木徹1994)。

本節では、これらの資料及び高井遺跡のSD-1の資料を基に、今まで不充分であった型式組列の検討を行い、弥生時代後期の土器編年の前提としたい。

②SD-1出土土器のグルーピングと大型高坏の型式組列(挿図9、挿表9参照)

今まで説明してきた形態分類は、必ずしも型式と認められるものばかりではなく、一部単なる形態上の違いにより分類したものも含まれる。本来なら全て型式のレベルで話を進めるべきであろうが、報告書の性格上、出土遺物を網羅的に扱う必要があったためである。しかしや統一を欠く基準ではあるが、三河における弥生時代後期の土器型式は、全て提示できたと考えている。

では型式組列の検討から始めよう。高井遺跡SD-1は、遺物取り上げに際し全ての遺物についてその位置(平面的位置と高さ)を記録している。その結果、人工層位ではあるが6層からなる土器群に分けることが可能と判断された。この6層の土器群は、多少位置をかえながら、堆積している状況がうかがわれた。しかし後述するが、出土土器の型式から4層と5層、1層と2層は分離は難しく、また3層や1・2層の中にはさらに廃棄単位を示すと思われるブロック状のまとまりが存在することが判明した。以上のことを念頭におき、各形式における型式変化を具体的に見て行きたい。まず比較的型式変化が明瞭な高坏から見ていこう。

高坏A1は238の1点だけで、しかも破片資料である。これは3層から出土しているが、後述するように混入であろう。A1は各地で散見するが、単純にこの型式だけを出土する遺構は、現在三河・遠江には存在しない。尾張でも状況には変りないが、出土点数は多い。畿内地方では第V様式の初めに位置付けられていることから、A1は高坏Aの中では最古型式となろう。

A2も、4層と5層に1点ずつ脚部の破片があるが、確実な例はない。これも、残存もしくは混入

品であろう。脚部が下端近くで折れ、大きく開くこと、円孔透かしが低い位置に設定されることは、山中様式の中では古い型式として広く認められている（赤塚1992・鈴木1991）。よって基本的に、高井遺跡SD-1出土土器群より先行する型式と考えて良いだろう。

A3は、最下層の6層で完形品が出土している。破片資料としては4・5層にも存在するが、基本的に6層に伴う型式と考えられる。

高坏A4やA5は、脚部下半が直線的に開くようになったもので、4・5層で主体的に見られる。さらに口縁部が直線的になったA6は3層から出土する。よって層位的にも型式学的にもA3→A4・A5→A6の変化は6層→4・5層→3層の堆積と対応するものと見られる。

3層は、A6型式の他、B1・B2型式も含んでいる。しかし3層の中をよく見ると、A6型式が集中し、ほとんど他型式を含まないブロックが存在することに気付く。それは、第14図に示した中央部分である。またこの図からは、中央のブロック以外に左右の両側にも遺物が密集していることが分かる。中央と右のブロックの間は空白となっているが、左のブロックとの間はまばらに遺物が出土している。よってこのまばらの部分を加えて、合計4つのブロックを認めることが可能である（挿図9）。A6型式を多く出土した中央部を3層Aブロック、北（図の右）を3層Bブロック、南（図の左）で出土土器が疎な部分を3層Cブロック、南端（図の左端）を3層Dブロックと呼ぶことにしたい。高坏の型式では、3層Aブロックが高坏A6型式、3層Bブロックと3層Cブロックが後述する高坏B1型式を、3層Dブロックが高坏B2型式を中心に出土している。高坏の型式から3層Aブロック→3層Bブロック・3層Cブロック→3層Dブロックの順序で土器が廃棄されたものと推定される。このブロックは、廃棄の単位を示す可能性が高い。

次に、高坏Bについて考えてみよう。高坏Bは、3層から出現する。高坏Aよりは後出であることは明らかである。高坏Bは、B1～B3の3型式に分けられるが、B1とB2が3層、B3が2層から出現している。B3が最も新しい型式であることは明らかであるが、B1とB2の関係は、高坏Aにより近い長脚のB1がB2に先行する型式と考えるのが自然であろう。3層の3層CブロックにB1、さらに3層DブロックにB2型式があり、分かれて出土する。しかも南へ向けての傾斜堆積であることからすれば、B1→B2の型式変化は明らかとなる。

型式学的に最も新しいと考えられるB3型式は2層から多く出土し、1層では少数であった。詳しくB3型式の出土位置を確認してみると、挿図9のように、SD-1の南端部に集中していることが分かる。よって中央の空白部分より南の1層と2層は、その南端部分だけがB3型式の段階になってから投棄されたものと考えられる。南部の土器については1層と2層の関係は、単に上下の関係ではないことになる。発掘調査の所見や出土状況から1層と2層は人工的に層位としたが、ここでは1・2層とまとめて呼ぶことにする。

1・2層における土器群のまとまりは、北側の1・2層Aブロック、南側の1・2層Bブロック、南端の1・2層Cブロックの3ブロックと空白部の1・2層Dブロックを含めた4つである（挿図9参照）。1・2層Aブロックと1・2層BブロックにB2型式が、1・2層CブロックにB3型式が主に出土することが認められる。なお1・2層Dブロックでも全く土器が出土していないわけではなく、破片としては高坏B3型式が認められている。

高坏B1→B2→B3の型式変化は、3層B・Cブロック→3層Dブロック・1・2層Aブロック・1・2層Bブロック→1・2層C・Dブロックの廃棄順序に対応すると考えることができよう。

挿図9は、高坏や他の器種の型式を加味してグルーピングしたものである。各ブロックに伴った土器について挿表10に一覧表にしているので参照されたい。これらの土器群は、廃棄単位を示す可能性が高く、また一括資料として扱えるものと思われる。しかし、環濠というオープンな遺構であるばかりか、投棄が何度も行われ、土器が密集して出土していることから、混入品も若干見られる。よって一時期の単純な一括資料とはいいがたいが、型式学的検討を加えれば、他時期の型式は除外できるはずである。以下他の形式の型式組列を検討する中で、このことについては触れて行くことにしたい。

挿表9 高坏の型式と廃棄ブロックの関係表

様式	寄道Ⅰ	寄道Ⅱ		寄道Ⅲ			欠山Ⅰ	欠山Ⅱ	欠山Ⅲ
高坏型式	A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2	B3
SD-1 廃棄 ブロック	(未確認)	(東光寺)	6層 (表採)	4・5層		3層A	3層B・C	1・2層A・B 3層D	1・2層C

高坏C1は、1点破片として569が1層から出土している以外は、4・5層で出土していることから、高坏Aとほぼ同時に存在した型式と認めて良い。C2については類例は多くないが、尾張にも見られることから、坏部を浅く作る小型高坏Dとともに、尾張との関係が深いものと考えられる。

③基準資料

弥生時代後期前半の寄道様式では、高坏の型式は6つに分けられたが、A4・A5型式は現状では同一時期の型式と見た方が自然であった(4・5層)。高坏の型式を基準にすれば5時期に細分される可能性を有するが、後述する他の壺や甕といった形式はそれほど型式変化が顕著ではない。よって高坏A1型式に代表される未確定な後期初頭、高坏の脚部や、広口壺の口縁部等に内湾化傾向が見られない段階(高坏A2・A3型式)、各器種において内湾化、受口化が進む段階(高坏A4・5・6型式)にまとめておく。先走ることになるが、これを寄道Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ様式としておこう。Ⅱ様式は、逆に高坏の型式から、東光寺遺跡SD08・10(愛知埋文1993)や郷中遺跡SB10(豊川市1989)と、高井遺跡SD-1-6層土器群や表採品(鈴木1988)の差に見られるように新古に分けられる可能性を有している。Ⅲ様式も、SD-1の4・5層と3層Aブロックの土器群の差に見られるようにさらに新古に分けられる可能性を有する。

後期後半の欠山様式も、高坏B1・B2・B3型式に対応するようにⅠ・Ⅱ・Ⅲ様式に分けられる。Ⅰ様式は、3層出土品の内3層Bブロック・3層Cブロックを基準とする。Ⅱ・Ⅲ様式はSD-1では前者が3層Dブロック、1・2層Aブロック、1・2層Bブロックを、後者は1・2層南端の1・2層Cブロックを基準とする。また別遺跡では、Ⅰ様式は欠山遺跡SD2下層(小坂井町1994)、Ⅱ様式は欠

山第Ⅱ貝塚溝（豊橋市1963）、またⅢ様式は田原町柳原遺跡（東海埋文研1991）や湖西市中村遺跡（東海埋文研1991）の資料等を基準にすれば、3つの様式は自ずと分離は可能である。以下、SD-1の層位別もしくはブロック別出土土器群及び他遺跡の基準資料を基に他形式の型式変化を考えていくことにしよう。

④ 広口壺の型式組列

広口壺Aは、弥生時代中期後葉長床様式から受け継がれる形式であり、A1→A2→A3と型式変化が想定される。A1は3層以下（3・4・5層）から出土していることから、寄道様式に限られる型式である。しかも寄道様式における飾る壺の典型であり、広口壺B・Cとともに広口壺の主体を占める。この3型式の中では最も量的に多く、また特に大型の壺は16・156のようにA1型式に限られる。

A1型式を少し簡略化したA2型式も東光寺遺跡SD10で認められるように、すでに後期初めから存在すると見て良い。また高井遺跡SD-1では297のように2層からも1点出土しているが、基本的には寄道様式に限られる型式と考えて良い。実際欠山第Ⅱ貝塚溝他の欠山様式の諸遺構でも、混入品と考えられるもの以外には、この型式は基本的に存在しない。

さらに簡略化したA3型式も、東光寺SD10に類例が見られるように、後期前半から存在する。しかし、これは2層で294・298・454・460の4点が出土しているように、明らかに欠山様式を構成する1型式となっている。ただし類例はそれほど多くなく、また広口壺Bとの差も不明確になってきている。

広口壺Bは、口唇部の肥厚によりB1・B2・B3型式に分けている。口唇部を厚く肥厚したB1型式は、郷中遺跡SB10で認められるように、古い傾向にある。B2型式については、後期全般に認められる。高井遺跡SD-1では5層で33、3層で164、2層で300・293・295・459が確認されている。寄道様式から欠山様式全般にまたがる型式であり、しかも三河を特徴付けるものである。寄道様式でも広口壺Aに次ぐ主体的存在であったが、欠山様式になっても広口壺Cとともに主体をなしている。また欠山様式の段階では、後期前半の広口壺Aに変わり、三河における飾る壺の首座を占めるようになる。B3型式については類例は多くないが、高井SD-1では2層で318・462・465の3点が認められている。口唇部を少し上に突出させるのB3型式は、類例は少ないが、欠山様式に限られる可能性がある。

広口壺Cは、単純口縁部である。基本的に寄道様式の段階では口唇部に端面を有するC1型式ではば占められる。口唇部に端面を有する手法は台付甕の口唇部、大型高坏Aの坏口唇部等にも見られ、後期前半を特徴付ける手法である。口唇部を丸く仕上げるC2型式は寄道様式にも存在するが、欠山様式になると特徴的な存在となる。C2型式は欠山様式になると、広口壺Bとともに広口壺の主体を占める。口唇部を先細りさせるC3型式は欠山Ⅱ様式から出現し、Ⅲ様式に顕著となるが、主流となるのは、古墳時代前期の元屋敷様式になってからである。

ところでC2型式とした内、作り方において特徴的な一群が、高井遺跡SD-1の5層から出土している。それは、第33図の26～30の壺である。これらは器壁が厚く、形態的にも規格性が低く稚拙な作りで、体部外面をタテミガキするといった共通の特徴を有している。また口縁部周辺は雑なヨコナデで調整し、色調も明褐色を呈し、胎土も近似したものである。なお4層から出土した92もこれらの土器群に近似する。この土器群を寄道様式を構成する一型式と認めるか、ある未熟な土器製作者の作

挿表10 廃棄ブロック別出土遺物一覧表

廃 棄 ブロック	S D - 1 出土遺物No. (第31～44図)
6	1～13
4・5	14～47, 49, 51～99, 101～111, 113～147
3 A	50, 149, 164, 165, 171, 172, 174, 189, 191, 197, 200, 203, 204, 209, 236, 239, 242, 243, 248, 249, 255, 262, 272, 282, 284, 438
3 B	48, 100, 148, 150, 157, 158, 161, 183, 184, 185, 202, 205, 210, 214, 216, 218, 219, 222, 229, 232, 233, 241, 244, 245, 254, 260, 270, 273, 276, 278, 280, 283, 286, 287, 307, 428
3 C	155, 162, 201, 252, 285, 400, 445
3 D	112, 176, 181, 193, 195, 196, 198, 211, 215, 223, 226, 230, 247, 250, 251, 256, 258, 259, 263, 264, 271
1・2 A	289, 295, 297, 298, 302, 303, 309, 318, 324, 327, 329, 335, 339, 341, 343, 353, 358, 361, 363, 366, 371, 385, 395, 409, 414, 415, 416, 419, 421, 424, 432, 434, 446, 449, 452, 542
1・2 B	288, 294, 300, 306, 308, 317, 320, 330, 334, 337, 340, 348, 359, 360, 368, 372, 374, 375, 378, 379, 380, 381, 383, 396, 398, 401, 403, 410, 411, 418, 426, 435, 443, 455, 457, 463, 470, 476, 481, 485, 494, 501, 502, 510, 514, 516, 519, 520, 521, 523, 529, 530, 531, 532, 544, 549, 550, 552, 554, 561, 565, 568, 573, 574, 575, 576, 592, 594, 599
1・2 C	163, 166, 167, 168, 169, 175, 182, 187, 188, 192, 199, 212, 227, 228, 253, 257, 261, 267, 268, 275, 291, 292, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 319, 322, 323, 325, 326, 328, 331, 336, 338, 344, 349, 355, 357, 367, 369, 373, 388, 397, 402, 405, 406, 407, 408, 412, 413, 417, 420, 422, 425, 427, 430, 433, 444, 453, 454, 459, 461, 462, 465, 466, 467, 469, 471, 472, 473, 474, 475, 477, 478, 479, 480, 482, 483, 484, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 495, 497, 498, 499, 503, 504, 505, 508, 511, 512, 513, 515, 517, 518, 522, 524, 525, 526, 527, 533, 534, 535, 536, 537, 540, 541, 543, 545, 546, 547, 548, 551, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 562, 564, 566, 569, 571, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 588, 590, 591, 597
1・2 D	351, 352, 365, 389, 390, 391, 392, 399, 431, 436, 439, 442, 538, 539, 585, 596

品として、つまり個体の性格（個性）として評価しないか、意見が別れる所である。この土器群については後で贅氏が考察するが、筆者は製作者個人に基因するものであって、これだけを独立させ別の型式と認めることはしない。

広口壺Dは、内湾口縁部をもつもので、5層で23・24が確認されている。5層段階から出現すると考えられるが、普遍化するのは欠山様式以降と思われる。この形式は、欠山第Ⅱ貝塚等には普遍的に存在する。欠山様式を特徴付けるのは、内傾面をもちヨコナデ調整を強く施すD3型式である。口唇部を丸くするD1や外傾する面をもつD2は、それに先行する型式である。口唇部を強くヨコナデ調整し、内傾面を作る手法は、大型高坏や瓢壺やその他の器種・器形にも認められ、欠山様式を特徴付ける。また、寄道様式や後の元屋敷様式とを区分する手法上のメルクマールにもなる。ただし広口壺Dは、広口壺の中では三河においては客体的な存在である。西遠江においては、折返口縁部壺（広口壺F）とともに後期後半の主体的形式となっている。なおD1型式とした24の頸部突帯は、やや肩寄りに設定されており、西遠江の影響が感じられる。

バレス壺である広口壺Eは、基本的には尾張特有な形式である。少数ではあるが、三河にも存在するのは、尾張の影響と考えられる。ただし在地で製作されているのか、搬入品なのかは、はっきりしない。広口壺Eは、高井遺跡では2層と1層から1点ずつ検出されている。しかし欠山第Ⅱ貝塚溝やそれに並行する時期（欠山Ⅱ）の段階の諸遺構にはバレス壺は見当たらず、欠山Ⅲ様式段階の柳原・中村両遺跡から見られるようになるなど、ある程度普遍的に存在するようになるのは、欠山様式も終末に近い頃である。

折返口縁部をもつ広口壺Fは、基本的に西遠江以東の形式であり、大半は搬入品であろう。Fの466は西遠江の欠山様式に並行する時期の土器であり、実際1層からの出土である。F1は、豊橋市西山遺跡N A21区住居址2でも欠山Ⅰ様式の段階のものが確認されている。

F2は東遠江の菊川様式であり、289はその新段階に位置付けられるものである。欠山様式に並行するもので、2層から出土したと合致する。

F3は肩が張らず、頸部が折れないプロポーションを有し、口縁部の外反度が弱くしかも折り返し方が扁平であることから、駿河の影響を受けた土器である。152が4層、291が1・2層Cブロックからの出土である。

広口壺Gは、複合口縁部をもつものである。西遠江の伊場様式と東遠江の菊川様式では、その古い段階にも存在はするものの、その数は少ない。しかし伊場新様式、菊川様式中段階以降になると、数量的に増加する。G1の96と149は頸部の折れ方等から伊場様式であり、しかも口縁部の長さから見て、その新様式に位置付けられるものである。高井遺跡SD-1の3・4層から出土したと符号する。これらも西遠江からの搬入品であろう。

G2は、複合口縁部の在地的模倣品と考えた。91は4層の出土で、寄道様式に遡るものである。150は3層Bブロックの出土であり、欠山Ⅰ様式に降るものである。また453は1・2層Cブロックで出土しており、欠山Ⅲ様式の段階である。なお高井遺跡表採資料中にも、G2があり、出現は6層段階に遡る可能性が高い。

G2は、古墳時代前期の元屋敷様式から出現する二重口縁部壺との違いが問題ではあるが、出土状

態を尊重すれば、G1のような複合口縁部を在地的にアレンジして製作されたものと考えられる。よってG2は型式として普遍化できるものとは考えていない。赤石山系を挟んで西遼江と接する地域であり、恒常的な交流が存在したが故に、こうした局所的な土器が製作されたのだろう。

⑤長頸壺・直口壺・瓢壺・台付壺等の型式組列

長頸壺・直口壺と瓢壺A・Bは、基本的に3層を境に前者が下層、後者が上層より出土する。よって前者は寄道様式、後者は欠山様式を構成する形式と考えて良い。長頸壺は円筒状の口縁部をもつA1と狭口になるA2の2型式があり、ともに東光寺遺跡(SD08・10)に類例が存在するように、後期初めより存在する型式と考えられる。両型式ともに基本的に欠山様式には引き継がれない型式であるが、欠山第Ⅱ貝塚溝でA2型式が認められることから、一部残存する可能性はある。A1型式の193は、3層Dブロックから出土しているが、伝世もしくは混入品であろう。

直口壺は、三河を特色付ける器形である。A1～A4の型式に分けているが、A1とA2は口縁部の長さの違いだけであり、同一時期の型式と見て良い。基本的に口縁部が外反→直線→内湾化と変化し、A1・A2→A3→A4と型式変化する。A1型式は、高井遺跡では6層で3、5層で39など、下層でしか検出されていない。また東光寺遺跡では、口縁部が外反するA1・A2型式に限られている。

直口壺A3型式は、SD-1の6層段階と同時期と考えられる高井遺跡の表採品中に認められることから、寄道Ⅱ様式でもその後半以降の型式と考えられよう。A3型式も、基本的には寄道様式に納まる型式と考えられるが、一部欠山様式まで残存する例が知られている。SD-1の2層からはやや変形した326と327が出土している。

また口縁部を内湾化させたA4型式は、欠山第Ⅱ貝塚に出土例が認められるごとく、欠山様式に含まれる。しかし欠山様式になると、中型壺の主流は、直口壺から瓢壺に移行している。

長頸の直口壺Bも、5層でB1型式の38、4層でB2型式の105、3層で瓢壺に近い形態に変化した191が存在するなど、型式変化は明確である。直口壺Aと同じような型式変化をとげ、後期前半ではほぼ消滅する形式であろう。

長頸壺や直口壺に代わって欠山様式に盛行するのは、口唇部を強くヨコナデ調整し内傾面を有した内湾口縁部の瓢壺類である。SD-1では、3層より上層でしか確認されていない。瓢壺は、基本的に短頸のAと長頸のBに2分される。瓢壺は、A・Bともに、古墳時代前期の元屋敷様式まで引き継がれる。しかし元屋敷様式段階のものは、口唇部の内傾面が形骸化し、内湾化が弱くなるなどの型式変化を起こしている。なお現状では欠山様式の中での型式変化を認めることはできない。長頸瓢壺Bは、下腹れの顕著なB1と扁球形のB2に分けられているが、前者は尾張に多く、後者は三河・西遼江に多い傾向にある。これらは、地域を異にした型式と見ることが可能である。

脚付壺は、寄道様式の段階では脚部の上ののものは、直口壺もしくは長頸壺である。それに対し欠山様式になると、長頸瓢壺を基本とする。直口壺や長頸壺が、瓢壺にとって変えられるのと同様の現象である。脚付壺Bの型式変化は、直口壺Aと同じで、外反口縁部のB1→直口縁のB2へと型式変化している。層位的にも6層の4がB1、4層の108と109がB2型式である。長頸瓢壺をのせる脚付壺Cの中で、体部が縮小したものをC2とした。この型式は小型品で、2層で350、1層で500・501の

2点が出土している。この型式は、型式変化はするものの、古墳時代前期元屋敷様式に引き継がれる。その他の脚付壺は、扁平な壺もしくは鉢形の土器に脚台をつけた脚付壺Dである。欠山様式に伴うものがほとんどであるが、類例は少ない。

小型壺の内、欠山様式には内湾口縁部をもつ壺が目立つ。これは器種・器形を越えての内湾化傾向の表れの一つであり、欠山様式を特徴付ける。なお細かな型式変化は現状では認められない。

⑥甕の型式組列

煮沸形態は、全て台付甕に限られる。よって甕と呼ぶのは、台付甕のことを示す。つまり平底で煮炊きに供される土器は、三河や西遠江においては基本的に存在しないのである。

甕は、A～Fの6形式に分けられる。甕Aは口唇部に刻目を有する在地系の甕ではあるが、尾張との関係が認められるもの、甕Bは同じく口唇部に刻目を有する在地系の甕ではあるが、西遠江との関係が認められるもの、甕Cは口唇部に刻目を有さない在地系の甕、甕Dは伊勢との関係が強いもの、甕Eは在地系ではあるが、欠山様式に見られる内湾口縁部をもつもの、甕Fは伊勢湾沿岸部のS字状口縁部台付甕である。

単純口縁部の甕A・B・C形式は、寄道様式の段階では端面調整が行われ口唇部が角張るが、欠山様式ではヨコナデ調整が行われ、端面が丸もしくは先細りするように作られる。両様式においては、異なる手法が特徴的に認められる。寄道様式の端面手法は、広口壺Cや高坏A等の主体的形式において、広く認められることは先述した通りである。

甕はA・B・Cの3形式が寄道様式では主体をなすが、この3者の内SD-1では甕Cがやや優っている。欠山様式になると完全に無刻の甕Cが主体を占める。その他の形式も多くなり、多彩な甕をもつことがこの様式の特徴となる。

甕Aの型式変化は、端面調整が行われた有刻のA1→口唇部がヨコナデ調整され、丸く仕上げられた有刻のA2型式である。甕A1型式は、SD-1の3層より下層（6層-7、5層-59・115、3層-219・221）で、A2型式は、2層（358・361・365）で出土している。もう少し土器の残りが良ければ、細かな型式変化を認めることができるかもしれないが、全体的に風化が進んで観察が難しい部分が多い。他器種に比べて甕の風化は著しく、細かな属性分析に耐えうる資料は少ない。

A3型式は無刻であるが、例外的にA形式に含めた。ともに、尾張の影響が認められることによる。A1・2型式は、刻目の施し方（端面に刻目を施す）から尾張との共通性が認められる。しかし反面、内面はタテケズリが施されず、ヨコハケもしくはヨコ板ナデを基本とする。また外面のハケ調整も肩部で水平に近く、下で垂直近くなる右下がりのハケで、尾張のものとは異なる。A1・A2型式は、尾張との共通性を有するが三河在地の甕の一つと言える。一方A3型式は、刻目を施さないが、比較的尾張に近い作りをした型式である。これは東光寺遺跡において多く出土しており、寄道Ⅱ様式にはは限られる型式なのかもしれない。

甕Bは、刻目を口唇端面の下端部に施すため、刻目が菱形にあるもので、西遠江と共通する。甕Bも、口唇部端面が次第に丸く、そして先細りするといった型式変化をする。端面を有するB1型式は、3層より下層（5層で42、3層Bブロックで216・218、3層Dブロックで215、他3層で217・220）、

口唇部を丸く仕上げるB 1型式は3層より上層(3層で213、2層で354・355、1層で521・523)で出土している。なお口唇部を先細りさせる521は、1層からの出土である。B 1が寄道様式、B 2が欠山様式を構成する1型式と認めて良い。しかし、B 1型式は3層B・Cブロックで出土しているように欠山Ⅱ様式までは確実に残っている。

甕Cは、口唇部に刻目が施されないものである。甕A・Bと同様に、C 1→C 2の型式変化が認められる。高井遺跡の表採品にはC 1型式が多く、また今回のSD-1の6・5層や4層(5・6・45・46・47・49・60・62・113・114等)でも多く出土している。風化が進んでいて明確ではないものも多いが、おおよそC 1が寄道様式、C 2が欠山様式に含まれる型式と考えられる。この型式変化は、西遼江でも確認されている。

甕Dは、受口口縁部をもつこと、肩部にヨコハケや刻目を施すこと、低い台部であることなど、伊勢の影響が認められるものである。口縁部の立ち上がりの大きなD 1型式はSD-1の4層で(124)、口縁部の立ち上がりの小さなD 2型式はほとんど3層以上の層(4層123、3層222・223、2層225・388、1層524・525)で出土している。D 2型式から口縁部刻目を省略した形態のD 3型式は、高井遺跡SD-1では確認されなかったが、欠山遺跡SD 2貝層(欠山363)で欠山Ⅱ様式段階のものが出土している。また受口を単純口縁部化したD 4型式が、SD-1の2層(1・2A-363)で出土している。どの型式も三重県の阿形遺跡に見られるなど、伊勢の影響の強い型式と言える。

欠山Ⅱ様式にあたる欠山遺跡SD 1では、D 1、D 2、D 3、D 4型式の全てが出土している。この中では、D 1とD 2型式が主体を占めている。また寄道Ⅱ様式にあたる東光寺遺跡SD 08・10ではD形式は皆無であった。それに対し寄道Ⅲ様式以降の東光寺遺跡SD 02では、D 1型式が認められている。また未報告ではあるが、東光寺遺跡1～6次調査(幸田町1987・1988)では、寄道Ⅲ様式に伴ってD 3型式が大量に出土している。

D 1型式がやや先行する可能性はあるが、ほとんど寄道Ⅲ様式に出現し、欠山様式全般にわたって存在する。伊勢系の甕Dの出現は、6層並行以前(寄道Ⅱ様式)には現状では認められない反面、出現するや、かなり普及するようである。欠山遺跡(小坂井町1994)では、甕の主体を占めていた。ただしこれほどの出土は、遺跡や遺構の性格によるものと思われる。欠山Ⅲ様式の柳原遺跡や中村遺跡では甕Dはわずかで、欠山様式の終末には、S字状口縁部台付甕の普及に伴い、逆に減少しているようである。

甕Eは、内湾口縁部を有するものであり、内湾化は欠山様式に認められる最大の特徴であることは再三述べてきた。E 1型式は、欠山様式から元屋敷様式まで存在するが、内傾面を有するE 2型式は、ほぼ欠山様式に限られるであろう。なお寄道Ⅲ様式にもわずかに内湾するものが出現するが、その数はわずかである。

甕Fは、S字状口縁部台付甕である。389は肩部のヨコハケが不鮮明であるが、頸部の折れは緩やかであり、赤塚分類のA類の中でも古相を呈するものと見て良い(赤塚1990)。これは、欠山Ⅱ様式まで遡る可能性がある。高井遺跡SD-1の1・2層Dブロックからは、389の他390～392が出土している。欠山Ⅲ様式に比定される柳原遺跡や中村遺跡からも、A類のS字状口縁部台付甕が出土している。伊勢湾沿岸全域及び、天竜川右岸地域まで、S字状口縁部台付甕や小型高坏B 2型式、パレス

壺等が普及するのは、Ⅲ様式の段階になってからのようである。実際、Ⅱ様式の欠山遺跡ではA類S字状口縁部台付甕や小型高坏B2は出土していない。なおS字状口縁部台付甕が台付甕の主体を占めるようになるのは、三河・西遠江においては、B類の新しい段階～C類の古い段階（赤塚1990）を待たなければならない。

⑦鉢・小型高坏・器台・手あぶり

鉢は、台付甕の体部と同じ形態の甕形鉢（鉢A・B・C・D）と、碗形を基本とした鉢（A・B・C）と極小鉢に分けられる。球形胴をもつ鉢A、扁平な体部をもつ鉢B、小型で球形胴の鉢Dはいずれも、基本的に外反口縁部（鉢A1・B1・D1型式）→直口縁部（鉢A2・B2・D2型式）→内湾口縁部（鉢A3・B3・D3型式）と型式変化が認められる。大きな流れとしては、外反口縁部が寄道Ⅱ様式、直口縁部が寄道Ⅲ様式、内湾口縁部が欠山様式にあたる。しかし、外反口縁部であるA1型式の592がSD-1の1層（1・2層Bブロック＝欠山Ⅱ様式）から出土するように、鉢はどの型式も継続期間が長い。

直口縁の鉢A2・B2ともにSD-1の5層より上層で出土するなど、寄道Ⅲ様式を中心に、それ以降欠山様式全般にわたって存在する。内湾口縁部の鉢A3・B3・D3型式は、ほぼ欠山様式に限られる型式である。

甕形の鉢の内、折返口縁部をもつものをC形式とした。これは東遠江菊川様式を構成する形式であり、直接間接をとわず搬入品の可能性が高い。

碗形鉢は、A・B・Cの3形式に分けられる。A1型式は最も一般的で、後期全般にわたり存在する。A2型式も類例は少ないものの、後期前半寄道様式を中心に存在する。A3型式は、受口口縁部をもち、欠山様式に限られる型式と見て良い。

碗形鉢Bは、SD-1の4層で145・146の2点が、Cは1層で590の1点が検出されている。類例が乏しく、型式変化を認めるまでには至っていない。

極小鉢は、坯形のA形式と碗形のB形式があるが、ともに後期全般に存在する。形態的に素朴な作りだけでなく、型式変化を認めることはできない。その他、鉢には少数ながら、バラエティーに富む反面、統一性がない作りのものが存在する。それらはSD-1・4層の147、同1層の440・589、東光寺遺跡の858・932・924（報告書No.）などである。なお鉢には、西遠江特有な装飾鉢（浜松市1991）や、尾張・美濃に多く見られる受口口縁部の鉢などと言ったその地域独特な鉢は、三河には存在しない。

小型高坏は、数量的には大型高坏の1/2～1/3（40%前後）が存在する。全個体数に占める割合では、3層以上で12%、4層以下で11.5%を占め、ほぼ後期全般にわたり1割強の器種比率を有する。

小型高坏A1やC型式は、高坏A1型式とともに後期初頭に位置付けられることは、畿内の例から誤りないであろう。また小型高坏は、寄道様式ではA形式、欠山様式ではB形式でほぼ占められることは、SD-1の出土状況からも明らかである。小型高坏Aは、A1型式を除くと、A2～A4の3型式に分けられる。基本的に口縁部の縮小化傾向が認められることから、A2→A3→A4の型式変化が想定される。しかし出現の早いA2型式が後々まで残るなど、単純な型式変化をたどるわけではない。

欠山様式の小型高坏Bは、B1とB2型式に分けられる。B1型式は、Ⅲ様式の中村遺跡に存在し、同じ時期の柳原遺跡には見られない。それに対しB2型式は、両者に存在していた。高井遺跡SD-

1でも最上層の1・2層Cブロックから577が出土している。B2型式は欠山第Ⅱ貝塚溝及び、同時期の欠山遺跡の遺構でも検出されていない。よってB2型式は、Ⅲ様式に至って出現する型式と考えて良い。B2型式は、浜松市大平遺跡でも出土することから、元屋敷様式の古い段階には確実に残存する。坏部を極端に浅く作るのは、尾張の影響であろう。Ⅲ様式の段階は、小型高坏B1の他、S字状口縁部台付甕(甕F)やバレス壺(広口壺E)の量的な普及に見られるように、域内での尾張の影響が強まった段階と言える。

小型高坏Dは、後期前半寄道様式に伴うものであるが、坏部を断面弓状に浅く作ることから、基本的には尾張と共通する型式と考えられる。

器台は、後期全般を通してごくわずかである。全器種に占める器台の比率は1%にも満たない量であり、三河においては基本的には欠落する器種と見るべきである。器台Aは、畿内第V様式の器台で、後期前半寄道様式(東光寺925)から、欠山Ⅱ様式(欠山第Ⅱ貝塚溝)まで認められるが、上述したごとく、これら以外に数点の類例が認められるにすぎない。器台Aは、高井遺跡のSD-1では出土していないが、SX01にはそれらしき破片(606)が認められた。

器台Bは、尾張系の器台で、郷中遺跡で確認されている。器台Cも尾張系の器台で、高坏Bと同じようにC1→C2→C3の型式変化が想定される。

器台Dも、Cと同様、尾張系の器台であり、搬入品の可能性もある。

手あぶりは、遺構に伴いしかも年代の確実な例が、欠山遺跡SD1中下層から出土している。これは欠山Ⅱ様式段階のものがある。欠山Ⅱ様式以降元屋敷様式の古い段階までは散見するが、Ⅱ様式を遡る例は知られていない。高井遺跡では類例はなく、器種としては例数の少ないものである。

⑧搬入品・外来系土器

挿図19には、明らかな搬入品や外来系土器・模倣品を提示した。ただしバレス壺Eについては版組の関係上、本図に入れている。またここでは、搬入品・模倣品以外に、他地域(西遠江や尾張)からの影響が強いものについても触れる。

搬入品もしくは、外来系土器・模倣品は、以下の6つの系統に分けることができる。

- (ア)東遠江以东登呂・飯田様式の系統 (広口壺F3)
- (イ)東遠江菊川様式の系統 (広口壺F2、鉢C1・C2)
- (ウ)西遠江伊場・欠山様式の系統 (広口壺F1・G1・D1)
- (エ)尾張山中・欠山様式の系統 (広口壺E1・E2(バレス壺)、器台B・C1・C2・C3・D、瓢壺B1、小型高坏B2・D、甕A3・F(S字甕))
- (オ)伊勢山中・欠山様式の系統 (甕D1・D2・D3・D4)
- (カ)畿内系統 (器台A)

(ア)の広口壺F3は駿河系であるが、胎土から見て駿河からの直接の搬入品ではなく、都田川流域、もしくはこの地で製作されたものである。西遠江の都田川流域から搬入された可能性が最も高い。

(イ)の広口壺F2の289は、胎土から都田川流域からの搬入品であろう。東遠江系と言ってもやはり西遠江を介して入ってきたものと推定される。折返口縁部の鉢C(C1・C2型式)も西遠江を介し

て入った可能性は高い。C 1 型式の154がSD-1の3層、447が1層、C 2 型式の598が1層出土など、寄道Ⅲ様式から欠山様式に並行するものである。また豊橋市西山遺跡N A 21区住居址2で欠山Ⅰ様式の段階のC 1 型式が出土している。菊川様式では中～新段階に位置付けられる型式である。

(ウ)の広口壺F 1の466は、プロボーションや胎土から見て、搬入品の可能性が高い。また広口壺D 1の24も、先述したように搬入品の可能性がある。広口壺Fについては、ほとんど搬入品もしくは人の移動に伴うものと理解されるが、広口壺Dについては一定量三河で作られ、在地の広口壺としての地位を獲得している。

G 1は、伊場新様式の1型式であり、西遼江からの搬入品と考えられる。このG 1型式を模倣、アレンジして在地的なG 2が成立したものと推定される。G 2はかなり局地的なものであり、型式とは認められない。これは、寄道Ⅱ様式後半から欠山Ⅲ様式まで存在する。

(エ)のバレス壺(広口壺E)は基本的には尾張の形式であるが、西遼江系の広口壺Dと同じように欠山様式の終わり頃には三河の地で一部作られた可能性が高い。柳原遺跡の例は、内面にケズリ調整を施し、白い胎土の土器であることから、搬入品の可能性が高そうである。器台B・C・Dも一部三河の地で作られているが、やはり基本的に尾張の形式で、これらの中には搬入品も含まれると考えられる。先ほども述べたように器台は、在地でも作られるが、1%以下で、当地では器種として認知された地位を得ていない。

体部が下腹れの瓢壺B 1は、尾張に中心があるようであり、その影響のもとに192が作られたと考えられる。小型高坏B 2は、尾張の影響が強まる中で、小型高坏B 1→B 2の型式変化を起こしたものと考えられる。小型高坏Dも基本的に尾張の形式であるが、わずかに三河でも見られる。

甕Aの内A 3型式は、内面ケズリ調整が施されるなど、尾張の影響の強いものである。A 1やA 2型式も、刻目の施し方等に尾張と共通する属性を有するが、影響と言えるものではないと思われる。

S字状口縁部台付甕の本貫地は北伊勢から近江にかけての地域と考えられるが、いち早く普及するのは尾張から伊勢にかけてである。三河では大本貝塚のように欠山Ⅱ様式に伴う可能性のあるものも確認されている(鈴木1986)が、ある程度の量が普及するのは、欠山様式の終末のⅢ様式になってからのことである。S字状口縁部台付甕は、一部に搬入品もあろうが、在地で作られたものが多いと思われる。なお在地で作られるS字状口縁部台付甕でも、混和剤として雲母や石英粒を入れる決まりが存在したと思われる。

(オ)は甕Dだけを上げているが、甕の他にも壺や高坏の中に、搬入品が存在する可能性は高い。ただし高坏は共通の型式であり、壺は伊勢でも広口壺B・Cが主体を占めていることから、その識別は難しい。よって搬入品については、識別できない可能性が高い。また共有の型式を有していることから、搬入・模倣の必要がなかったのも事実である。甕Dは、寄道Ⅲ様式段階に伊勢湾沿岸部で顕著に多くなる。これだけの量が全て搬入品とは考えられないことから、かなりは在地に根付いたものと思われる。しかし欠山Ⅲ様式になると、これらは減少し、主体を占めることはなくなる。

(カ)の畿内系としたのは、器台Aである。伊勢において確認されている器台のほとんどが畿内系の太頭のものであることから、器台Aは、伊勢を介して三河に及ぼされたものと理解される。また、他の器種・器形に畿内の影響が認められないのも、その傍証となろう。

⑨壺肩部文様と高坏脚部文様

外来系土器や輸入品を除く壺肩部文様は、寄道様式段階のSD-1-4・5・6層で櫛描波状文と同横線文を組み合わせるもの（櫛描文①）が3点、櫛描文に刺突文（列点文）を組み合わせるもの（櫛描文②）が1点存在する。高井遺跡SD-1-6層に並行するであろう表採品では、櫛描横線文に同波状文や同扇形文を加えるといった櫛描文①で構成されるものが、27点あり71.0%を占めている。櫛描横線文に貝もしくは櫛による刺突文を加える櫛描文②は、8点あり21.1%を占めている。その他貝もしくは櫛刺突文だけで構成されるものが2点存在する。また竹管による刺突文が1点存在する。

東光寺遺跡SD08・10では、櫛描文①が8点、同②が5点存在した。櫛描文②の5点の内、3点が直口壺の肩部文様である。直口壺や長頸壺の頸部・肩部及び高坏脚部の文様には、櫛描文②が多用される。よって壺肩部文様の内、直口壺の3点を除くと、櫛描文①と②はほとんど高井遺跡の表採品と同じ比率になると言えて良い。

欠山様式の段階の欠山遺跡SD1・2では、高井遺跡や東光寺遺跡と比べ文様自体が顕著に減少している。瓢壺を除くと有文は3点のみである。3点とも櫛描文②であった。有文の瓢壺は、櫛描横線文のみが施されるものが2点、その下に貝刺突連弧文を施すものが1点存在する。寄道様式段階の東光寺遺跡や高井遺跡表採品と、欠山様式段階の高井遺跡SD-1-1-3層や欠山遺跡出土品を比べると、明らかに櫛描文①から、櫛もしくは貝の刺突を櫛描文に加える櫛描文②が多くなる。また欠山様式になると、扇形文が消滅するし、櫛描横線文を幅広に施す例（167・467など）が多くなる。二枚貝による連弧文は、寄道様式にはなく、欠山様式になってから出現する。主に、欠山様式の主要形式である瓢壺Bに施される文様であることから、当然のことである。

東光寺遺跡の高坏脚部の文様は、櫛描横線文を間隔を空けて施すことを基本とし、その間に刺突文（列点文もしくは羽状文、××文）を入れるものが21点（脚部文様全体の42%）、波状文を入れるものが1点、無文のままにしておくものが17点（34%）存在する。そして全くの無文のものは1点だけで、高坏は有文であることを原則としている。

高井遺跡の表採品では、櫛描横線文を間隔をあけて施しただけのもの15点（56%）、刺突文を加えたもの6点（22%）が存在した。無文のものは3点（11%）存在した。その他の3点は、小型品で、櫛描文を2段密接して施したものである。

この2遺跡の例から、寄道様式の高坏は有文であることが原則であり、しかも他の文様を加えるか否かは別として、櫛描横線文を間隔をあけて施す文様ではほぼ占められる。

これに対し欠山様式になると、欠山遺跡SD1に見られるように、他の刺突紋を下に加える場合はあるが、櫛描横線文を接合部直下に幅広に施すものばかりとなる（20点、62%）。また無文のものが12点（38%）存在することから、有文であった前様式の原則は崩れ、無文化の進行が認められる。高井遺跡SD-1-1-3層でも、この傾向は同じである。

第7章 考察

1. 環濠（SD-1）の埋没過程の復元

高井遺跡SD-1は遺構検出時点で溝の中央部分に土器が集中して検出され、多量の土器が出土する可能性が考えられた。同じ台地上で近接している白石遺跡の環濠での所見からも、土層による分層発掘はほぼ不可能と考えられたので、出土土器の三次元的な位置関係から、廃棄されたとであろう土器群の廃棄単位と環濠の埋没状況を復元するために、以下の3工程で分析を行った。なお、第1・第2工程に関しては、第4章-2で詳細に説明しているので、ここでは概略を示す。

第1工程：発掘現場での土器の取り上げ

現場での土器の取り上げは小破片資料以外は出土状況図を作成し、番号をつけて取り上げを行った（第4章-2、挿図2・挿表1参照）。発掘区が第1・2次に分割されたため、取り上げ単位の平面形を同じ形に設定できなかったが、A・C・D・E区はほぼ同じ様な面積になった。出土土器は各取り上げ単位ごとに取り上げ番号のある土器とこれ以外の番号のない土器として管理し、各分層間の器種構成把握のための個体数計測もこの取り上げ単位を基準に行った。

第2工程：人工層位の想定

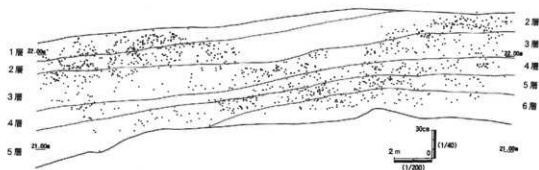
調査終了後土器出土図のデータをコンピューターに入力し3次元データの点として図化し、出土土器相互の位置関係やA区～E区の各取り上げ単位相互のレベルから人工層位を想定した。この結果、SD-1出土土器は1～6層の人工層位に分割することが妥当と考えられた。

第3工程：廃棄単位の想定

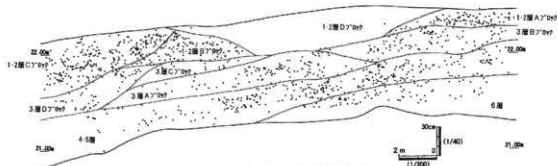
SD-1出土土器の型式学的検討を行った結果（第6章参照）、型式学的に最も細分可能で、出土量も多い器種が大型高坏であることが判明した。大型高坏は高坏A1～A6、高坏B1～B3の9型式（挿図6）に分類できた。そこで、各型式の大型高坏の出土状況を検討すると、同一型式のものがある程度集中して出土していることが判明した（第6章2型式組列、42頁参照）。このような同一型式のまとまりを単位とすると、少なくとも10単位が想定できた（挿図9）。

この10単位は人工層位では明らかにできなかった廃棄の単位を示すものと考えられる。各廃棄単位の名称は人工層位と対応させるために、基本的に人工層位の層位名を使用し、その後にブロック名を冠した。各ブロックの廃棄順序は少なくとも7回、全体的な層位では大きく4層に分離可能である（挿図10）。

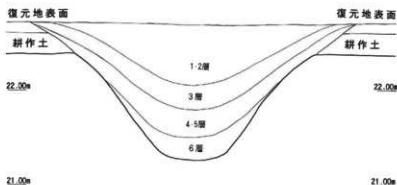
上記のような方法で、SD-1出土土器の分析を行ったが、報告書の土器図版の出土層位は第2工程の人工層位を使用している。これは、各取り上げ単位ごとに取り上げ番号のある土器とない土器の二者で管理し、器種構成比率の算出も取り上げ単位を基準に行ったためである。また、今回の方法で



3-1 人工層位図



3-2 廃棄単位図



3-3 復元断面図

復元層位	廃棄単位
1層 (1-2層)	②回 1-2層 A7'トッ → 1-2層 C7'トッ 1-2層 B7'トッ → 1-2層 D7'トッ
11層 (3層)	③回 → 3層 D7'トッ ④回 3層 A7'トッ → 3層 B7'トッ 3層 C7'トッ
11層 (4-5層)	⑤回 4-5層
11層 (6層)	⑥回 6層

復元層位は4層、廃棄単位は少なくとも7回・10単位が想定できる。

挿図10 SD-1 復元層位と廃棄単位 (1/200・1/40)

は人工層位と廃棄単位は完全に対応はしていない。最も徹底した方法としてはすべての出土土器の三次元的位置を記録するものであるが、期間の限定された現場での作業においては今回のように型式学的に検討できる程度の土器のみでも十分に分析に耐えうるデータを得ることができた。

廃棄単位の検討

SD-1 出土土器の廃棄単位は7回10単位が想定できた。各廃棄単位ごとには土器出土量にばらつきが見られるが、各器種ごとの出土状況を図化して検討しても偏りは見られなかった。出土土器の残存率からは、もっとも完形に近い土器がある程度集中して出土したのがD区5層(挿図11)であるが、いくつかの土器が並べて置かれるような意図的に配置されたような状況ではない。廃棄単位を基準に

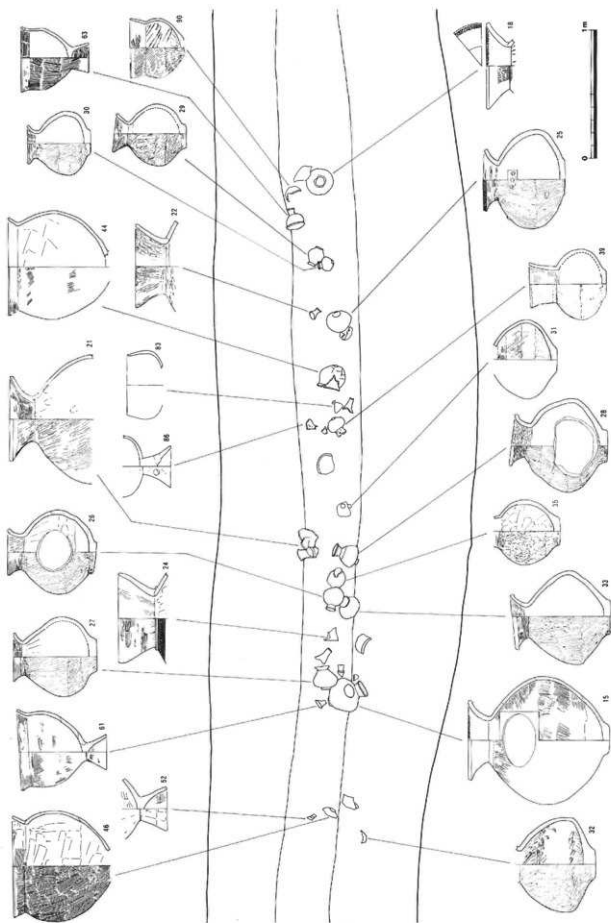


插图11 SD-1·D区5层土器出土状况图(1/30)

S D-1での土器出土状況は以下のような特徴がある。

- 1：各層位での器種のばらつきは見られず、特定器種が集中して出土することもない。
- 2：土器が意図的に配置されたり、埋納行為が行われた痕跡はない。
- 3：土器の出土状況は連続的であり、環濠の掘り直しは想定できない。
- 4：最下層には10～20cm程の遺物の少ない層があり、土器はこの層の上から連続的に出土している。
- 5：土器は環濠の中央部分に集中して出土し、どちらかの肩に偏ることはない(土器の想定は不可能)。
- 6：土器は生活残滓として廃棄されていた可能性が高い。

環濠(S D-1)埋没状況の復元

環濠から出土した最も古い型式の高坏は高坏A 1型式であるが、6層からは高坏A 3型式が出土しているので、環濠に土器投棄が始まった時期は寄道Ⅱ様式後半(挿表9)の頃と考えられる。環濠が掘られた時期はこれより遡ることは明かで、寄道Ⅰ様式～寄道Ⅱ様式前半の頃と考えられる。環濠底部には遺物の少ない層があり、環濠が造られてから、一定時間がたち埋まり始めると土器が連続的に投棄されている。

6層、4・5層においては北から南に向かって傾斜しながらほぼ同じ様な厚さで堆積しており、これより上層で想定されたような廃棄ブロックは明瞭に検出されなかった。土器出土状況も北側に多く、南に行くに従って少なくなっており、北側に集中的に廃棄されている。

3層ではA～Dの4ブロックが想定されているが、このうち最も古く堆積した3層Aブロックは高坏A 6型式が多く出土している。また、この層より下層では高坏B型式は出土しておらず、6層～3層Aブロックまでが寄道様式の堆積層であることが確認できた。これまで大まかに人工層位である1～3層が欠山様式、4～6層が寄道様式としてきたが、廃棄ブロックの検討によって3層の一部は寄道様式の堆積層であることが判明した。土器の型式学的検討からは、Aブロック堆積の後B・Cブロックが堆積し、その後Dブロックが堆積していることが確かめられた。3層は全体的には6～4層と同じように、ほぼ同じ厚さで堆積しており、土器廃棄は小さな各ブロックを単位としながら、環濠全体としては高低差が余りなく、まんべんなくほぼ同じ深さで埋まっていたものと考えられる。

1・2層はA～Dブロックが想定されている。堆積の順序はA・Bブロックが堆積した後、C・Dブロックが堆積している。Cブロックは人工層位で3層とした部分に一部入り込んでおり、土器図版で3層出土したものの一部が1・2層Cブロックに含まれることになった。Dブロックは他と比較して土器の出土量がきわめて少ないブロックであるが、S字状口縁台付甕(第53図・389～392)はDブロックのみで検出された。このことから、土層では確認できないがDブロックが最後に堆積したものと考えられる。

以上のように高井遺跡S D-1は台地上に造られた環濠であるが、土器の出土状況の分析から、沖積地の溝に見られるような水性堆積とは異なり、廃棄ブロックを単位として連続的に埋没していることが想定できた。このような堆積状況は、豊川の対岸にある欠山遺跡においても確認できる。

欠山遺跡は宝飯郡小坂井町字欠山に所在する弥生時代の拠点集落として古くから知られていた。19

49・50年に欠山第Ⅱ貝塚が調査され、環濠と考えられる溝から多量の土器が出土している（註1）。また、この環濠に続く部分が1992年に道路改良工事に伴って発掘調査が行われた。1992年の調査で確認されたSD-1は1949・50年の調査で確認された溝と同じもので、これに直交するようにSD-2が確認されている。SD-1の基本層序は貝層を挟んで上下の3層に分層されている。貝層は環濠の全体に渡って存在するのではなく、西半分では貝層は確認されていない。土器は、この貝層から完形に近いものが多数出土しており、貝層が分布しない部分は、土器出土量も少ないことが報告されている（註2）。

SD-1の土器出土状況図（註3欠山報告図版3～6）から判断する限り、個々の土器は意図的に据え置かれたような痕跡は見あらず、高井遺跡の環濠の1・2層Cブロックで見られたような大量廃棄と同様な状況と考えられる。しかし、欠山遺跡では土器の多量廃棄は貝層に伴うもので、全体に渡ってみられるものではない。土器の出土位置も環濠の中央部であり、どちらかの肩に明瞭に偏ることはなく、出土状況からは土壘がどちらにあったかは想定できない。出土土器による環濠の成立と埋没の時期は高井遺跡の環濠とほぼ同じであり、土器の多量廃棄と共にほぼ同じ状況を示していると考えられる。

以上のように豊川流域の弥生後期の環濠は畿内第Ⅴ様式前半に当たる寄道様式の前半頃造られ、比較的短期間のうちにその機能がなくなり、生活残滓を廃棄する場に変わっていったと考えられる。

註1 久永春男・芳賀陽 「附載第二 欠山遺跡」『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963年

註2 鈴木徹 「第3章層序と遺構 第2節遺構」『欠山遺跡』小坂井町教育委員会 1994年

註3 小坂井町教育委員会 「欠山遺跡」1994年所載の図版3～6環濠跡土器出土状況図(1)～(4)

2. 方形周溝墓の祭祀

高井遺跡で検出された方形周溝墓（S Z-1）は発掘区外になるため西側の溝が確認できていないが、大きさはほぼ14m四方で周溝からは供献土器と考えられる少数の完形土器と多くの破片資料が出土している。この二つの土器出土のあり方は、豊橋市橋良遺跡の方形周溝墓（S Z-01・02）でも認められる（註1）。これらの出土土器の内、供献土器と考えられる完形品に近い土器には一定の傾向が見られた。ここでは、この二つの遺跡の土器出土のあり方を分析することによって、方形周溝墓での墓前祭祀のあり方について考察する。

高井遺跡 S Z-1 では2点の壺形土器（第8図69・70）が北溝の中央部に近接して出土している。この2点は口縁部の一部が打ち欠かれている以外は、全くの完形である。これ以外の資料は、比較的残存率が高く供献されたものである可能性を想定できる資料もあるが、ほとんどは破片資料である。

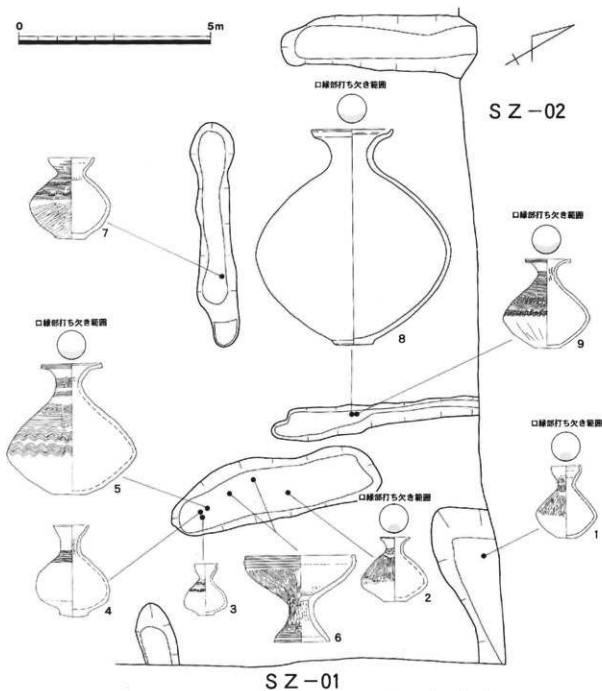
橋良遺跡 S Z-01 では北溝で1点の壺形土器（挿図12-1）、西溝で4点の壺形土器（挿図12-2～5）が出土している。これらのうち3点（挿図12-1・2・5）は口縁部の一部が打ち欠かれている以外は、全くの完形であり、他の2点も全くの完形である。西溝の4点の内、3点は近接して出土しており、また、ほぼ完形の高坏（挿図12-6）が割れてやや離れた状態で出土している。

橋良遺跡 S Z-02 では南溝で1点の壺形土器（挿図12-7）、東溝で2点の壺形土器（挿図12-8・9）が出土している。これらのうち1点（挿図12-9）は口縁部の一部が打ち欠かれている以外は、全くの完形である。8は大型の広口壺であり、口縁部を真下にして逆位で埋納され、この下にはさらに9の細頸壺が置かれ、重なって出土している（註2）。8・9の2点はいずれも口縁部が地表面に出ることはなく、埋納後に口縁部だけが欠損する可能性はないので、2点とも埋納前に口縁部が意図的に打ち欠かれていたことは間違いない。

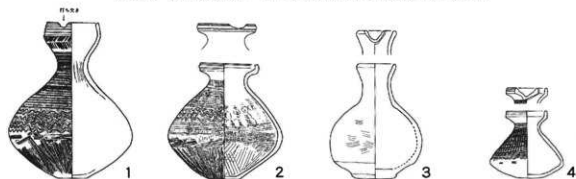
以上のように、供献品と考えられる出土状況を示すものは壺形土器、特に小型の細頸壺が多く、高井遺跡と橋良遺跡で出土した10点の壺形土器の内、大型の広口壺が1点ある他はすべて小型の細頸壺である。さらに、これら10点の内、7点は口縁部が打ち欠かれていた。また、これらの壺形土器には弥生後期に多く見られる胴部穿孔のあるものはなかった。これらから推定できる方形周溝墓の墓前祭祀は、細頸壺を中心とした祭祀であり、口縁部を打ち欠くことに大きな意味がある供献儀礼であるとする事ができる。また、土器型式の検討や破片資料の出土状況からは短期間のものである可能性が高い。このように墓前祭祀は一時期のものであり、祭祀に継続性は見られず墓としての機能は短期間に失われ、周溝に生活残滓として土器が多量に廃棄されたものと考えられる。

このように供献された壺形土器の口縁部が打ち欠かれている例は、庄内川河口部に位置する朝日遺跡の方形周溝墓 S Z117、S Z118においても確認されており（註3）、いずれも小型の細頸壺（挿図13）である。

口縁部の打ち欠き方は朝日遺跡、高井遺跡、橋良遺跡 S Z-01（挿図12-1・2）のように口縁端部の一部を打ち欠くものや、橋良遺跡 S Z-01（挿図12-5）や S Z-02（挿図12-9）のように口縁部の半分近くを打ち欠くものもある。壺形土器の口縁部の打ち欠きは見過ごされて復元されてしま



挿図12 橋良遺跡 S Z-01・02 供獻土器出土状況図 (1/100)



1 : 朝日SZ-118 2 : 朝日SZ-117 3・4 : 高井SZ-1
(『朝日遺跡V』1994年)

挿図13 朝日遺跡 S Z-117・118、高井遺跡 S Z-1 出土供獻土器 (1/6)

う可能性があり、今後資料の見直しを図れば、類別は増加するものと考えられる。

さて、このような供献土器以外に方形周溝墓の周溝内からは多数の破片資料が出土している。これらは小破片のものがほとんどであり、供献された完形の土器とは明らかに区別できるものである。しかし、両者の土器は混在して出土しており、出土状況からは両者が区別されて廃棄されたとは考えられない。そこで、出土土器の器種構成比率を比較することによって、遺跡や遺構間で違いが見られるかを検討する。

器種構成の計測に当たっては高井遺跡SD-1と同様に口縁部個別識別法（挿表11）と底部部個別識別法（挿表12）によって、高井遺跡SZ-1、橋良遺跡SZ-01・02、SB-08・09・11・13・21、SX-01・02について行った。底部部個別識別法では壺は底部、高坏は脚部、甕は脚台部と体部との接合部について計測した。ただし、鉢に関しては壺と同じ底部のため底部のみの破片資料は壺に含まれている可能性がある。分類項目は在地系壺、凹線文系壺、在地系甕、凹線文系甕、高坏、鉢の6種である。

壺と甕を在地系と凹線文系に分類しているが、伊勢湾沿岸地域では弥生中期後半（畿内Ⅳ様式）には在地の系譜を引く土器様式と外来の凹線文土器の系譜を引く二つの土器様式が混在している（註4）。在地系の土器様式の器種は壺と甕のみで、他はすべて凹線文土器様式のものである。

口縁部個別識別法による資料全体の器種構成比率は壺：甕：高坏：鉢の比率が35.7：52.3：9.5：2.5（％）、底部部個別識別法による資料全体の器種構成比率は壺：甕：高坏：鉢の比率が32.1：60.8：5.2：1.9（％）となっており、底部部個別識別法の方が甕の比率が8.5％高くなっている。これは高井遺跡SD-1の計測結果と同じように口縁部より底部の方が遺存しやすいためと考えられるので、以下では底部部個別識別法の数値に基づいて検討する。

方形周溝墓出土土器の器種構成比率は壺：甕：高坏：鉢の比率が33：60：5：2（％）、堅穴住居等のその他の遺構出土土器（以下その他の遺構と略す）では29：66：5：0（％）であり、ほぼ同じ数値になっている。

在地系土器と凹線文系土器との器種ごとの比率も方形周溝墓出土土器では、壺が85点中、在地系51点、凹線文系34点で60：40（％）である。甕は154点中、在地系133点、凹線文系21点で86：14（％）である。

その他の遺構出土土器では、壺が19点中、在地系15点、凹線文系4点で79：21（％）である。甕は43点中、在地系35点、凹線文系8点で81：19（％）である。

その他の遺構出土の在地系壺の比率がやや高いが、その他の数値はほとんど同じであり、その他の遺構の方が計測点数が少ないことを考慮すれば、方形周溝墓とその他の遺構の間には有為な差は認められない。

方形周溝墓出土土器とその他の遺構出土土器の器種構成比率は、全体的な構成比率においても、また、在地系・凹線文系土器の比率においてもほとんど同じであり違いは認められない。これは方形周溝墓出土土器のうち、供献されたと考えられる完形品以外の多量の破片資料が特別な意味を持たない廃棄の産物であることを示している。このことは方形周溝墓で行われた墓前祭祀が継続性のないものであり、墓としての機能も短期間の内に失われたことを示している。

挿表11 口縁部個別計測法による出土土器器種構成表

方形周溝墓出土土器器種構成表

遺跡名	遺構名	在地系壺	凹縁文壺	在地系甕	凹縁文甕	高 坏	鉢	合 計
橋 良	S Z-01	2 5 (19%)	1 9 (15%)	7 1 (55%)	0 (0%)	1 5 (12%)	0 (0%)	1 3 0 (100%)
橋 良	S Z-02	9 (29%)	6 (19%)	1 4 (46%)	0 (0%)	2 (6%)	0 (0%)	3 1 (100%)
高 井	S Z-1	7 (16%)	6 (13%)	2 4 (53%)	3 (7%)	5 (11%)	0 (0%)	4 5 (100%)
合 計		4 1 (20%)	3 1 (15%)	1 0 9 (53%)	3 (1%)	2 2 (11%)	0 (0%)	2 0 6 (100%)

竪穴住居・土壇等出土土器器種構成表

遺跡名	遺構名	在地系壺	凹縁文壺	在地系甕	凹縁文甕	高 坏	鉢	合 計
橋 良	S B-08	0 (0%)	1 (14%)	5 (71%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)	7 (100%)
橋 良	S B-09	3 (30%)	0 (0%)	6 (60%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (10%)	1 0 (100%)
橋 良	S B-11	2 (25%)	1 (13%)	5 (62%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	8 (100%)
橋 良	S B-13	1 0 (13%)	1 7 (22%)	3 7 (48%)	1 (1%)	5 (7%)	7 (9%)	7 7 (100%)
橋 良	S B-21	1 (10%)	4 (40%)	1 (10%)	1 (10%)	3 (30%)	0 (0%)	1 0 (100%)
橋 良	S X-01	3 (60%)	1 (20%)	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (100%)
橋 良	S X-02	1 (50%)	0 (0%)	1 (50%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (100%)
合 計		2 0 (17%)	2 4 (20%)	5 6 (47%)	2 (2%)	9 (7%)	8 (7%)	1 1 9 (100%)

また、在地系と凹縁文系の両者の土器も方形周溝墓とその他の遺構では、出土に偏りは見られず、実際の使用の場面では区別されずに使用されていたことを示している。

挿表12 底部個体別計測法による出土土器器種構成表

方形周溝墓出土土器器種構成表

遺跡名	遺構名	在地系壺	凹線文壺	在地系甕	凹線文甕	高 坏	鉢	合 計
橋 良	S Z-01	2 7 (18%)	1 9 (12%)	7 7 (51%)	1 5 (10%)	1 1 (7%)	3 (2%)	1 5 2 (100%)
橋 良	S Z-02	7 (28%)	4 (16%)	1 0 (40%)	2 (8%)	2 (8%)	0 (0%)	2 5 (100%)
高 井	S Z-1	1 7 (21%)	1 1 (13%)	4 6 (56%)	4 (5%)	1 (1%)	3 (4%)	8 2 (100%)
合 計		5 1 (20%)	3 4 (13%)	1 3 3 (51%)	2 1 (8%)	1 4 (6%)	6 (2%)	2 5 9 (100%)

竪穴住居・土塋等出土土器器種構成表

遺跡名	遺構名	在地系壺	凹線文壺	在地系甕	凹線文甕	高 坏	鉢	合 計
橋 良	S B-08	1 (33%)	0 (0%)	2 (67%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (100%)
橋 良	S B-09	1 (33%)	0 (0%)	2 (67%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (100%)
橋 良	S B-11	1 (25%)	0 (0%)	2 (50%)	1 (25%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (100%)
橋 良	S B-13	1 1 (22%)	4 (8%)	2 7 (54%)	6 (12%)	2 (4%)	0 (0%)	5 0 (100%)
橋 良	S B-21	1 (33%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (33%)	1 (33%)	0 (0%)	3 (100%)
橋 良	S X-01	0 (0%)	0 (0%)	2 (100%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (100%)
橋 良	S X-02	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
合 計		1 5 (23%)	4 (6%)	3 5 (54%)	8 (12%)	3 (5%)	0 (0%)	6 5 (100%)

註1 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994年

註2 豊橋市教育委員会 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第18集 橋良遺跡』 1994年
第14図、写真図版9-3・4参照

註3 石黒立人 「第2章2. 弥生時代から古墳時代の土器 C. 中期」『朝日遺跡V』 1994年
(財)愛知県埋蔵文化財センター

註4 贅元洋 「長床様式の構造」『三河考古』第8号 1995年

3、土器様式の変遷と技術的系譜

高井遺跡では、SD-1・D区5層から特徴のある一群の壺形土器（第33図26～30・32・33・35）が出土しており、鈴木敏則氏によって広口壺C2型式と分類されたものに含まれている（第6章2、型式組別46頁）。これらの壺は器壁が厚く、体部外面は平滑でなく、縦方向の荒いミガキで調整され、口縁部外面はヨコナデされ、無文であるという共通した特徴を持ち、色調も明褐色で胎土も良く似ている。しかし、器形は球形胴に近いもの（26）、肩が張ったもの（28）、下膨れになるもの（27・30・32）等かなり個体差が著しい。これらの土器は調整技法等に著しい共通性があり、鈴木氏が指摘するように一個人が作成したものかどうかは別にしても、かなり短期間に一定の場所で作成されたものである可能性が高い。このような土器群は他の時期ではほとんど指摘されておらず、土器製作のあり方を検討する上で一つの視点を与えるものである。

そこで、弥生土器の基本的器種構成の変化を元に土器製作のあり方がどのような変化をしてきたのかについて検討する。

高井遺跡の南西には弥生前期の環濠が確認されている白石遺跡がある（註1）。両者は同じ台地上で接しており、一連の遺跡と考えられる。高井遺跡出土土器は、縄文時代前期初頭の塩屋式から中世に至るまで断続的に検出されているが、弥生時代以前に関してはまだ明確な遺構は確認されていない。そこで、近接した白石遺跡を含めて、弥生時代の土器について検討する。

白石遺跡では弥生前期の遠賀川式土器がまとまって環濠内から出土し、在地の土器である条痕文系土器も少量確認されている。遠賀川式土器は前期前半の畿内第I様式古・中段階のものであり、表土層からは新段階の土器も出土している。この新段階の土器は、金剛坂様式（註2）とした前期後半の土器で、伊勢地方と同一様式のものであり、伊勢地方との直接的な関係が想定できる。白石遺跡は弥生前期で途絶え中期までは存続しない。

白石遺跡・高井遺跡では弥生中期前葉の土器は未だ確認されておらず、中期中葉の瓜郷様式（第65図604）が出土している。中期後葉の古井様式ははっきりしないが、その可能性のある土器が今回の調査で出土している（第65図607・608・610）。外来系の凹線文土器様式や在地系の長床様式の土器は今回の発掘で、方形周溝墓に伴って、多量に出土している。弥生後期についてはSD-1から多量に出土しており、集落は前期で一旦途絶え、中期中葉の瓜郷様式の時期に新たに形成され、古墳時代まで存続するものと考えられる。以上のように、高井遺跡では中期中葉から古墳時代に至るまで遺跡は連続しており、土器製作技術も高井遺跡の集団内部で受け継がれていったと想定できる。

伊勢湾沿岸地域の弥生時代前期においては遠賀川式土器の系譜を引く土器群と、縄文時代晩期の突帯文土器の系譜を引く条痕文土器が地域を分けて共存している。中期においては、条痕文系と遠賀川系の折衷による在地の土器群が成立し、中期後葉においては、外来系である凹線文土器群が新たに出現している。

これらのうち条痕文土器は縄文時代晩期の突帯文系土器の系譜を引くものであり、遠賀川式土器等の器種構成とは全く異なったものであり、共通性は見られない。そこで、条痕文土器を除いた土器の器種構成を比較することにする（挿表13）。今回は器種構成のうち、量的に少ない特殊な器種、ミニ

チュア土器のような小型のものについては省いて基本的な器種のみ限定している。また、高井遺跡は中期中葉から遺跡が新たに形成されているところから、中期中葉の瓜罎様式から検討を行う。

各時期の土器様式の器種構成には一定の共通性が見られ、大きくは3群に分類できる。第1群：瓜罎・古井・長床様式、第2群：凹線文土器様式、第3群：山中・欠山様式である。

第1群は遠賀川様式からの間接的な影響を受けており、基本的な器種構成は同じである。第1群を構成する器種のうちで最も出土量も多く多型式に分類できるものは細頸壺であり、時期区分を行う上で最も有効な器種である。甕は古井様式以後、台付甕が出現し、以後在地の甕はすべて台付甕になる。高坏は遠賀川様式と同様に存在はするが、きわめて量が少なく器種構成を検討する上ではほとんど考慮する必要がない。

第2群は外来系の土器群である。もっとも特徴的な器種は高坏であり、はじめて量的に安定して存在するようになる。壺類の基本的構成は第1群とほとんど変わらないが、脚台の付く壺類が出現し、赤彩されたものも僅かに見られる。甕は平底ハケ調整のものと脚台は付くがタタキ調整のものが少数見られる。

第3群は広口壺の口縁端部の凹線文や胴部上半の櫛描文等のわずかな要素は第2群からの系譜を想定することができるが、器種構成や土器の型式学的特徴は基本的に外来系である。第3群を構成する器種のうち出土量が多く多器種に分類でき、時期区分を行う上で最も有効な器種は高坏である。高坏は山中様式から欠山様式へ型式組列が復元されている。壺は新たに長頸壺・直口壺・瓢壺等の器種が出現し、中期に見られた器種構成とは基本的に異なったものとなる。甕はハケ調整の台付甕になる。

挿表13 弥生時代土器様式基本器種構成表

時 期	器 種	壺										高 坏				器台	鉢	重				
		細頸壺	短頸壺	無頸壺	台付壺	台付無頸壺	広口壺	長頸壺	直口壺	瓢壺	脚付壺	平底ハケ調整	平底ナデ調整	台付ナデ調整	台付タタキ調整	碗形高坏	蹄状口縁高坏	小型高坏	器台	鉢	台付鉢	重
I-1	遠賀川様式	○	○	○		○					○				・					○		○
I-2	金剛坂様式	○	○	○		○					○				・					○		○
II																						
III-1	瓜罎様式	○	○	○		○					○	○			・					○		
III-2	古井様式	○	○	○		○							○	○						○		
IV	長床様式	○				○							○							○		
IV	凹線文様式	○	○	○	○	○					○				○	○	○			○	○	○
V-1	山中様式					○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	○		
V-2	欠山様式					○	○	○	○	○				○	○		○	○	○	○		

○：一定量出土； ・：僅わずかに存在

器台はこれまで見られず、新たに出現した器種である。

これら3群は各器種の技術的系譜においても独自性が強い。壺は器種構成の点ではっきり異なっている。壺は第1群の中で平底壺（瓜郷様式）から台付壺（古井様式）への変化が見られるが、第2群のタタキ調整の台付壺とは明らかに異なっており、前者から後者への系譜は想定できない。また、第3群の台付壺も第2群からの系譜を想定できるものの基本的には、外来系として理解できる。

ここで問題となるのは、高井遺跡SD-1・D区5層出土の一群の広口壺（第33図26～30・32・33・35）である。これらの壺は前述したように器壁が厚く、体部外面は平滑でなく、縦方向の荒いミガキで調整され、口縁部外面はヨコナデされ、無文であるという共通した特徴を持ち、色調も明褐色で胎土も良く似ている。

山中様式の壺類の技術的特徴として前段階の凹線文土器様式から引き継いだ要素は口縁端部の凹線文や胴部上半の櫛描文があるが、壺類の器種構成や器形は近接地域の尾張や伊勢と共通する要素が強く、基本的に同一様式と考えられる。

SD-1・D区5層出土の一群の広口壺はまだ高井遺跡以外でははっきりと確認することができない。また、技術的系譜も凹線文土器様式や同時期の他地域に求めることができず、在地の土器様式である長床様式の中に求めるより他にない。この場合、長床様式の壺の器種が広口壺と細頸壺に限定され、SD-1・D区5層出土の一群の壺が小型の広口壺に限定されることは、両者の系譜を考える上で一つの根拠を与えるかもしれない。現状では、他遺跡において出土例が確認できないため一つの独立した型式として認定できない。鈴木氏の推定のようにこれらの土器を制作者個人の個性とする事も可能であるが、この場合、なぜこの時期の特定の器種についてだけこのような現象があらわれるのかについて明確な説明ができず、議論の対象にもなくなってしまう。仮に個人の個性だとすれば当時の土器生産体制を考察する上で、個人がどのような役割を持ったものだったかを推定する有力な資料となりうるものであり、今後資料の増加を待って再評価したい。

註1 豊橋市教育委員会 『白石遺跡』 1993年

註2 賛元洋 「伊勢湾沿岸地域における弥生前期の土器様相」『転機』第5号 1994年

註3 賛元洋 「瓜郷式土器の再検討」『転機』第2号 1988年

4. 三河の後期弥生土器の編年（挿図14～19）

三河の弥生時代後期の土器は、前半を寄道様式、後半を欠山様式と名付けられている。両様式の間には、高坏や小型高坏に顕著に見られるように大きな画期（高坏A→B形式、小型高坏A→B形式）が認められる。

その他広口壺ではA形式が寄道、D形式が欠山様式に盛行する。また“飾る壺”は、A形式→B形式へと変化する。中型壺の類では、長頸壺・直口壺類は寄道様式、瓢壺類は欠山様式に限られる。台付甕でも内湾口縁部のE形式が欠山様式に至って出現している。

また手法上でも、寄道様式では口唇部に端面を作ることと基本とする（広口壺A・B・C1、台付甕A1・B1・C1、高坏A1・2など）が、欠山様式では口縁部の内湾化と口唇部をヨコナデ調整し、内傾面を設けることを基本とする（広口壺D2・3、瓢壺A・B、台付壺C、甕E、高坏B、小型高坏B、器台C、鉢A3・B・D3など）。

よって形式の消長及び手法において、両様式には大きな画期を認めることができる。当然前半を寄道様式、後半を欠山様式と時間的大様式名で呼ぶことは、理にかなったものと言えよう。

寄道・欠山両様式の時間的な細分については、すでに型式組列の所でも触れたが、まとめとして時間的小様式について少し説明しておきたい。寄道様式は、高坏A1や小型高坏A1・C型式に代表される未確定の段階をⅠ様式、口縁部や脚部における内湾化、受口化の傾向がまだ認められない段階をⅡ様式、その傾向が認められる段階をⅢ様式とした。そして欠山様式では、高坏において長脚の段階をⅠ様式、口縁部や脚部の内湾化、口唇部に内傾面をもたせる手法が最も盛行する段階をⅡ様式、内湾化が弱まる段階をⅢ様式と細分した（第6章2、③基準資料 45頁参照）。

寄道Ⅰ様式

高坏A1、小型高坏A1・C型式に代表される段階としたが一括資料はなく、様式としては未確定である。ただし中期後葉の長床様式との関係からすれば、広口壺A1・A2・A3、B1、C1、台付甕A1型式は当然存在していたと考えられる。また長頸壺も存在していた可能性は高い。

高坏A1型式と小型高坏A1型式の類例は、高井遺跡の他、矢作川河床遺跡（岡崎市1987）、東光寺遺跡1～3次調査（幸田町1987）、郷中遺跡（豊川市1989）、瓜郷遺跡（豊橋市1963）等にある。

寄道Ⅱ様式

東光寺遺跡SD08・10（愛知埋文1993）と郷中遺跡SB10（豊川市1989）、高井遺跡SD-1・6層及び表採品（鈴木1988）を基準とするが、高坏の型式から東光寺・郷中両遺跡を古相、高井遺跡SD-1・6層と表採品を新相とする。表採品については、高坏に見られるように寄道Ⅲ様式と考えられる高坏A6型式が出土している（鈴木1988中No.114～117）。またやや脚部下半が直線化したもの（124～126）や器種不明な受口口縁部片（71）、受口口縁部甕（92）などが存在する。しかしこれらはごくわずかであり、他の土器の型式はⅡ様式とすべきものばかりである。よって上記の新しい一群は混入品と考え、それらを除くものをⅡ様式の新相段階と考えた。その他不都合なものは72・93・100・

149・150などがあるが、これについては紹介文に記した（鈴木1988）。

広口壺では、A・B・Cの3形式が主体を占める。広口壺A形式はA1・A2・A3型式が、B形式にはB1・B2型式、C形式にはC1型式がある。広口壺以外の壺では、長頸壺A（A1・A2型式）、直口壺A（A1・A2・A3型式）、脚付壺A・B（A・B1型式）が盛行している。古相のものは口縁部が外反する直口壺A1・A2型式、脚付壺B1型式、新相では直線的な口縁部をもつ直口壺A3型式が盛行し、事例はないが脚付壺B1型式も出現していると考えられる。なお、新相にも古相の型式群は全て残存する。

台付甕は、甕A1・A3・B1・C1型式にほぼ限られる。これらの甕の口唇部は、端面を有することと特徴とする。

この段階の高坏は、A2・A3・C1型式、小型高坏A2・A3型式である。これに少数の小型高坏A4型式、尾張系の高坏C2と小型高坏Dと器台B型式、畿内系の器台A型式が伴う。高坏において、円孔スカシの位置の低いA2型式が古相、脚部の中位にあるA3型式が新相となる。

鉢には、外反する口縁部のA1・B1・D1や碗形鉢A1・A2型式が存在する。

寄道Ⅱ様式

基準資料は、高井遺跡のSD-1の4・5層及び、3層Aブロック出土土器である。高坏Aの型式から前者が古相、後者が新相を示すものである。この様式から一部の形式において内湾化、受口化の傾向が認められる。高坏は、下半部が直線化したA4型式や坏部が深くなったA5型式が出現する。さらに新相になると口縁部が直線的に開くA6型式が出現する。なおⅢ様式まで、前様式のA3型式が残存する。小型高坏は、A2～A4型式が見られる。

広口壺では垂下口縁部のA形式（A1・A2・A3型式）が減少し、客体化する。広口壺B・C（B2・C1型式）は依然主体をなしている。なお広口壺C形式の内、口縁部を丸く仕上げるC2型式が目立つようになる。受口口縁部のD1・D2型式は、この段階から出現するが、より新相で多くなる。

中型壺では、長頸の直口壺Bにおいてわずかに内湾するB2型式が出現する。そして新相段階で、その量を増す。直口壺A1・A2型式は減少し、直線的な口縁部のA3型式が主体となる。脚付壺Aも存在すると思われるが、事例を欠く。脚付壺Bでは、直口壺Aと同じように、B1型式が減少しB2型式が主体を占める。

台付甕では、D形式の出現が、一つのメルクマールとなろう。この段階から、口縁部をヨコナデ調整するため、口唇部の角がとれるもの（甕A2・B2・C2型式）が多くなる。ただし甕の主体は依然、A1・B1・C1型式である。

鉢は外反する口縁部をもつA1・B1・D1型式に加えて、直口縁部をもつA2・B2・D2型式が加わり、主体をなす。碗形鉢は引き続きA1・A2型式が、極小鉢ではA・B型式が存在する。

欠山Ⅰ様式

基準となる遺構にはSD-1の3層B・Cブロック、欠山遺跡SD2下層（小坂井町1994）、西三河の坂戸遺跡や高木遺跡1号方形周溝墓（岡崎市1987）などがある。しかし、まだ良好な一括資料に

は恵まれていないのが現状である。

高坏はB1型式で、長脚であること、坏底部が広いものが存在するなど、寄道様式の属性を受け継ぐ。しかしすでに内湾化・口唇部に内傾面をもつなど、欠山様式の手法は成立している。また小型高坏も主体はウィングラス形のA形式に代わり、B形式(B1型式)となる。なお挿図17を見てもらえば分かるように、小型高坏A形式の一部はこの段階まで残存する。

器台も極わずかであるが、尾張系のC形式がB形式に代わり出現する。

広口壺では、垂下口縁部が退化したA3型式は残存するが、A1・A2型式はほぼ寄道様式の中で終息する。広口壺ではA形式は客体化するが、B・C形式はそのまま主体をなす。B形式ではB2型式が、C形式でC2型式が、D形式ではD3型式が出現し、それぞれの形式で主体をなす。D形式では、D1・D2型式は依然存在するが、D形式自体の総数は少ない。長頸壺や直口壺、脚付壺A・Bは一部残存する型式(直口壺A4型式)もあるが、ほぼ消滅し、代わりに瓢壺A・Bや脚付壺C型式が出現する。具体的には欠山遺跡SD2で瓢壺B2型式が出土しているし、脚付壺の中では、高木遺跡第1方形周溝墓において、長頸の瓢壺Bに脚部をつけたC1型式が出現している。小型壺では、内湾口縁部壺がこの段階から出現する。

甕は、口唇部を丸くするA2・B2・C2型式が多くなるが、依然、前様式のA1・B1・C1型式も存在する。伊勢系の受口の甕Dも存在し、A・B・Cとともに甕の主体をなしている。欠山I様式に至って出現するのは、内湾口縁部の甕E1型式である。欠山遺跡SD2下層に類例がある。なおこの段階では、S字状口縁部の甕Fは確認されていない。

鉢の類ははっきりしないが、内湾口縁部をもつ鉢A3・B3・D3型式、碗形鉢A3型式は出現していると推測される。ただし、外反する口縁部をもつもの(鉢A1・B1・D1型式)も少数ながら存在するし、直口口縁部をもつもの(鉢A1・B・D1型式)も多く存在する。碗形鉢も前様式に引き続き、A1型式は存在する。

欠山II様式

基準資料としては、高井遺跡SD-1では南端部を除く1・2層(1・2層A・Bブロック)、欠山第II貝塚溝(豊橋市1963)、欠山遺跡SD1純貝層(小坂井町1994)、諏訪遺跡SD04(愛知埋文1989)等があり、資料的には豊富である。

器種・器形をこえて、口縁部や脚・台部を内湾化させる傾向が最も著しい段階である。また口唇部をヨコナデ調整し、内傾面を作る手法も最も盛行する段階である。

高坏は、坏部が後期を通して、最も深くなる(B2型式)。脚部と坏部の接合部は、器高のほぼ中間やや上にある。坏部・脚部ともよく内湾し、ほぼ例外なく内傾面をもつ。小型高坏は、ウィングラス形高坏と比べ、浅く半球形に近い坏部のB1型式になる。脚部は、外反するものと内湾するものがある。

広口壺では、垂下口縁部のA形式は少数のA3型式を残して、ほとんど見られなくなる。飾壺の主体は、拡張口縁部のB2型式となる。また単純口縁部のC2型式も、広口壺の主体を占める。内湾口縁壺Dは、内傾面をもつD3型式がこの時期の特徴をよく表すが、広口壺の中ではあくまでも客体

的存在である。尾張系のバレス壺Eも少数、この時期から見られるようになる。

直口壺には、やや内湾化した口縁部のA4型式が少数ある。欠山様式を特徴付ける瓢壺A・B2型式、脚付壺C1・C2型式が盛行する。手あぶり形土器もⅡ様式から見られるようになる。小型壺の類でも口縁部を内湾化させたものが、最も盛行する。

台付甕は口唇部が丸く、無刻のC2型式が多いが、伊勢系の受口の台付甕Dも多く存在する。欠山遺跡SD1純貝層では甕の主体を占めている。これは極端な例と思われるが、かなりの普及である。口唇部に刻目を入れるA2やB2型式も、まだ一定量存在する。内湾口縁部の甕Eは、ほとんどの遺跡にも存在するが、主体を占めるまでには至らない。S字状口縁部台付甕(甕F)は渥美半島先端部の渥美町大木貝塚でこの段階に伴う可能性のあるものが確認されている(鈴木1988)が、普及するまでには至っていない。S字状口縁部台付甕が、ある程度普及するのは次のⅢ様式からである。

鉢は、内湾口縁部をもつA3・B3・D3型式、碗形鉢A3型式が、この時期、特徴的に存在する。しかし依然、外反口縁部や直口縁部の諸型式も多く存在する。

器台は、尾張系の欠山形器台C1型式と器台Dがわずかに存在する程度である。また畿内系の器台Aも、欠山第Ⅱ貝塚で1点検出されている。

欠山Ⅲ様式

基準遺構としては、高井遺跡SD-1の1・2層南端部(1・2層Cブロック)の他、渥美郡田原町柳原遺跡(東海埋文研1991)、諏訪SB10(愛知埋文1989)などがある。また三河に近接する西遠江の湖西市中村遺跡Q23区土器群(東海埋文研1991)も一括資料として参考になる。

高坏では坏部が浅くなるもの、脚部の内湾化が弱まり直線化するもの、脚部全体が縮小するものなど(B3型式)が出現する。器種・器形を越えて、内湾化傾向が弱まり、内傾面も不明瞭なものが出る。また口唇部に強いヨコナデ調整を施すため、先細りする傾向が強くなる。

小型高坏は、浅い坏部のB2型式が出現するが、依然B1型式も存在する。B1→B2の型式変化には尾張の影響が考えられる。その他尾張の影響は、バレス壺(広口壺E)、S字状口縁部台付甕(甕F)、器台(C2・C3型式)など一定量の普及にも見られる。この時期に尾張の影響が、伊勢湾沿岸部で強まったことを示すものと言えよう。

広口壺は、前様式と変わらないが、C形式の内、口唇部を先細りさせるC3型式が目立つようになる。広口壺の主体は、B・C形式であることは変わらず、客体的に内湾口縁部のD形式が存在する。拡張口縁部のB形式の中で、B3型式が多々見られるようになるが、その絶対量は少ない。瓢壺類や脚付壺C形式も前様式に引き続き盛行している。

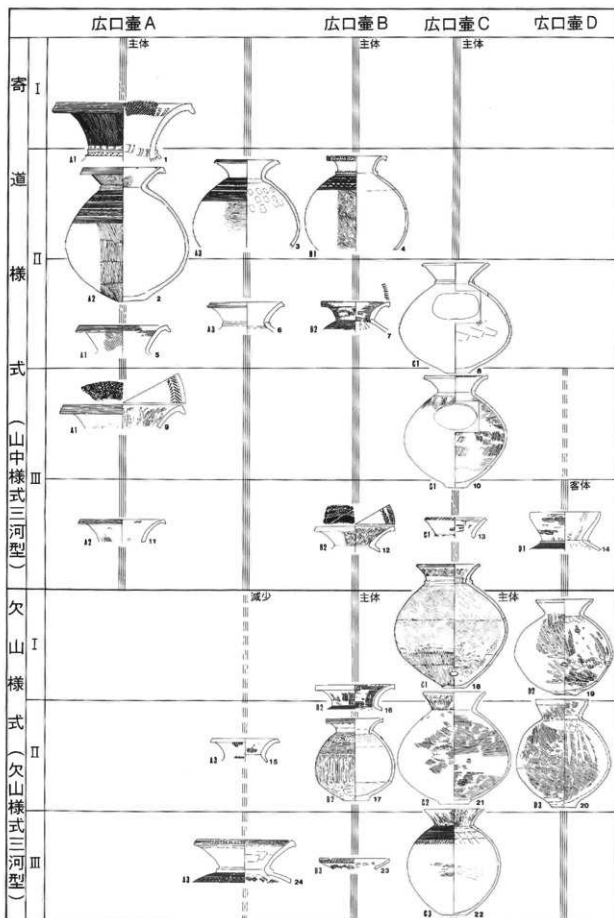
台付甕は、甕C2型式が主流であり、刻目をもつB2型式はわずかである。伊勢系のD2・D3・D4型式は存在するが、柳原遺跡や中村遺跡の出土例から見て、前様式のように主体を占めることはない。受口口縁部の甕E1・E2型式も存在する。S字状口縁部台付甕(甕F)も柳原・中村両遺跡の出土例から、一定量普及していると見て良い。

鉢ははっきりしないが、前様式と変わらないと思われる。手あぶりも、前様式と同様に存在する。

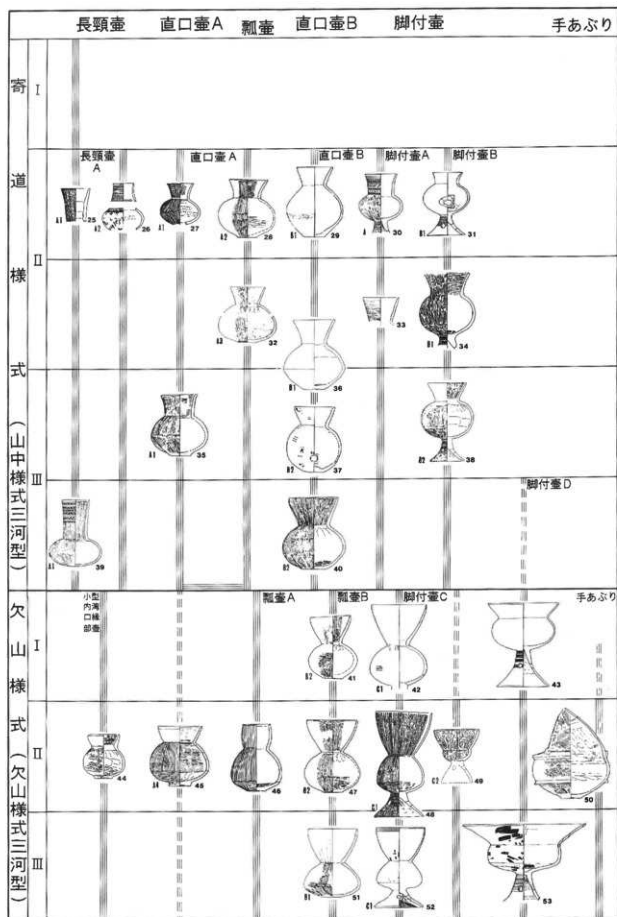
挿表14 三河・西遠江後期弥生土器基準編年通構一覽表

様式名	高井SD-1	東三河	西三河	西遠江	様式名
寄道 (山中様式三河型) 様式	I 不確定	・郷中E地区包含層① ・瓜郷第Ⅱ貝塚② 中央貝層下壁穴他	・矢作川河床⑬	・向山3・23号住居跡⑬ ・瓦屋西A3号墓⑬	後期初頭 不確定
	II	・真光寺SD8・10③ ・郷中SB10・12② ・行明包含層④	・岡島IB2M区SD01⑬	・伊場YTTIA・B群⑬・⑭ ・梶子8次BSD02, BSK02⑬	古
	III	・高井表採1988⑤	・高橋9次3号住居址⑬ ・岡島IC1M区SD01⑬	・梶子8次BSE02中層⑬ ・梶子6次YT2⑭ ・梶子8次ASX01 (主体) ⑬ ・梶子4次YT1⑭ ・梶子5次YT1⑭ ・梶子6次YT1 (主体) ⑭ ・梶子8次SK06・07⑬ ・梶子8次SD01 (A・B中層) ⑬	新 伊場 (山中様式西遠型) 様式
欠 (欠山様式三河型) 様式	I	・矢山第Ⅲ貝塚②	・小針東⑬	・椿野SZ01⑬	I 不確定
	II	・南貝津SB12 (古相) ⑥ ・西山NA21区住居址2⑦ ・欠山SD2下層⑧ ・欠山第Ⅱ貝塚溝②・⑨ ・欠山SD01貝層⑧ ・諏訪SD01・04⑩	・坂戸B区5号溝⑬ ・小針西井戸⑬ ・高橋4次第32号住居跡⑬ ・東郷塚遺構⑬ ・山王塚遺構⑬	・三和町⑭ ・椿野1982溝⑭	II 欠山 (欠山様式西遠型) 様式
	III	・柳原⑪ ・諏訪SB110⑩	・榎塚遺構 (新相) ⑫	・中村Q23区土器群⑪ ・山の神SX03⑮	III

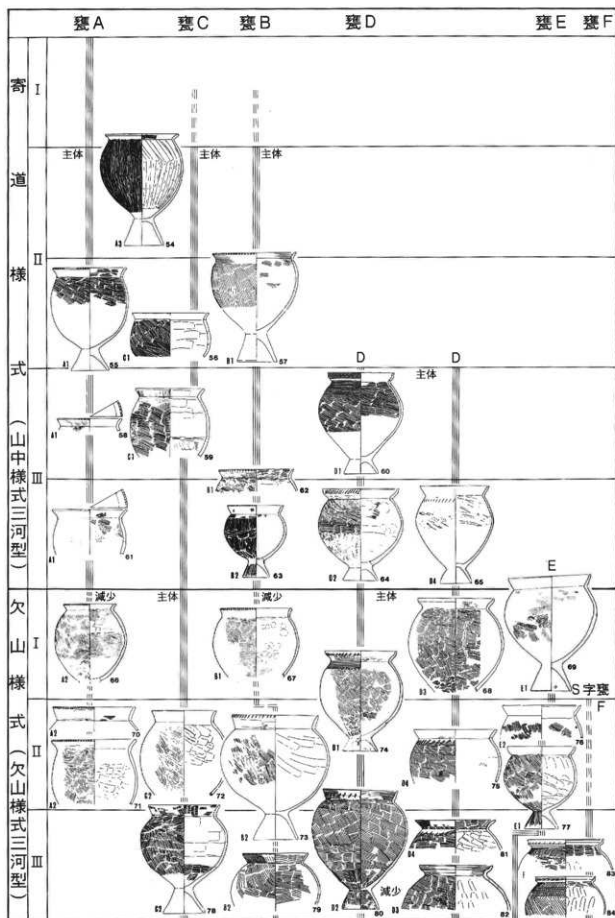
○No. は参考文献



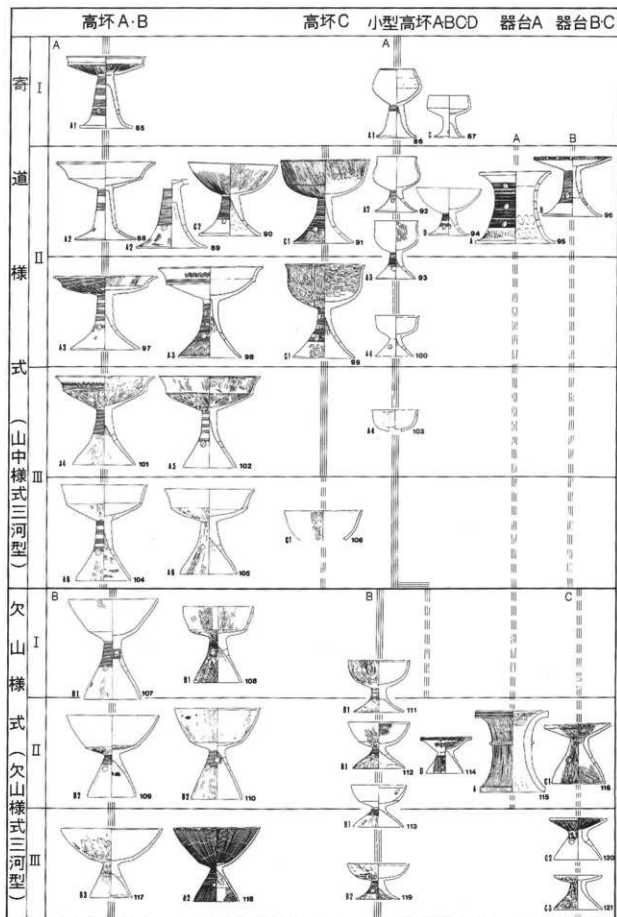
挿図14 三河の後期弥生土器編年図-1 (1/10)



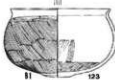
挿図15 三河の後期弥生土器編年図-2 (1/10)



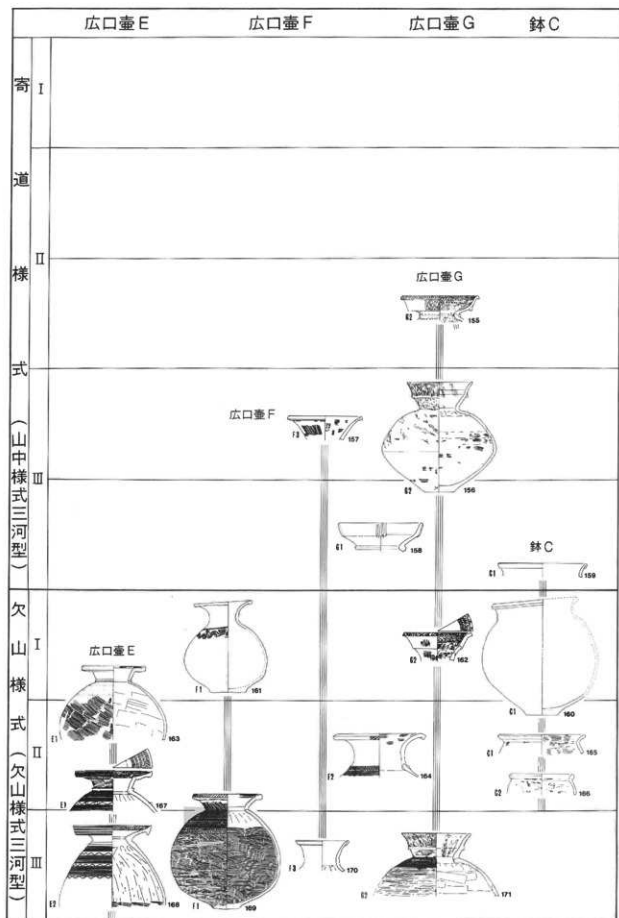
挿図16 三河の後期弥生土器編年図-3 (1/10)



挿図17 三河の後期弥生土器編年図-4 (1/10)

		鉢A	鉢B	鉢D	碗形鉢ABC	極小鉢	その他
寄道様式 (山中様式三河型)	I						
	II						
	III			 			
	IV						
欠山様式 (欠山様式三河型)	I						
	II		 	 	 	 	    
	III						

挿図18 三河の後期弥生土器編年図-5 (1/10)



挿図19 三河の後期弥生土器編年図-6 (1/10)

挿表15 形式消長表一1

		広口量			広口量			長頸量			直口量			頸量			脚付量			脚付量			脚付量			變			變			變		
		A	B	C	D	E	A	A1	A2	A3	A4	B1	B2	A	B	A	B1	B2	A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	E	F				
寄道様式	I	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■			
	II	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
	III	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
欠山様式	I	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
	II	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				
	III	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■				

挿表16 形式消長表—2

		高 坏						高 坏			小型高坏 A				小型高坏 B		小型高坏 C	小型高坏 D	鉢 A			鉢 B			鉢 D			碗形鉢 A			手あぶり
		A						B			A				B		C	D	A			B			D			A			A
		A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2	B3	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C	D	A1	A2	A3	B1	B2	B3	D1	D2	D3	A1	A2	A3	A
寄道様式	I																														
	II																	?	?			?			?			?	?		
	III																	?													
欠山様式	I																														?
	II																														
	III																														

挿表17 編年図使用土器の出土遺跡一覧表

遺跡・遺構名	編年図No.
高井遺跡 (SD-1) 6層	8,34,55,56,97
4・5層	9,10,14,35,36,37,38,58,59,60,89,101,102,103, 129,130,131,132,133,134,156
3A	12,13,40,104,105,135,158
3B	11,61,64,136,162
3C	107,108
3D	39,106,110
3層他	62,63,85,157,159
1・2A	75,109,141,149,164
1・2B	15,16,44,49,73,76,111,112,138,163
1・2C	21,22,23,24,51,77,78,113,117,119,120,121,143, 145,152,153,154,169,170,171
1・2D	70,83
1・2層	147,148,150,165,166
高井遺跡 (表採品)	5,6,7,32,33,57,98,99,100,155
郷中遺跡	(SB10)4,88, (SD09)92,96, (SD08)92, (SD09)96
東光寺遺跡 (SD02)	43,137
(SD08)	1,25,95,122,127
(SD09)	91,128
(SD10)	2,3,26,27,29,30,31,54,90,93,123,124,125,126
東光寺遺跡 4・5・6次	94
欠山遺跡 (SD2下層)	41,66,67,69
(SD1純貝層)	47,68,71,72,74,114,116,146,151
他	28,50,142,144
欠山第Ⅱ貝塚 (溝)	17,18,19,20,45,46,48,115,139,140
柳原遺跡	79,80,81,84,118,168
中村遺跡	82,167
矢作川河床遺跡	86,87
高木遺跡 (第1方形周溝墓)	42
本神遺跡 (壕状遺構)	52,53
西山遺跡	(NA12区住居址1)65, (NA21区住居址2)160,161

参 考 文 献

- 豊橋市教育委員会 1963年 『瓜郷』②
 豊橋市遺跡調査会 1988年 『西山』⑦
 豊川市教育委員会 1989年 『郷中・雨谷』①
 新城市教育委員会 1989年 『南海津遺跡』⑥
 小坂井町教育委員会 1961年 『行明遺跡』『篠東』④
 小坂井町教育委員会 1994年 『欠山遺跡』⑧
 幸田町教育委員会 1987年 『東光寺遺跡発掘調査概要報告書 第1・2・3次調査』
 幸田町教育委員会 1988年 『東光寺遺跡発掘調査概要報告書 第4・5・6次調査』
 西尾市教育委員会 1994年 『岡島遺跡』⑬
 幡豆郡吉良町教育委員会 1989年 『中根山遺跡』
 豊田市教育委員会 1969年 『高橋遺跡』⑬
 豊田市教育委員会 1989年 『高橋遺跡第九次発掘調査概報』⑭
 田原町教育委員会 1991年 『山崎遺跡』
 一宮町教育委員会 1989年 『宮沢遺跡』
 新編岡崎市史編さん委員会 1987年 『新編 岡崎市史 史料考古上15』⑫
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1988年 『年報 昭和62年度』
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1989年 『諏訪遺跡 杉山遺跡』⑪
 財団法人愛知県埋蔵文化財センター 1993年 『東光寺遺跡』③
 愛知考古学談話会 1986年 『欠山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 ⑨
 東海埋蔵文化財研究会 1991年 『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』資料集
 第3回東海埋蔵文化財研究会 浜松大会 ⑪
 浜松市教育委員会 1979年 『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』⑫
 浜松市教育委員会 1982年 a 『向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報』⑬
 浜松市教育委員会 1982年 b 『伊場遺跡遺物編3』(弥生土器編)⑬
 浜松市教育委員会 1989年 『浜松市山の神遺跡発掘調査報告書』⑮
 浜松市教育委員会 1991年 『瓦屋上古墳群』⑭
 浜松市遺跡調査会 1980年 『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』⑫
 浜松市遺跡調査会 1982年 『椿野遺跡』⑮
 浜松市遺跡調査会 1983年 『国鉄浜松工場内(梶子)遺跡 第Ⅵ次発掘調査概報』⑮
 浜松市遺跡調査会 1985年 『椿野遺跡』⑮
 財団法人浜松市文化協会 1991年 『梶子遺跡Ⅶ』⑬
 赤塚次郎 1990年 『考察』『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 赤塚次郎 1992年 『山中式土器について』『山中遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
 鈴木 徹 1994年 『欠山式土器について』小坂井町1994と同じ
 久永春男 1963年 『弥生式土器総括』豊橋市1963と同じ
 鈴木敏則 1985年 『欠山式の地域性』『転機 創刊号』⑮
 鈴木敏則 1986年 『渥美町大本貝塚・豊川市白鳥遺跡出土土物』『ホリデー考古 第6号』
 鈴木敏則 1988年 『山中様式三河型(寄道様式)』『三河考古 創刊号』⑤
 鈴木敏則 1991年 『後期弥生土器』浜松市1991と同じ

○No.は挿表14三河・西遠江後期弥生土器基準編年遺構一覧表に使用した文献

報告書抄録

ふりがな	たかいいせき							
書名	高井遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	賛 元洋、鈴木敏則							
編集機関	豊橋市教育委員会							
所在地	〒440 豊橋市向山大池町20-1 (豊橋市民文化会館内) TEL0532-61-5111							
発行年	1996年2月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °		m ²	
たかい 高井	とよはし しーしーあきほまち 豊橋市石巻本町 あきほつり 字盤割	23201	79318	34度 47分 50秒	137度 25分 50秒	1次調査 19910425～ 19910510 2次調査 19920208～ 19920319	1,146	土壌改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高井遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代 古墳時代	方形周溝墓 環濠 竪穴住居 掘立柱建物 溝 その他 土壌等	1基 1条 3棟 4棟 6条	縄文土器、弥生土器 須恵器、土師器、ガ ラス玉、鉄鎌、砥石 鳥形土器、土製紡錘 車 (竜のヘラガキ)		弥生後期の環濠から多 量の土器出土、山中式 欠山式が上下の層で出 土、土製紡錘車に竜の ヘラガキ、甕を持つ堅 穴住居 (5世紀後半)	